

米沢城跡

発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-2001-1909-01

1999

2001
1909
6

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

正誤表

山形県埋蔵文化財センター調査報告書 第66集

米沢城址発掘調査報告書

よね ざわ じょう あと
米 沢 城 跡

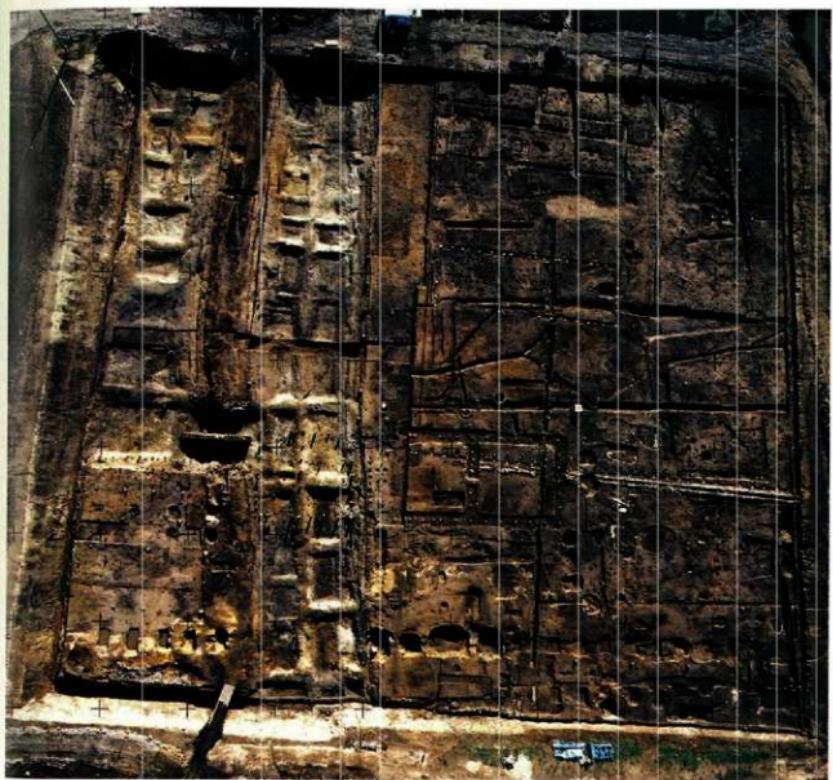
発掘調査報告書

平成11年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター



調査区近景（南東から）



調査区全景

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、米沢城跡の調査成果をまとめたものです。

米沢城跡は、山形県南部の米沢市に位置します。米沢は、中世には伊達氏、近世以降は上杉氏の居城が置かれ、現在でも城下町の風情を残す地域です。

この度山形県立置賜広域文化施設（仮称）建設事業に伴い、工事に先立って米沢城跡の発掘調査を実施しました。

調査では、大規模な二の丸の掘跡を確認し、堀底に障壁を持つ隙子堀と呼ばれる特殊な構造の堀であったことが明らかになりました。堀跡からは、中世末から近代までの城内の生活の様子を物語る多量の遺物が出土しました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私達の重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成11年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は山形県立置賜広域文化施設（仮称）建設工事に係る「米沢城跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県文化環境部の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記の通りである。

遺　跡　名	米沢城跡　遺跡番号 1216
所　在　地	山形県米沢市丸の内一丁目
調　査　主　体	財団法人山形県埋蔵文化財センター
調　査　期　間	平成10年4月1日～平成11年3月31日
現　地　調　査	平成10年7月13日～平成10年12月10日
調　査　当　者	調査第二課長 野尻 優 主任調査研究員 尾形 與典 調　査　研　究　員 高桑 登 嘱　託　職　員 黒沼 幹男
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたっては、以下の方々や関係機関から御指導・御協力をいただいた。ここに記して感謝申し上げる。(敬称略)

山形県文化環境部文化振興課、米沢市教育委員会、東南置賜教育事務所
飯村均、石田明夫、井上喜久男、大橋康二、金森安孝、菅野崇之、日下正剛、佐藤洋、汐見一夫、関根達人、田中則和、平田楨文、藤澤良祐、堀内秀樹、堀江格、松井敏也、三上喜孝
- 5 本書の作成・執筆は、高桑登が担当し、黒沼幹男がこれを補佐した。編集は須賀井新人、尾形與典、長瀬えみ子が担当し、全体については野尻優が監修した。
- 6 委託業務は下記の通りである。

遺構写真測量・基準点測量については、株式会社国際航業に委託した。
資料の理化学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
金属製品の材質同定については、帝京大学山梨文化財研究所に委託した。
脇差鞘・柄の樹種同定については、株式会社パレオ・ラボに委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類については、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号は次の通りである。

S D…堀跡	S K…土坑	S F…土壠状遺構	S X…性格不明遺構
--------	--------	-----------	------------
- 2 遺構番号は現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆基準は下記の通りである。
 - (1) 調査区概要図、グリッド設定図、遺構配置図、遺構平面図の方位は座標北を示す。
 - (2) グリッドの南北軸はN-13°51'29"-Eである。
 - (3) 遺構・遺物実測図の縮尺はそれぞれに示した。
 - (4) 描図中のスクリートーンは特に指示しないものについては、以下の通りである。

遺構実測図 木 :	礫 :
遺物実測図 黒色漆 :	赤色漆 :
炭化・煤付着 :	
 - (5) 陶磁器の釉の掛かる範囲は一点破線で示した。
 - (6) 断面のみを図示した陶磁器の択影図は、断面左側が内面、右側が外側である。
 - (7) 木製品のうち年輪方向がわかるものは、同心円または直線で模式的に示した。
 - (8) 遺物観察表中の()は復元による推定値、[]は残存値を示す。
 - (9) 遺物観察表中「胎土」欄の略号は以下の通りである。

赤:赤色粒	白:白色粒	黒:黒色粒	
石:石英	長:長石	雲:雲母	海:海綿骨針
 - (10) 遺物図版は、任意の縮尺とした。
 - (11) 掲載遺物番号は、挿図、表、図版とともに共通とした。
 - (12) 土層断面図、遺物観察表の色調の記載は、1987年度農林水産省農林技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」に従った。

目 次

I 調査の経緯	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の概要と方法	1
II 遺跡の概要	4
1 地理的環境	4
2 歴史的環境	4
3 遺跡の層序	6
III 遺構と遺物	6
1 遺構と遺物の分布	6
2 遺構	7
3 遺物	11
IV 調査のまとめ	18
1 遺構	18
2 遺物	19

報告書抄録

付編

- 「米沢城跡の自然科学分析」
- 「米沢城跡出土脇差鞘・柄の樹種同定」

表

表1 木製品集計表	55
表2 金属製品集計表	55
表3 石製品集計表	55
表4 土器・土製品・陶磁器観察表	88
表5 木製品観察表	96
表6 石製品観察表	101
表7 金属製品観察表	101
表8 土器・土製品集計表	102
表9 磁器集計表	102
表10 陶器集計表	103

挿 図

第1図 遺跡位置図	2	第34図 S F 3・遺構外出土土器・陶磁器	55
第2図 調査区概要図	2	第35図 中層出土木製品(1)	56
第3図 グリッド設定図	3	第36図 中層出土木製品(2)	57
第4図 遺構配置図	21	第37図 中層出土木製品(3)	58
第5図 下層遺物分布図	23	第38図 中層出土木製品(4)	59
第6図 遺物分布(1)	25	第39図 中層出土木製品(5)	60
第7図 遺物分布(2)	26	第40図 中層出土木製品(6)	61
第8図 S D 1・2	27	第41図 中層出土木製品(7)	62
第9図 S D 1・2、S F 3	29	第42図 中層出土木製品(8)	63
第10図 堀跡エレベーション	31	第43図 中層出土木製品(9)	64
第11図 S D 6 平面図	32	第44図 中層出土木製品(10)	65
第12図 S D 6 土層断面図	33	第45図 中層出土木製品(11)	66
第13図 脊差出土状況、S X 7・8 S K 11	34	第46図 中・下層出土木製品	67
第14図 S X 9・10	35	第47図 下層出土木製品(1)	68
第15図 上・中層出土土器・陶磁器	36	第48図 下層出土木製品(2)	69
第16図 中層出土土器・土製品	37	第49図 下層出土木製品(3)	70
第17図 中層出土土製品・陶器	38	第50図 下層出土木製品(4)	71
第18図 中層出土陶器(1)	39	第51図 下層出土木製品(5)	72
第19図 中層出土陶器(2)	40	第52図 下層出土木製品(6)	73
第20図 中層出土陶器(3)	41	第53図 下層出土木製品(7)	74
第21図 中層出土陶磁器	42	第54図 下層出土木製品(8)	75
第22図 中層出土磁器(1)	43	第55図 下層出土木製品(9)	76
第23図 中層出土磁器(2)	44	第56図 下層出土木製品(10)	77
第24図 中層出土磁器(3)	45	第57図 下層出土木製品(11)	78
第25図 下層出土土器(1)	46	第58図 下層出土木製品(12)	79
第26図 下層出土土器(2)	47	第59図 下層・S D 6 出土木製品	80
第27図 下層出土土器(3)	48	第60図 S D 6・S X 10出土木製品	81
第28図 下層出土土器(4)	49	第61図 石製品	82
第29図 下層出土土器・陶器	50	第62図 石・金属製品	83
第30図 下層出土陶器(1)	51	第63図 銭貨(1)	84
第31図 下層出土陶器(2)	52	第64図 銭貨(2)	85
第32図 下層出土陶磁器	53	第65図 脇差(1)	86
第33図 下層出土磁器	54	第66図 脇差(2)	87

図 版

- 卷頭図版 1 調査区近景
卷頭図版 2 調査区全景
図版 1 調査区全景他
図版 2 堀跡土層断面
図版 3 S D 6 土層断面他
図版 4 S D 6 北壁他
図版 5 S D 6 南壁他
図版 6 S F 3 上面整地層他
図版 7 S D 1 遺物出土状況
図版 8 臨差出土状況他
図版 9 土器(1)
図版10 土器(2)
図版11 土器(3)
図版12 土器・土製品
図版13 土製品・磁器
図版14 磁器(1)
図版15 磁器(2)
図版16 磁器(3)
図版17 磁器(4)
図版18 磁器(5)
図版19 陶器(1)
図版20 陶器(2)
図版21 陶器(3)
図版22 陶器(4)
図版23 陶器(5)
図版24 陶器(6)
図版25 陶器(7)
図版26 陶器(8)
図版27 陶器(9)
図版28 陶器(10)
図版29 木製品(1)

- 図版30 木製品(2)
図版31 木製品(3)
図版32 木製品(4)
図版33 木製品(5)
図版34 木製品(6)
図版35 木製品(7)
図版36 木製品(8)
図版37 木製品(9)
図版38 木製品(10)
図版39 木製品(11)
図版40 木製品(12)
図版41 木製品(13)
図版42 木製品(14)
図版43 木製品(15)
図版44 木製品(16)
図版45 木製品(17)
図版46 木製品(18)
図版47 木製品(19)
図版48 木製品(20)
図版49 木製品(21)
図版50 木製品(22)
図版51 木製品(23)
図版52 木製品(24)
図版53 木製品(25)
図版54 木製品(26)
図版55 石製品(1)
図版56 石製品(2)
図版57 金属製品
図版58 銀貨、S K11出土クルミ
図版59 臨差(1)
図版60 臨差(2)

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

米沢城跡は、現在上杉神社が所在する本丸及びその周囲の二の丸、東西約600m、南北560m、面積336,000m²の範囲が遺跡として登録されている(第2図)。

今まで米沢市教育委員会によって、1986年第1次、1989年第2次、1990年第3次、1991年第4・5次の調査が行われている(米沢市教育委員会1987、1992a、1994)。第2・3次調査では、本丸堀底から、堀を全周すると考えられる杭列が出土している。第4次調査では二の丸の内部が調査され、中世末から近世の遺物・遺構が出土している。

今回の調査区は県立米沢工業高校の旧敷地にある。工業高校移転後、この地に平成13年秋の開館予定で、県立置賜広域文化施設(以下文化施設)及び米沢市立博物館(以下博物館)の建設が計画された。平成9年11月10日、同年12月8日、県教育委員会が県立米沢工業高校校舎解体工事に伴う試掘調査を行った。その結果、堀跡・池跡・柱穴・土坑・溝跡等の遺構を確認した(山形県教育委員会1998)。これらの調査結果をもとに、県教育委員会は関係機関と遺跡の取り扱いについて協議をした結果、文化施設及び博物館建設予定地について記録保存のための発掘調査を実施することになった。

発掘調査に至るまでの協議等は以下の通りである。

◆山形県知事より県埋蔵文化財センター理事長あてに「文化環境部置賜広域文化施設関係建設に伴う地区内の埋蔵文化財発掘調査」の依頼(H10/2/25)

◆県埋蔵文化財センター理事長より山形県知事あてに、発掘調査を実施すること及び経費見積りの回答(H10/3/26)

◆山形県知事と県埋蔵文化財センターとの「文化環境部置賜広域文化施設関係埋蔵文化財発掘調査業務委託契約」を締結(H10/4/1)

2 調査の概要と方法

今回の調査は文化施設及び博物館の建設予定地10,000m²を対象に実施した。文化施設にあたる地区5,000m²を埋文センターが、博物館にあたる地区5,000m²を米沢市教委がそれぞれ担当した(第2・3図)。調査区のグリッドは、米沢市教委と共通の基準で、建設予定地区に合わせて設定した。東西軸をX軸、南北軸をY軸とし、西から東、南から北へ2m毎に番号を付した。遺構の登録、遺物の取上げは、4m四方のグリッドを基準に行い、グリッド北西隅の座標をグリッド名としている。82-92グリッドの国土座標は、平面直角座標系第X系:X=-232292.347 Y=-63580.485である(第3図)。

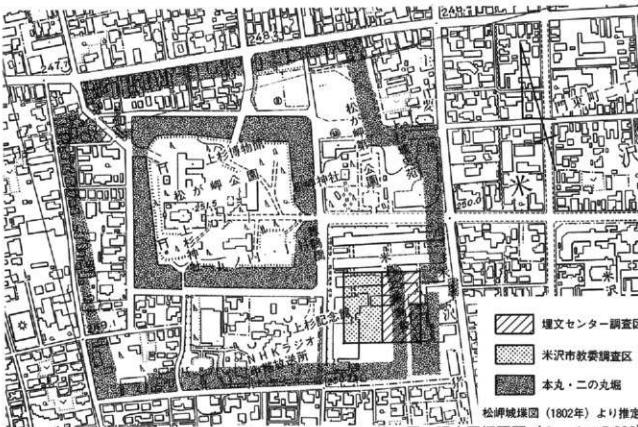
調査は、重機による表土の除去から開始した。遺構確認面まで校舎建築時の盛土やグランド整地層を約1m除去した。その結果、埋文センター調査区のほとんどが堀にあたることを確認し、堀に堆積していた1mの石炭滓・近代遺物の廃棄層をさらに重機で除去した。

堀は長さ90m、幅40mの規模で、中央に堀を東西に仕切る土壙状の施設を確認した。西側の



1 米沢城跡（中世～近世） 2 西町田下遺跡（奈良・平安） 3 大浦A～D遺跡（奈良・中世）
4 荒川2号遺跡（編文～中世） 5 上浅川遺跡（奈良・平安～中世） 6 東屋敷遺跡（奈良・一世～近世）
7 我妻遺跡（中世） 8 矢子山城跡（中世） 9 横山平城跡（中世） 10 一ノ坂遺跡（編文） 11 上杉家廟所（近世）

第1図 遺跡位置図（国土地理院発行 5万分の1地形図「米沢」を使用）

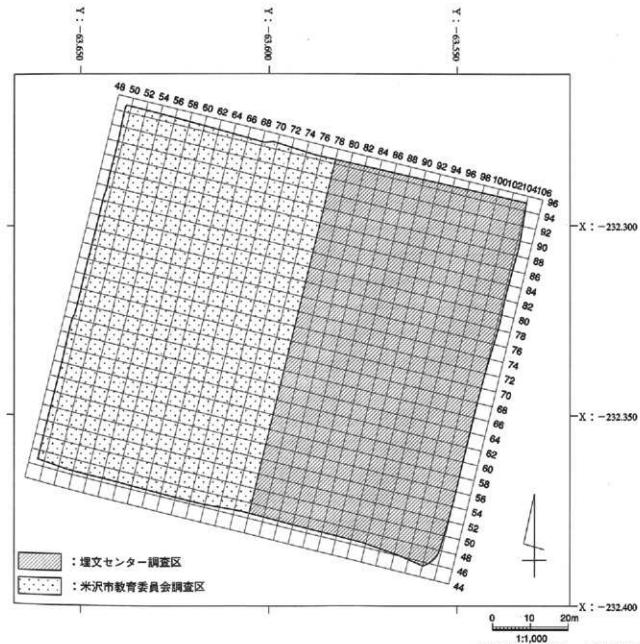


第2図 調査区概要図 ($S = 1 : 5,000$)

堀をSD1、東側の堀をSD2、土壙状の施設をSF3、SF3が途切れるSD1・2の通水部分をSD6と登録した。

SD1・2にそれぞれ北・中央・南の各トレンチを設定し、人力による精査を行った。精査の結果壠から外れていることがわかったSD2北トレンチ以外の、5本のトレンチについては土壠断面図を作成し、壠の堆積土が大きく3層に分かれることを確認した。

遺物の出土が少なかった上層(1層)を再度重機によって除去し、中層(2層)、下層(3層)については人力で精査を行った。精査の過程で、2層、3層の下にさらに堆積層が確認されたため、それぞれ2層下、3層下の層位名で遺物を取り上げた。(以下、遺構名を付さず層位名のみ記述している場合はSD1・2の各層位を表す)。



第3図 グリッド設定図

遺物は、トレンチ、2層、SD 6、遺構外についてはグリッド毎、3層、2層下、3層下について三次元座標を記録して取り上げた（第5図）。最初に調査を行ったSD 1北トレンチは正確な分層ができなかつたため、単に「上層」、「下層」に分けて遺物を取り上げている。

整理作業は、最初に遺物洗浄・注記を行った。層位名は、現場で付したものそのまま注記したが、報告書記載の段階で2層下、3層下は同一層位であると判断し、4層に統一した。

次に、遺物を焼成・材質毎に分類し、さらに器種、形状に細分し、土器・陶磁器は破片数、木・石・金属製品は個体数をカウントした。土器・陶磁器は復元後、個体識別法で個体数の推定を行った（表1～3、8～10）。ただし1層については、重機で掘り下げを行ったことから、集計からは除外した。木製品の木羽についても、個体の識別が困難なこと、非常に薄く現場でのサンプリングエラーの可能性があることから集計から除外した。

報告書には以下の基準で掲載した。1層出土遺物は、トレンチ出土のものを中心に特に注目できる遺物のみを掲載した。2～4層の土器・陶磁器、棒状・板状・木羽以外の木製品については、器形の推定が困難な小片、部体のみの破片等以外は全て掲載した。棒状・板状木製品、木羽については、全長または全幅が計測可能なもの、加工痕、使用痕等が明瞭なものを掲載した。石・金属製品は全て掲載した。

挿図は材質－遺構－層位－生産地等・形状－器種・部位の順で分類して掲載した。ただし、SD 1とSD 2は各層位の様相が共通することからまとめて掲載した。層位の記述は、1層を上層、2層を中層とし、3層、4層は接合する破片が多いため下層と統一して掲載した。集計表、観察表には1～4層の各層位をF 1～4と記載している。同一個体で複数の層から出土した破片が接合した場合は、下の層に所属させた。

II 遺跡の概要

1 地理的環境

遺跡の所在する米沢市は、山形県の最南部に位置し、福島県と県境を共にする。東に奥羽山脈の一部の豪士山から栗子山へと山陵が連なり、南部は磐梯朝日国立公園の一角をなす吾妻山地が広がる。西部は笹野山地・玉庭丘陵と三方は山地・丘陵が占める。米沢市の中央部から北部は米沢盆地の南端にある平坦地である。吾妻山地を源流とする最上川（松川）やその支流の羽黒川・天王川（梓川）・鬼面川などによって形成された扇状地群が広がる。米沢盆地はこのような高い山々に挟まれた寒暖の差が大きい内陸型の気候で、県内でも降雪量の多い地域である（米沢市史編さん委員会1997）。

米沢城跡は、扇状地の扇端部に位置する米沢市街地の中心部に所在する。周辺は市街化が進んでいる。

2 歴史的環境

米沢市には600カ所を超える遺跡の存在が知られている。特に縄文時代の遺跡はその半数近

くを数え、河川流域にそって広範囲に分布している。山麓や平地には、古墳、集落、城館などの遺跡が点在している（第1図）。

これまでの発掘調査の結果をふまえ、米沢城跡周辺の主な遺跡について概観してみる。

平成8年度国指定史跡となった一ノ坂遺跡は、市街地の西方2kmの笹野山西端の微高地に位置し、縄文時代前期初頭の遺跡とされている（米沢市教育委員会1996）。米沢市街地の北に位置する荒川2遺跡、西町田下遺跡、大浦遺跡群はいずれも奈良・平安時代の遺跡で、直径約1kmの範囲内に分布している。荒川2遺跡では川跡から多量の土器が出土している（財團法人山形県埋蔵文化財センター1997a）。西町田下遺跡では幅6mの道路跡が見つかっている。また、円面鏡が10個体出土しており、官衙的な性格が想定されている（財團法人山形県埋蔵文化財センター1997b）。大浦B遺跡では、規則的な配置の建物群や布目瓦、具注墨の漆紙文書などが出土しており、置賜郡衙の可能性が指摘されている（米沢市教育委員会1993）。

荒川2遺跡、大浦C遺跡、上浅川遺跡、東屋敷館跡、我妻館跡では、方形館または方形館を構成すると考えられる溝跡が確認されている。荒川2・大浦C遺跡からは、伊達家の家紋の三引弓が描かれた漆器が出土しており、伊達家との関連が想定されている。これらの方形館は16世紀末から17世紀初頭を画期に、廃絶するものと新たに成立するものが認められ、領主の交代に伴っての在地構造の変化が想定される（財團法人山形県埋蔵文化財センター1997a、米沢市教育委員会1992b、1985、1998、1995）。

米沢城の成立時期は、文献、考古資料ともに不明確であるが、本格的に城下町が形成されたのは、伊達晴宗が米沢城を本拠とする天文17年（1548）以降と考えられる。この時期の米沢城は、城と城下町の位置関係等から、現在の本丸の位置にあったと考えられている（米沢市史編さん委員会1997）。天正19年（1591）、伊達政宗が岩出山に移封、米沢は蒲生領となり、蒲生郷安が米沢城主となった。慶長3年（1598）に上杉景勝が会津に移封となり、米沢は上杉領となつた。米沢城には直江兼続が配された。慶長6年（1601）には、会津120万石から米沢・福島30万石に減封され、以後米沢城が上杉氏の居城となる。さらに寛文4年（1664）には15万石に減封されている。

慶長6年に景勝は二の丸を普請して居住し、慶長9年（1604）から城郭の本格的な整備が行われた。同年、城内の門・堀・櫓の改築、慶長13・14年（1608・1609）三の丸造営、慶長14年（1609）には本丸南東隅に信玄の遺骸を祀る御堂、堀を挟んだ二の丸に真言宗の寺院が造営された（米沢市史編さん委員会1997、1991）。寺院が造営された地区が、今回の米沢市教委の調査区にあたる。

近代になって調査区周辺には、置賜県庁、米沢市役所、県立工業学校、工業試験場等、官庁・学校が置かれた。調査区内にはこれらの建物の基礎と考えられる木杭やコンクリート杭が多く打ち込まれている。特に北半部で複数が著しい。

堀の埋め立てに関する記事は、明治3年、堀・土塁、二の丸寺院を破却（米沢市史編さん委員会1986）、昭和2～6年、グランド拡張工事のため米沢駅から石炭津を運び堀の埋め立て（山形県立米沢工業高校創立九十周年・定期制四十年記念誌編集委員会1987）等がある。

3 遺跡の層序

米沢市教委調査区の基本層序をもとに遺跡の層序を記す。

I層は現地表から約80cmの厚さで堆積する。官庁や学校の建設に伴う整地土である。下位に大正8年の大火によると考えられる焼土層が含まれる。II層は厚さ約20cmの暗灰褐色砂質シルト層で、旧表土と考えられる。III層は灰褐色細砂質シルト層、遺構確認面である。堀の壁面での観察ではIII層の厚さは約50~100cmと安定しない。III層の下は砂礫層となる。堀にあたる部分では、I層の下に昭和2~6年に埋め立てられた近代遺物を多量に含む石炭津層が約1m堆積する。その下が堀の1層となる。

土壌構築時、または土壌削平時にII層が除去されているため不明確であるが、堀はII層上面から掘り込まれていると考えられる。堀底は概ね砂礫層であるが、旧河川が流れていた場所については砂礫層まで達しておらず、旧河川の堆積土が堀底となる。

旧河川は、78-62グリッドから102-74グリッドにかけて幅約10mのものと、調査区外のために幅は不明であるが78-84グリッドから88-94グリッドにかけてのもの、南西から北東に流れる2条が確認された。旧河川からは自然木以外の遺物は出土していないため、掘り下げを行わなかった。SD1東壁で検出された自然木(SD1・2 b-b'セクション西半9i層包含)は、一部が堀の壁面に露出しており、露出部分に堀削削時の工具痕が確認できる(第9図、図版6)。

III 遺構と遺物

1 遺構と遺物の分布

調査区のほぼ全域が二つの堀跡にある。西からSD1、SF3、SD2が平行して南北に伸びる。SF3は調査区北端で東に屈曲する。SD2はSF3が途切れる部分(SD6)で立ち上がる。調査区北端で東に屈曲したSF3の南東部は、長さ約23mの平場となり、ここから遺構は確認されなかつた(第4図)。SD1の東壁には、旧河川と重なる場所を中心に、壁の崩落、補修痕跡と考えられる遺構(SX7~10)が分布している。

遺物のほとんどは堀跡からの出土である。全個体数の9割以上がSD1から出土している。下層出土遺物の分布をみると、82-78グリッド周辺から集中して出土している他は、特に集中する傾向は見られない。垂直分布は、3層の上位、特に堀内障壁の頂部付近のレベルからの出土が多い傾向が認められる(第5図)。

遺物の種類毎に分布を見ると、陶磁器については下層では分布の偏りは見られないが、中層では堀の北半から多く出土する。この傾向は陶磁器に顯著で、木製品は中層、下層に分布の違いは見られない。廃棄後木製品が移動しやすい環境であったと考えられる。

中層、下層を合わせた中世と近世の遺物については、近世の遺物がSD1に集中するのに対して、中世の遺物は、近世遺物の分布の傾向と関わりなく、近世遺物の分布が薄い場所からも出土している。近世遺物は、堀の西側、二の丸内部から廃棄された結果、SD1に集中すると考えられる。中世遺物は、堀が掘られる以前の中世の遺構に包含されていた遺物が、堀の掘削

によって堀全体に分布したと考えられる(第6図)。

土師質土器皿、陶磁器、漆器の碗皿、碗皿以外の陶磁器の分布をみると、土師質土器皿は中層からの出土が少ないため明確ではないが、中層になると北半に偏る傾向は、どの遺物でも認められる。同じ層位での器種ごとの分布の違いは特に見られず、堀跡出土遺物の分布から、二の丸内部の場の性格の違いを判断することはできない(第7図)。

2 遺構

[SD1](第4・8・9・10図、図版1~3)

確認した規模は長さ92.4m、上幅16.2~19.5m、下幅7.8m~9m。遺構確認面からの深さ約2.5m。西壁で測った方向は、N-14°-Eである。80-76グリッド付近で西に8度屈曲する。堀底には格子状の障壁があり、いわゆる「障子堀」である。堀底の中央に南北の障壁が貫き、それに直交して大小の東西の障壁が接続する構造となる。障壁の構築方法は地山の掘り残しである。

南北障壁は堀の形状に合わせて84-70グリッド付近で西に4度屈曲する。屈曲部は障壁がランク状となる。調査区北端部でも南北障壁がランク状に屈曲する部分がある。

東西障壁は、南北障壁との接続部が十字になるものとT字になるものがある。また、障壁の頂部が南北障壁と同じ高さになると、一段低くなるものがある。

東西障壁の接続の仕方によって、SD1は次の4つのブロックに分かれる。便宜的にグリッドの南北座標をブロックの境界とする。調査区北端から78ライン(Aブロック)、78ラインから68ライン(Bブロック)、68ラインから58ライン(Cブロック)、58ラインから調査区南端(Dブロック)である。

Aブロックは、障壁の接続部がT字となり、東西障壁の頂部の高さは南北障壁と同じものが8基、段を持つものが1基。東西障壁の規模は、頂部幅75~128cm、高さ20~90cmと比較的大形のものが多い。

Bブロックは、障壁の接続部が十字となり、東西障壁の頂部の高さは南北障壁と同じである。東西障壁の規模は、頂部幅98~145cm、高さ35~80cmとAブロックと同様大形のものが多い。Bブロック南端の障壁は、旧河川上にあるため堀底の判断が困難で、トレンチ調査時に土層断面で堀底を確認している。そのため障壁の規模は不明であるが、調査時の状況からBブロックの様相と同一と判断した。

Cブロックは、障壁の接続部が十字となり、東西障壁の頂部の高さは南北障壁と同じものが2基、段を持つものが4基。東西障壁の規模は、頂部幅25~50cm、高さ20~80cmと小形のものが多い。

Dブロックは、障壁の接続部がT字、1ヶ所のみ十字となる。東西障壁の頂部の高さは南北障壁と同じものが4基、段を持つものが3基。東西障壁の規模は、頂部幅50~100cm、高さ10~50cm。障壁の高さが低く、障壁内の区画が不整形になるものが多い。他のブロックでは区画の底面が平坦なのに対し、Dブロックでは凹凸が目立つ。南端の障壁は十字に接続し、規模

が大きいことから、ここから南は様相が異なる可能性がある。

堀底のレベルは、区画毎に異なる。A・B・Dブロックでは北の区画が高く、南が低い。Cブロックではその逆となる。Aブロックの南端の区画と、Bブロックの北端の区画では、Bブロックの方が高い。

壁面の傾斜は西壁が21°～23度、東壁が22°～28度、南に行くほど急になる傾向がある。Aブロック、Dブロック南半では西壁の一部が階段状になる。

西壁には、東西障壁の接続部周辺に平場が作られる。Aブロックで特に顕著である。

東西壁に土留施設と考えられる杭列を、西壁は1列、東壁は2列（一部で1列）検出した。杭の上端は遺存していない。杭の直径は10cm前後のものが多く、壁面から約1～1.2m打ち込まれている。東壁北端では、杭列に丸木の横木が付属する。

堆積土は大きく1層～4層に分かれる。

1層は地山ブロックを多量に含む層である。c-c'セクション西半で観察できる西側から斜めに堆積する状況から、土壘を削平した土の人为堆積層と考えられる。

2層は植物遺体を多量に含む自然堆積層である。マツ葉、スギ葉・球果、サワラ葉などの植物遺体が多量に含まれる。

3層は均質な黒色粘質シルトが堆積する水性堆積層である。

4層は砂礫を多く含む層で、堀の壁面及び堀内障壁が崩落して堆積した自然堆積層である。

【SD 2】(第4・8・9・10図、図版1～3)

確認した規模は長さ61.8m、上幅14.3～17.5m、下幅9～10m。遺構確認面からの深さ約2.5m。東壁は調査区外のため確認していない。SD 1と同様、掘底に障壁を持つ障子堀である。

堀の全幅を確認していないため、堀内障壁の全体の配置は不明である。調査区東端で確認した障壁が、堀を南北に貫く可能性がある。SD 1に比べ、障壁の頂部幅が広い。各障壁の接続部は平坦で段を持たない。

SD 2の堀内障壁も、SD 1で設定した各ブロック毎に様相が異なる。それぞれA'～D'ブロックとする。

A'ブロックはSD 2北の平場である。図化していないが、近代以降の杭列が全域に分布する。北西隅(92-88グリッド周辺)に、近代の木製品が水に流れ落ち寄せられたような状況で集中して出土しており、水に浸かった時期もあったと考えられる。

B'ブロックは、調査区東端で確認した南北障壁に規模の大きい東西障壁が接続する。南北障壁の北半は不明確であった。東西障壁の規模は、頂部幅150～320cm、高さ25～30cm。区画の規模は最大である。北側の東西障壁には、先端がかぎ形に曲がる規模の小さい障壁が段差を持つ接続する。

C'ブロックは、頂部幅3.5m以上と規模の大きい南北障壁に東西障壁が接続する。東西障壁の規模は、頂部幅80～200cm、高さ25～60cm。大きさのはば同一な3つの区画が連続する。

D'ブロックは、C'ブロック南端の東西障壁中央に小規模の南北障壁が接続し、小南北障壁に東西障壁がT字に接続する。障壁の規模は、頂部幅100～180cm、高さ30～50cm。西壁が94-

58グリッドで東に膨らんでおり、北東の区画はその膨らみに合わせて不整形方となる。

C'・D'ブロックの各区画の東辺(南北障壁の西辺)はほぼ直線となり、方向はN-12.5°～Eである。

壁面の傾斜は西壁が19～28度、北壁が26度。西壁はSD 1と同様、南ほど急傾斜となる。西壁の中央部は、塙が東に張り出す。張り出し部分には長さ21.3m、最大幅1.5mの平坦部(南平坦部)が作られる。西壁北半には南平坦部より上位に、長さ22m、最大幅1mの平坦部(北平坦部)が作られる。北平坦部の一部は92-70グリッド周辺で溝状になる。

西壁、北壁に杭列を検出した。杭列は北壁西半では幅約1mの範囲にランダムに分布する。南平坦部では、平坦部の形状に沿って、2列またはランダムに分布する。北平坦部及び西壁南端部では、杭列に横木が付属する。横木は板状、一部で丸木である。

堆積土はSD 1と同様に大きく4層に分かれる。各層の様相はSD 1と共通するが、1層の地山ブロックがグラウジ化しており、1層堆積後も水分が豊富な状況であったと考えられる。

b-b'セクション東半は堀内障壁の頂部で記録したため、3層の厚さが15cmしかないが、他の部分では40～50cmの厚さで堆積している。

【SD 3】(第4・9図、図版1・6)

SD 1とSD 2の中央の土壘状の施設である。確認した規模は、長さ92.5m、頂部幅2.5～5.8m。方向はN-18°～Eで、90-64グリッド付近で西に8度屈曲する。SD 6によって10.9m途切れ、調査区北端で東へ直角に折れる。

構築方法は地山の掘り残しで、上部に一部整地層が確認された。整地層から16世紀初頭の遺物が出土していることから、周辺一帯に分布していた中世の整地層が、堀の掘削によってSF 3の上部にのみ残存したものと考えられる。整地層上面から打ち込んだ杭の痕跡を検出した(図版6)。SD 6によって途切れ部分の南北には、角材を埋設し、周辺に杭を打ち込んでいる。

SF 3は、絵図に描かれた城内への導水施設である「御入水」の基部にあたると考えられる。SD 6南北の角材と杭は、SD 6に樋を渡した痕跡と考えられる。他の導水施設の痕跡は削平されている。

【SD 6】(第11・12図、図版3～5)

SF 3が途切れるSD 1とSD 2の通水部分である。上幅10.9m、下幅5.9m。南北壁に、頂部幅60cm、高さ60cmの堀内障壁が接続する。南北壁に杭と石による護岸施設を検出した。北壁は搅乱によって東半部が破壊されている。

護岸施設の構築方法を、遺存状態の良い南壁を中心に記述する。

①壁面を階段状に掘り込む。掘り込みは北壁では明確でない。②階段の下段先端部に直径10～20cmの杭を約50cm間隔で斜めに打ち込み、杭を蔓状の植物で縛る。中央部は杭の間隔が150cmと広い。杭の多くは断面が多角形に加工されている。③杭の間隔が広い中央部の補強のため、杭の内側に長さ90～230cmの角材及び丸木を5本横に設置し、杭の外側に直径10cm前後の杭を隙間なく打ち込む。角材は最も太いもので約15cm丸木は直径10cm。角材の先端にはほぞやはぞ穴

があり、建築部材の転用と考えられる。横木は北壁では設置されていない。(第11-3図) ④打ち込まれた杭列の中に、10~60cm大の石を積む。石積みの下層は10cm大の石を詰め込み、上層に50~60cm大の俵型の石を部分的に石垣状に積む。石は河原石が大半で、凝灰岩の切石が少量含まれる。(第11-2図)

護岸施設の内部ではSD1・2の杭列が連続しているため、護岸施設は堀が掘削された当初はなかったと考えられる。

SD6はある時期に、東西を遮蔽され埋め立てられている。SD6の4b層、6層が、それぞれSD1・2の2層、3層に対応することから、SD1・2の2層が堆積している期間内に埋め立てられたと考えられる。

埋め立て部分の規模は、南北10.9m、東西6.6m。埋め立て方法は、①SD6の東西に直径10cm前後の杭を10~30cm間隔で打ち込む。杭列の長さは西側8m、東側9.8m。②杭列の外・内側に横木を設置し、東側の一部では杭列に内側から板を立て掛ける。③東側のみ、長さ150~180cm、太さ18cm角の角材(八角形に面取り)を1.8~2.4m間隔で東西に置く。角材はほぞ穴があり、建築部材の転用と考えられる。④角材の先端部のはぞ穴に杭を打ち込む。⑤東西杭列の間を土で埋め立てる。埋め立て後はSF3がつながり、御入水の導水施設が設置されたと考えられる(第11-1図)。

SD6周辺は近代の建物基礎の杭が多数打ち込まれていた。杭の規模や遺存状況から近代のものと判断した杭については図化していない。SD6底面の南北障壁部と頂部に打ち込まれていた杭も現地では近代のものと判断したが、SD6埋め立て以前に樋を渡した施設の可能性も残されている。

【SX7・8】(第13図、図版6)

SX1の東壁で検出した。東西障壁が東壁に取り付く部分の南北に位置する。SX7は長軸231cm、短軸127cmの不整長方形である。SX8は長軸402cm、短軸156cmの不整長方形である。壁面からの深さは5~30cm。堆積土は自然堆積である。堀削削中に崩落し、降雨等による土砂の流れ込みによって、堀完成前に埋没したと考えられる。

【SX9】(第14図、図版6)

SX1の東壁で検出した。長軸442cm、短軸224cmの隅丸長方形で、堀底からの深さ25cm。北東部分に、堀の壁面に沿って杭が6本打ち込まれる。堆積土は平坦部が人為堆積、斜面部が自然堆積である。崩落した壁面の補修痕跡と考えられる。

【SX10】(第14図、図版6)

SX1の東壁で検出した。SX9の2m南に位置する。長軸236cm、短軸152cm、堀壁面からの深さ44cm。壁の斜面下に向かって開口し、開口部が杭列で遮蔽される。1~3層は人為堆積、4~5層は自然堆積である。4層堆積後、南半部に円板状木製品、棒状木製品(第60図624~628)を置き、1~3層を埋めている。崩落した壁面の補修痕跡と考えられる。

【SK11】(第13図、図版6)

SD2の西壁で検出した。西壁杭列に隣接している。長軸164cm、短軸100cmの梢円形で、底

面は隅丸長方形となり、西側に段がある。SD2壁面からの深さ36cm。堆積土は人為堆積で、多量の木が含まれる。壁面に杭列の杭が露出していることから、杭打ち込み前に埋められたと考えられる。杭列設置時に不要な木材を廃棄したものと考えられる。

げつ歯類の食痕があるクルミの実が9点(図版58)出土している。

3 遺物

(1) 層毎の様相

【下層】

土器・土製品は、土師質土器皿、内耳土鍋が多く出土している。土師質土器皿は、個体数で下層出土の陶器の約28%を占める。内耳土鍋は大半が4層から出土している。

陶器は、肥前系、岸、瀬戸美濃、大堀相馬、会津本郷、京・信楽、產地不明のものが出土している。肥前系の碗、瀬戸美濃の志野丸皿、岸の撫鉢が量的にまとまっている。志野丸皿と同時期と考えられる肥前陶器は、胎土目の皿が1点出土しているのみである。

磁器は、中国、肥前系が出土している。器種は碗、皿、徳利のみで、量、器種のバリエーションともに少ない。平清水と考えられる小片が1点出土しているが、搅乱の多いSD1北トレンチからの出土であるため混入の可能性がある。

内耳土鍋、志野丸皿、白磁皿は、いずれも4層の床面直上から出土する例が多く、類似した出土状況を示す。堀が掘削された時期に近い時期に廃棄されたものと考えられる。

木製品は漆器椀が最も多い。下層が堆積した時期、碗は漆器が中心だったと考えられる。屋根材と考えられる木羽が多く出土している。

【中層】

土器・土製品は、土師質土器皿が最も多くが下層に比べて量が少なくなる。中層陶磁器の中で土師質土器皿が占める割合も6%と激減する。ふいご羽口、行火、火鉢など器種が増える。

陶器は下層と同様のものが出土しているが、肥前系、大堀相馬、会津本郷が多くなり、小野相馬、成島など新たな産地のものが加わる。瀬戸美濃はほとんど出土しなくなる。また、產地不明の陶器が増える。在地での陶器生産が増えたためと考えられる。

磁器は、中国、肥前系、產地不明のものが出土している。肥前系が最も多く、下層では見られなかった多様な器種が出土している。碗は、陶磁器、漆器を含めて肥前系が最も多い。

木製品は、漆器が比較的多く出土しているが、下層に比べてその比率は減少する。碗の主体が陶磁器に移ったためと考えられる。下層で多く出土した木羽はほとんど出土していない。また、楔の出土量が増加する。

金属製品は、下層に比べ出土量が非常に少ない。

(2) 土器・土製品

表面に撲しによる黒色処理が施されるものを瓦質土器、その他を土師質土器と分類した。器以外のものを土製品とした。

【土師質土器】(1 [上層]、6~23 [中層]、148~195 [下層]、270・271 [遺構外])

皿、内耳土鍋、焼塗壺、器種不明が出土している。

皿は全てロクロ成形で、底部の切り離しは、確認できたものは全て回転糸切りである。ロクロの回転方向は左回転が多く、右回転と判断できたものは1点(168)のみである。下層に比べ中層では器壁が薄いものが多い。

口縁部または内面に煤状の物質が付着するものが8個体、焼成後底部を穿孔しているものが4個体出土している。煤状物質は、見込みから口縁部にかけて斑状に付着するもの(11、13、19、172、158、159)と、口縁部内面に帯状に付着するもの(7、162)がある。使用状況が異なっていると考えられる。底部穿孔は、1ヶ所のもの(11、14、23)と4ヶ所のもの(173)がある。

内面に漆を塗り、その上に金箔または金泥が付着するものが5個体出土している。174は外面が被熱している。270は金箔の上に煤が付着しており、金箔を貼った後、灯明皿として使用したと考えられる。

下層から墨書があるものが7個体出土した。165の部体に書かれた「正福院」は文化8年(1825)の絵図にも記載のある寺院の名称である(財団法人米沢市杉文化振興財团1992)。底部の「見諭殿々」は僧侶の名前と考えられる。166、167とともに梵字で光明真言が書かれる。167は底部脇に逆位で書かれ、15文字のみで終わっている。166と167では筆跡も異なり、書き手が異なると考えられる。ともに内面に油脂状物質が付着している。170は「寛永」の年号が書かれており、土師質土器皿の年代観を考察する上で貴重な資料である。

内耳土鍋は、内面の3カ所に取手が付く。外面に煤が付着しているものが多い。口縁部は水平に面を持つ。内耳土鍋は県内では米沢市を中心とした置賜盆地でのみ出土している。荒川2遺跡(財団法人山形県埋蔵文化財センター1997a)や、大浦C遺跡(米沢市教育委員会1992b)から出土している内耳土鍋は体部の屈曲が明瞭なものが多いが、米沢城跡出土のものは、屈曲が緩やかなものが多い。

【瓦質土器】(2 [上層]、24~26 [中層]、196~199 [下層])

擂鉢、火鉢が出土している。

擂鉢は、口縁部が外側に張り出すもの(24)と尖るもの(196)がある。198は片口部のみが出土しているが、形態から擂鉢と判断した。他の擂鉢に片口が付くかは不明である。火鉢は、瓶掛型(26)と、口縁部が鈴状に張り出す大型のもの(199)が出土している。

【土製品】(27~29 [中層])

土製品はふいご羽口、行火が出土している。

ふいご羽口(27)は先端が被熱しガラス化している。被熱の状況から斜めに設置されて使用されたと考えられる。行火(28・29)は前方が開口する「かまくら」型のものである。

(3)陶器

確認できた産地は、肥前、岸、瀬戸美濃、大堀相馬、小野相馬、会津本郷、京・信楽、成島である。産地を同定できなかったものを「不明」と分類した。

【肥前系】(30~40 [中層]、200~207 [下層])

皿、皿、小杯、香炉が出土している。

下層では、陶器碗の中で最も多く出土している。中層では大堀相馬産の碗に次ぐ量が出土している。中層になると、緑釉を流し掛けしたもの(35~37)が増える。胎土目の皿は下層から1点(206)のみ出土している。

【岸】(3 [上層]、41~43 [中層]、208~218 [下層])

天目茶碗、皿、鉢、擂鉢、香炉、甕、水滴、窯道具の粗団子が出土している。

天目茶碗(208)は、窯資料では確認されていない器種(福島市他1998)だが、胎土や釉薬の特徴から岸産と判断した。擂鉢は、全面に鉄釉を施すもの(41)が中層から、口縁部に灰釉を施すもの(210~215)が下層から出土している。下層では岸が擂鉢の主体となる。上層から窯道具の粗団子(3)が出土している。擂鉢に付着して運び込まれたものと考えられる。

【瀬戸美濃】(219~224 [下層]、266~268 [S F 3])

皿、天目茶碗、甕、德利が出土している。

中層から出土したのは、國化していない徳利の小片1点のみで、下層からの出土がほとんどである。特に4層からの出土が多い(219~221・223・224)。全て大窯期、登窯期のもので、寄窯期のものは出土していない。

S F 3の整地層から大窯第1・2段階の皿(266~268)が出土している。同時期の遺物は米沢市教委調査区でもまとまった量が出土しており、16世紀にもこの場所が使われていたことを示す。

【大堀相馬】(44~59 [中層]、225・226 [下層])

碗、仏飯器、花瓶、土瓶、油壺、德利、灰落し、器種不明が出土している。

中層からの出土が多い。中層では、陶器碗の主体となる。

灰釉碗(44~50、225)が最も多く、腰錦碗(53・54)、兼白釉碗(51・52)が少量認められる。

【会津本郷】(60~69 [中層]、228~231 [下層])

碗、皿、鉢、擂鉢、甕、瓶、火入、漫瓶が出土している。

碗皿等の供膳具は少なく、鉢、擂鉢、甕等、調理・貯藏具が多い。228は擂鉢破片の側面と外面が磨滅している。産地不明陶器にも同様の使用痕があるもの(238)があり、比較的軟質な材質のものを選択して使用したと考えられる。

【京・信楽】(232~234 [下層])

皿、甕が出土している。

232は内面に片切り彫りによる文様が施される。矩形の文様の角部分を外面からくぼませており、四隅がくぼむ方形の器形になるとを考えられる。

【成島】(70・71 [中層])

18世紀後半以降、現米沢市成島地内で生産されたものである。70・71は、伝世品との比較から成島と判断した。

【産地不明】(72~90 [中層]、235~243 [下層])

産地の同定ができなかったものを一括した。大半は東北地方産と考えられる。碗、皿、鉢、片口鉢、擂鉢、瓶、甕、土瓶、土瓶蓋、土鍋、行平鍋、蓋、漫瓶、器種不明が出土している。

赤褐色の胎土に白色粒を多く含む一群 (76・77・81・89・237~239) が認められ、特定の产地として抽出できる可能性がある。

(4) 磁器

確認できた産地は、中国、肥前系である。その他産地不明のものが少量ある。肥前系には、波佐見や平戸産のものも含めた。

【中国】(4 [上層]、91~95 [中層]、244~248 [下層]、269 [S F 3])

青花碗・皿、白磁皿、青白磁梅瓶が出土している。

下層では、4 層からの出土が多く、大窯期の瀬戸美濃と似た出土状況である。248は13世紀代の製作年代が考えられ、他にこの年代の遺物が認められないことから伝世品と考えられる。

【肥前系】(5 [上層]、96~143 [中層]、249~265 [下層])

碗、皿、鉢、猪口、仏飯器、徳利、壺、灰落し、水滴が出土している。他に、図化していないが、向付と考えられる小片が出土している。

下層に比べ中層では碗の比率が高くなり、陶器、漆器を合わせた碗の中で、肥前系磁器碗が最も多い。中層では厚手の「くらわんか手」が多い。

【産地不明】(144~147 [中層])

図化したのは碗、皿のみであるが、他に徳利、器種不明の小片が出土している。

145は胎土がややガラス質で瀬戸産の磁器に類似するが釉調が異なるため、産地不明とした。

146は釉切れが著しく、釉切れ部の胎土は赤褐色を呈する。

(5) 木製品

堀跡から多量の木製品が出土した。器種ごとに分類し、器種、用途が判断できなかったものは、漆塗製品、板状、棒状、加工木に分類した。便宜上、竹製品も木製品と一緒に扱っている。

【漆器】(272~296 [中層]、413~474 [下層]、613~616 [S D 6])

椀身、椀蓋、皿、鉢、盆が出土している。

椀身と椀蓋は、体部の傾きや器高からできる限り分別したが、口縁部が遺存していないものや歪んでいるものが多く、分別の基準は統一できなかった。

内面外面ともに赤色漆を施した椀は、下層に比べ中層で比率が高い。磁器碗が碗の主体となつたことによって、漆器のハレの器としての性格が強くなったためと考えられる。

絵付けは黒色漆の地には赤色漆、赤色漆の地には黒色漆で描かれるものが多いが、黄漆が用いられるもの (276・285・286・288・445・459・615) が少量出土している。

高台内の銘は、「上」が4点 (272・422・423・446)、「吉」が3点 (279・414・416) 確認されている。底部に穿孔しているものは、中層で4点 (278・282・284・293)、下層で2点 (452・

454)、S D 6 で1点 (615) 出土している。底部に「X」型の線刻があるものが2点 (283・416) 出土している。

461~463・616は伊達氏の家紋である三引両が描かれたものである。三引両が描かれた漆器は、山形県内では荒川2遺跡、大浦C遺跡で出土している。

【漆塗製品】(297~300 [中層]、475~480 [下層]、617 [S D 6])

表面に漆が塗られる木製品である。蓋、鞘、柄杓、円板・板・棒状木製品が出土している。

480~1~3は別々に図化したが、同一個体の柄杓である。全面に黒色漆が塗られる。

【割物】(301・302 [中層]、481~482 [下層])

木を手斧、鑿などで削って作られた器を割物とした。鉢、槽が出土している。

302・481は大型の製品で、槽と考えられる。

【曲物】(303~305 [中層])

薄板を円形に曲げ柳皮で縫った容器である。全て側板と底板が外れた状態で出土している。小型のもの (303) と大型のもの (304・305) が出土している。

【桶・樽】(306~310 [中層])

板状の木製品で、弧状に整形されたものを桶・樽とした。天板があったかは不明のため、桶と樽の分類はせずに桶・樽と一括した。

端部の外観および内面に、天板または底板、簾の圧痕が認められるものが多い。

【円板状木製品】(311~321 [中層]、483~499 [下層]、624 [S X 10])

ほとんどが桶・樽、曲物の底板や天板になると思われるが、側板と一緒に出土した例がないため、円板状木製品として一括した。

直径は約 2~70cm と幅があるが、8cm 前後と 11cm 前後のものが多い。

側面に木釘または木釘痕があるもの (314・483~485)、中心と縁辺の中間付近または縁辺部に柳皮が通されているもの (311~313・493)、中央部に 1~5ヶ所穿孔されるもの (311・316・319・486~492)、縁辺部に數カ所柳皮を縫ったと考えられる穴があるもの (492・494) などがある。314は「奉納」の文字が墨書きされている。317は判読不能、319は丸に「川」の字が焼印されている。

320は割れ口に木釘が 2ヶ所打ち込まれており、補修されたものと考えられる。割れ口は平滑に加工されている。

321は栓をした穴があけられており、樽の天板と考えられる。

【下駄】(322~352 [中層]、500~547 [下層]、618・620 [S D 6])

露卯下駄、連齒下駄、庭下駄が出土している。連齒下駄は中層で2点、下層で4点と露卯下駄にくらべて出土数が少ない。

露卯下駄は、台が24点、台に付いているものも含めて歯が86点出土している。台にくらべて歯の出土数が多いことから、磨耗した歯を交換して使用されたと考えられる。

後緒穴の位置が後緒より後ろにあるものは、下層では実測点数13点中1点のみであるが、中層では14点中7点である。露卯下駄のはぞ穴は、前後とも1穴、前後とも2穴、前3穴後2穴

の3種類が認められる。前後とも1穴のものは下層とSD6で出土しており、中層からは出土していない。

歯の先端が磨耗し砂粒が付着しているものが多い。台の先端に砂粒が付着するもの(329・330・503)も認められる。歯が単独で出土したものも、先端が磨耗しているものが多いが、344は磨耗が認められず未使用と考えられる。543は割れ口に釘痕があり、補修して使用されたと考えられる。

【櫻】(353~382 [中層]、548~560 [下層]、621~623 [SD6])

棒状または板状の木製品で、縦断面が長直角三角形または台形を呈するものである。頭部に圧痕が認められるものが多いことから櫻と判断した。

形態は、棒状で縦断面が直角三角形を呈するものが最も多く、その他に、縦断面が台形を呈するもの(354・553・623)、最厚部が端部以外にあるもの(377)、薄く幅広で板状になるもの(378・379・560)、板状で頭部が斜めに作り出されるもの(380~382)がある。

棒状で縦断面が直角三角形を呈するものは、長さ約8~24cmと幅があるが、いくつかのまとまりが見られる。22~24cmのもの(353・548・549)、20cm前後のもの(550・551・355~357)、15~17cmのもの(358~363・552~556・621)、14cm前後のもの(364~372・557)、13cm前後のもの(373~376)、12cm前後のもの(558・622)、8cm前後のもの(559)の7グループに分類できる。下層に大型のもの、中層に小型ものが多い。

【木羽】(561~571 [下層])

屋根材と考えられる板状の木製品である。長さ約34~40cm、幅約3~14cm、厚さ1.5~3.5mmで、周囲に釘穴がある。釘穴が斜めにあけられるもの(563・564・569)や、木釘が遺存しているもの(564・565・568)が認められる。下層からのみ出土している。

【へら】(387~390 [中層]、572~574 [下層])

板状で柄があるもの、または柄が付くと推定できるもので先端が磨耗しているものをへらとした。遺存長は15~57cmで、様々な用途に使用されたと考えられる。

【擂粉木】(393・394 [中層]、599 [下層])

断面が円形の棒状木製品で、直径が3~4cm、一方の端部が磨耗しているものを擂粉木とした。擂鉢に対して出土量が少ないため、他の材質のもので代用していたと考えられる。

【箸】(590 [下層])

小型の棒状木製品で、端部を尖らせているものを箸とした。出土量が少なく、1点のみ出土している。米沢市教委調査区で箸を大量に廃棄した土坑が検出されている。

【楳】(399 [中層])

中層から1点出土している。握り部分は加工痕が明瞭に残るが、敲打部は磨耗している。

【櫛】(608 [下層])

下層から1点出土している。

【杭】(595~597 [下層])

大型の棒状木製品で、一方の端部を尖らせているもの、または、一方の端部が打ち込みた

め漬れているものを杭とした。下層からのみ出土している。堀の壁面に打ち込まれた杭列設置時に廃棄されたと考えられる。

【板状木製品】(383~386 [中層]、575~589 [下層]、625 [SD10])

幅が厚さの2倍以上あるものを板状木製品とした。

大半の用途は不明であるが、組み合わせて箱型になると考えられるもの(575)や、刃物痕が残りまな板として使用されたと考えられるもの(589)が認められる。まな板に転用されたと考えられるものは、板状木製品の他に、へら(388)や円板状木製品(496)がある。

582~587は一括で出土したもので、中央部に釘痕と考えられる小孔が多数あき、木釘が遺存しているものもある。線状・円形の压痕(582~584)が認められる。

【棒状木製品】(391~392・395~398・591~594・598 [下層]、626~628 [SD10])

幅が厚さの2倍以下のものを棒状木製品とした。大半は用途不明である。

593、594は長さが1.5~1.8mの大形の木製品で、表面は丁寧な削り加工痕が認められる。

【加工木】(400~406 [中層]、600~607・609・610 [下層]、619 [SD6])

板状、棒状にあてはまらない木製品を加工木とした。

400・401・404・610などは建築部材と考えられる。605は全面に削り加工痕が明瞭に残る。中央の穴には木棒が差し込まれている。紡錘車と考えられる。

【竹製品】(407~412 [中層]、611・612 [下層])

407、408は太い筒型の製品で、切り口が平滑に加工されていることから容器と考えられる。他に、細い筒型の製品(409・611・612)、板状の製品(410~412)が出土している。

(6)石製品(629~641)

砾石、硯、石鉢、温石、不明石製品が出土している。

砾石は全て中底である。633は裏面、634は小口と側面に、成形痕が残る。

硯は、630・631・637が高嶋硯、632・638が雨田硯と考えられる。630は太い溝状の使用痕の周囲に線刻や刺突が多数認められる。刺突、線刻の後にも使用されている。背面、側面にも多数の線刻が認められる。631は陸部が海部よりも低くなるまで使用されている。背面に判読不能の文字が線刻される。

(7)金属製品(642~653)

鉢、煙管吸口、雁首、鳶口、小柄、かんざし、釘、鎌、飾り金具が出土している。中層から2点出土しているほかは、全て下層からの出土である。

(8)銭貨(654~657 [上層]、658 [中層]、659~680 [下層]、681・682 [遺構外])

渡来銭、寛永通寶(古・新)、二銭銅貨、十銭銅貨が出土している。近代の銭貨以外は下層からの出土が多い。

663~666、667~671、672~680は4枚から9枚の銭貨がまとめて出土している例で、いず

れも堀の床面直上、もしくは床面に近い位置から出土している。

(9) 膨差 (683〔下層〕・第13図)

刀身の長さが60cmより短いことから膨差とした。ほぼ完形で出土したが、金属部分と木質部を分けて保管する必要があったため、取り上げ後部品ごとに分解した。683は各部品の実測図を図上で集成した復元図である。

鞘 (683-15・16) は、出土時に下になっていた面 (683左) の遺存状態が比較的良く、黒色漆が一部残っている。10ヶ所にくびれた部分がある。683-15は上から3つ目のくびれ部分で、薄い竹板を差し込んで接合されている。刀身 (683-17) は、出土時に上になっていた面 (683-17右) の遺存状態が良く、鎬がほぼ全面で確認できる。下になっていた面では、先端部と縁付近にのみ鎬が認められる。茎に銘は認められない。鈔 (683-7) は表面に木目状の条線が刻まれている。

IV 調査のまとめ

1 遺構

①米沢城二の丸堀の南東部分を長さ92.4mの規模で確認した。堀は堀底に障壁を持ついわゆる「障子堀」である。

堀が掘られた時期は、下層出土の陶磁器の年代観から16世紀末から17世紀初頭と考えられる。この時期は、伊達氏、蒲生氏、上杉氏と城主が交代した時期にある。伊達氏の家紋の三引両が描かれた漆器が出土しているが、16世紀の遺物はほとんど出土していないことから、伊達時代に掘られたものではないと考えられる。また、蒲生領となっていた期間が天正19年 (1591) から慶長3年 (1598) と短いことや、慶長初年以降に生産が開始されたとされる志野丸皿 (瀬戸市編纂委員会1993) が一定量出土することから、蒲生時代の開削とも考えにくく、二の丸堀は、上杉景勝が入部した慶長6年 (1601)、城内の本格的な整備が行われた同9年 (1604)、三の丸が造成された慶長13・14年 (1608・1609) のいずれかの年に掘られたと考えられる。

②確認した堀の中央部を南北に継続する土壘状の施設 (S F 3) は、絵図との対比から、城内への導水施設である「御入水堰」が通った土手と考えられる。地山を掘り残して構築されており、このことは、御入水堰の開削と二の丸堀の開削が同時期に行われたことを示している。

③S F 3が10.9mに渡って途切れる部分 (S D 6) を確認した。S D 6は、S F 3によって東西に分けられた堀 (S D 1・2) の通水部となるが、後に東西を杭と木板によって遮蔽され、埋め立てられている。絵図では御入水堰の土手に南北2ヶ所の通水部が描かれており、S D 6は北側の通水部と考えられる。明和6年 (1769) の絵図では南側の1ヶ所しか描かれていない。文化8年 (1811) の絵図に2ヶ所の通水部が描かれているが、享和2年の絵図がもっとも詳細で現在の地形と比較した堀の形状も正確に描かれていることから (青木1998)、S D 6が埋められた時期は18世紀後半と考え

られる。

2 遺物

①堀跡を中心に、江戸時代初期から近代にかけての多量の遺物が出土した。堀跡は上・中・下層に分かれ、中・下層が江戸時代に所属する。遺物個体数の半数以上を木製品が占める。

②下層からは17世紀初頭から18世紀前半の遺物が出土している。磁器は肥前が最も多く、陶器は岸が最も多い。瀬戸美濃は近世初頭のもののみ出土している。陶磁器の碗は絶対量が少なく、碗の8割を漆器が占める。土師質土器皿は、金箔を貼ったものや墨書きのあるものなど、宗教的な性格のものが多い。

③中層からは18世紀後半から19世紀前半の遺物が出土している。磁器は肥前が最も多く、陶器は大堀相馬、会津本郷が増える。陶磁器・漆器全体の碗の中で、漆器碗の割合は3割に減り、肥前磁器、大堀相馬の割合が増える。擂鉢・鉢は下層で主体だった岸が減り、会津本郷や產不明の陶器が増える。

④二の丸内部にあたる米沢市教委調査区からは、組の碗皿や茶陶など非日常的な陶磁器の一括廃棄土坑や、箸を大量に廃棄した土坑などが検出されている。それに対し、堀跡から出土する陶磁器は、土師質土器皿を除けば日常的なものが多い。箸は1点のみの出土である。道具の種類や性格によって廃棄の方法が異なっていたと考えられる。

⑤今回出土した遺物は、堀跡からの出土であるため時期幅のある資料ではあるが、近世前半から後半への大きな変遷を捉えることのできる資料である。また、木製品が多量に出土したことと、漆器と陶磁器を含めた近世の食器の様相を捉えることができる資料である。

引用参考文献

青木昭博1998『米沢城下町』『城下町古地図散歩 8仙台東北・北海道の城下町』平凡社

大橋康二1993『肥前陶磁』ニュー・サイエンス社

大橋康二1994『古伊万里の文様』理工学社

小笠原信夫1994『日本の美術第332号日本刀の持』至文堂

財団法人山形県埋蔵文化財センター1997a『荒川2遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第43集

財団法人山形県埋蔵文化財センター1997b『西町田下遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第44集

財団法人米沢上杉文化振興財団1992『特別展図録絵図で見る城下町よねざわ』米沢市立上杉博物館

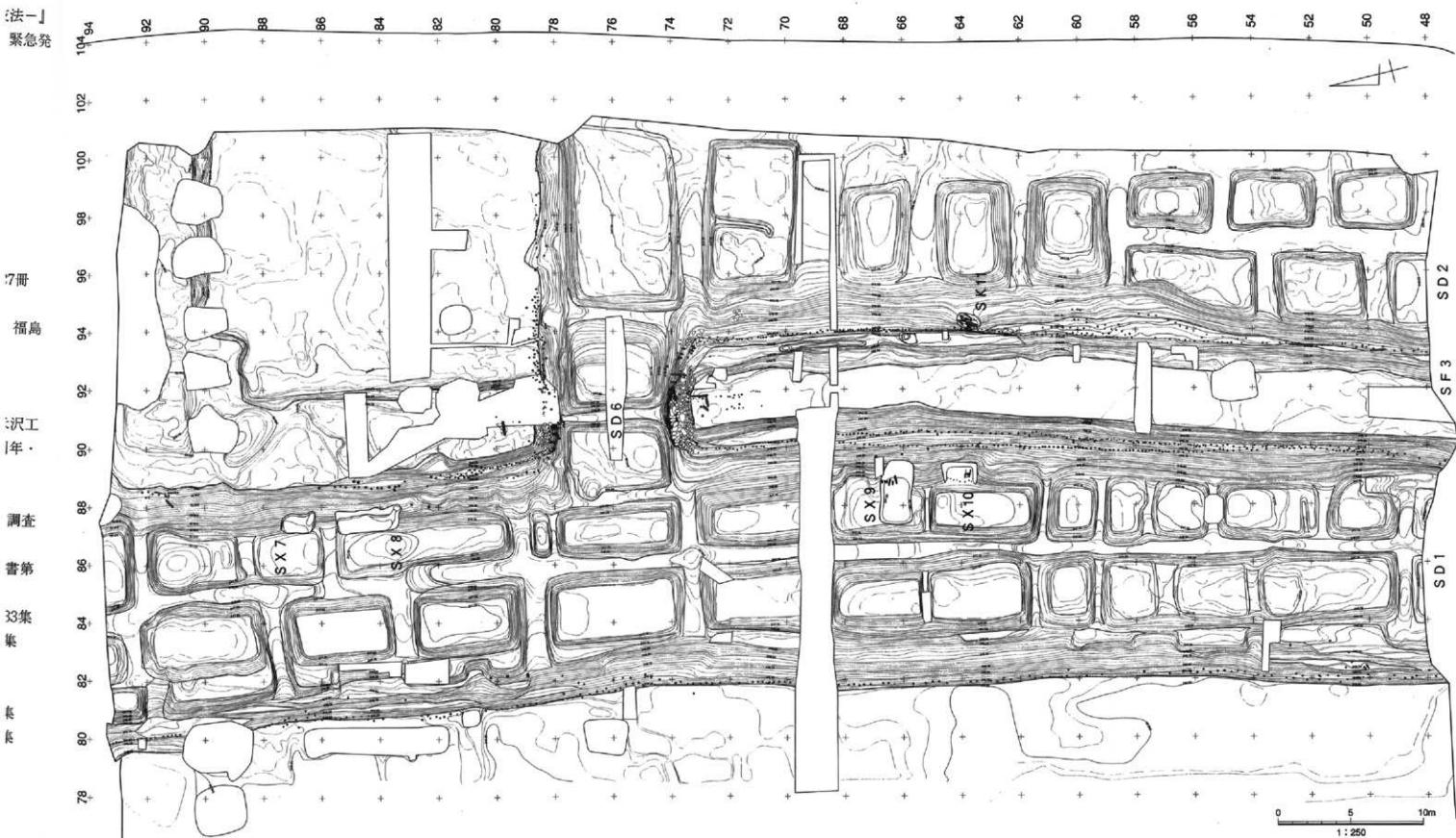
佐賀県立九州陶磁文化館1990『寄贈記念柴田コレクション展(Ⅰ)』

佐賀県立九州陶磁文化館1991『寄贈記念柴田コレクション展(Ⅱ)資料編』

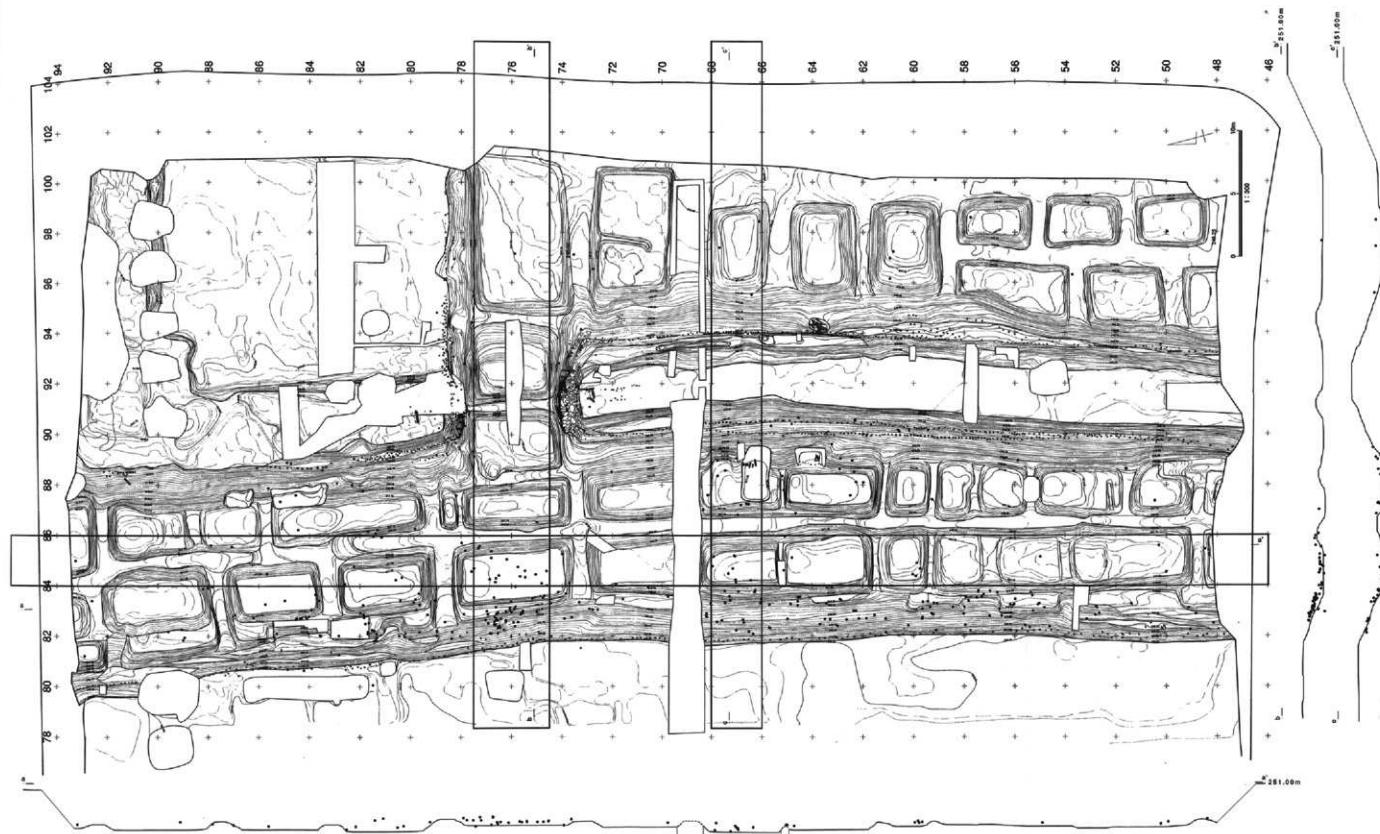
佐賀県立九州陶磁文化館1991『寄贈記念柴田コレクション展(Ⅱ)図版編』

佐賀県立九州陶磁文化館1995『柴田コレクション展Ⅳ、一古伊万里様式の成立と展開』

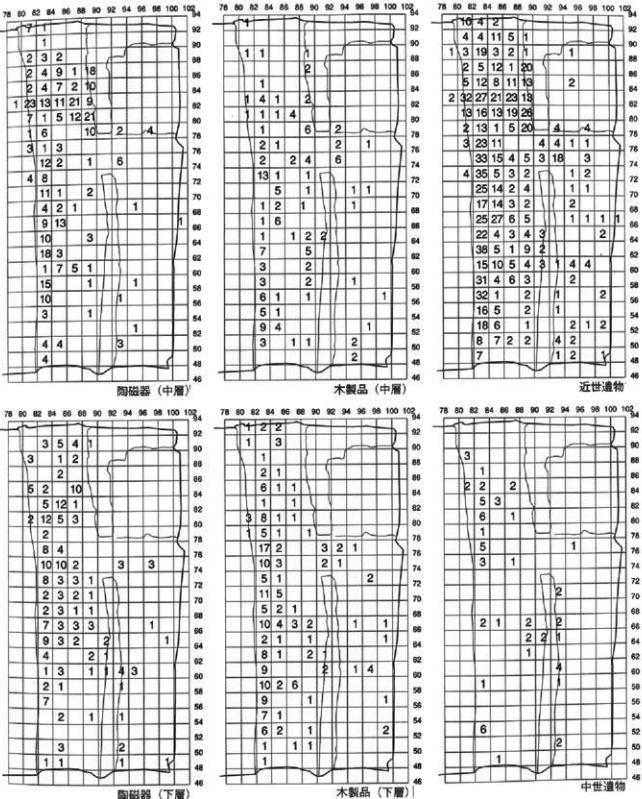
- 佐賀県立九州陶磁文化館1998『寄贈記念柴田コレクション展Ⅳ－江戸の技術と装飾技法－』
- 新宿区内藤町遺跡調査会1992『東京都新宿区内藤町遺跡－放射5号線整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』東京都建設局・新宿区内藤町遺跡調査会
- 瀬戸市史編纂委員会1993『瀬戸市史陶磁史篇四』愛知県瀬戸市
- 第9回北陸中世土器研究会1996『飾る・遊ぶ・祈るの木製用具』北陸中世土器研究会
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1994『東北大学埋蔵文化財調査年報7』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1997『東北大学埋蔵文化財調査年報8』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 a『東北大学埋蔵文化財調査年報9』
- 東北大学埋蔵文化財調査研究センター 1998 b『東北大学埋蔵文化財調査年報10』
- 永井久美男編1994『中世の出土銭一出土銭の調査と分類－』兵庫県埋蔵銭調査会
- 永井久美男編1998『近世の出土銭II一分類図版篇－』兵庫県埋蔵銭調査会
- 奈良国立文化財研究所1985『木器集成図録近畿古代篇』奈良国立文化財研究所史料第27冊
- 福島県立博物館1990『企画展東北の陶磁史』
- 福島市・福島市教育委員会・財団法人福島市振興公1998『岸窯跡－近世窯跡の調査－』福島市埋蔵文化財報告書第111集
- 山形県教育委員会1995『山形県中世城館遺跡調査報告書第1集（置賜地域）』
- 山形県教育委員会1998『分布調査報告書（25）』山形県埋蔵文化財調査報告書第199集
- 山形県立米沢工業高校創立九十周年・定時制四十年記念誌編集委員会1987『山形県立米沢工業高等学校創立九十周年・定時制四十周年記念誌』山形県立米沢工業高等学校創立九十周年・定時制四十周年記念事業実行委員会
- 米沢市教育委員会1985『上浅川遺跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第14集
- 米沢市教育委員会1987『宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書第1集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第19集
- 米沢市教育委員会1992 a『遺跡詳細分布調査報告書第5集』米沢市埋蔵文化財調査報告書第32集
- 米沢市教育委員会1992 b『大浦C遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第33集
- 米沢市教育委員会1993『大浦B遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第36集
- 米沢市教育委員会1994『米沢城発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第44集
- 米沢市教育委員会1995『我妻館跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第50集
- 米沢市教育委員会1996『一ノ坂遺跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第53集
- 米沢市教育委員会1998『東屋敷館跡発掘調査報告書』米沢市埋蔵文化財調査報告書第58集
- 米沢市史編さん委員会1986『米沢年表（近・現代篇）』米沢市史編集資料第18号
- 米沢市史編さん委員会1991『米沢市史第二卷近世編1』米沢市
- 米沢市史編さん委員会1997『米沢市史第一巻原始・古代・中世編』米沢市



第4図 遺構配置図

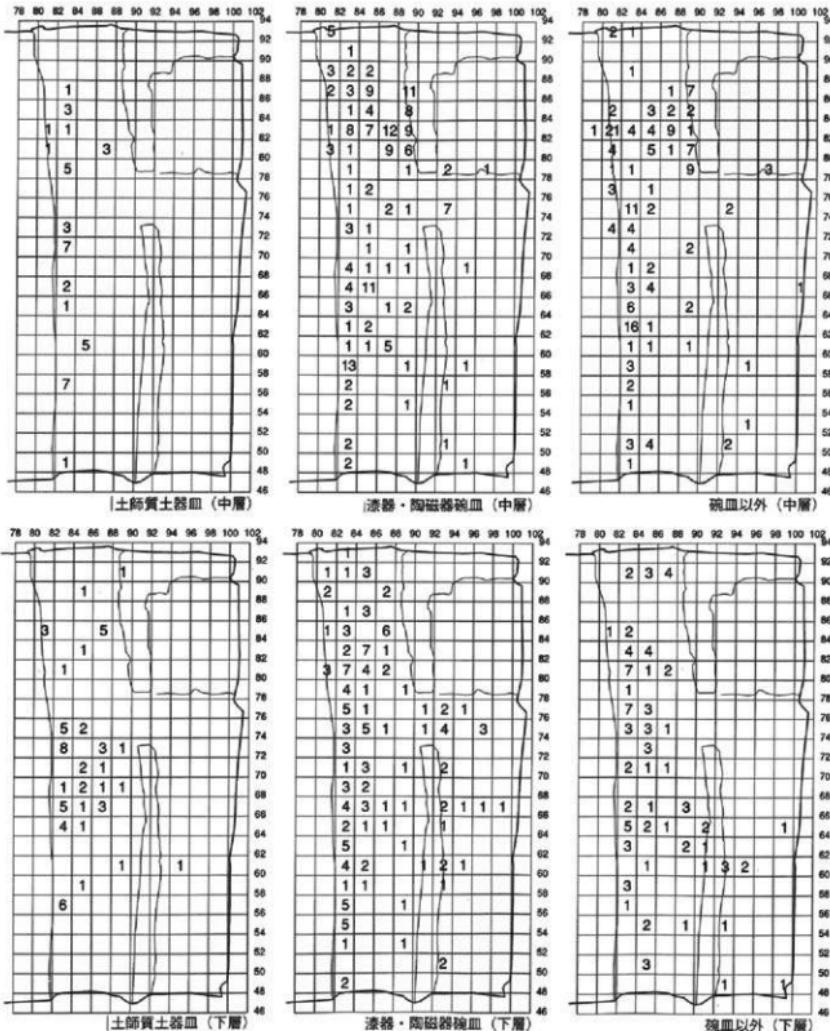


第5図 下層遺物分布図



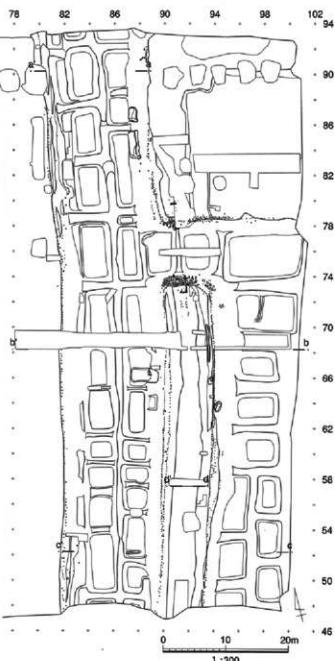
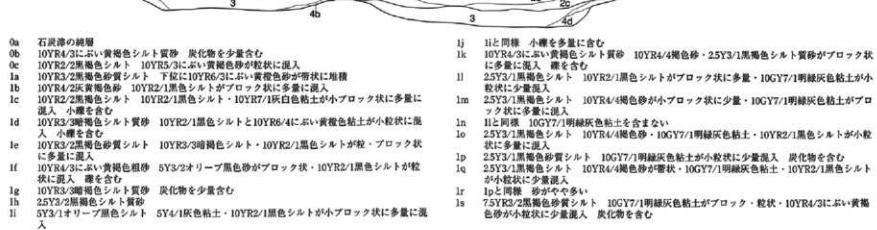
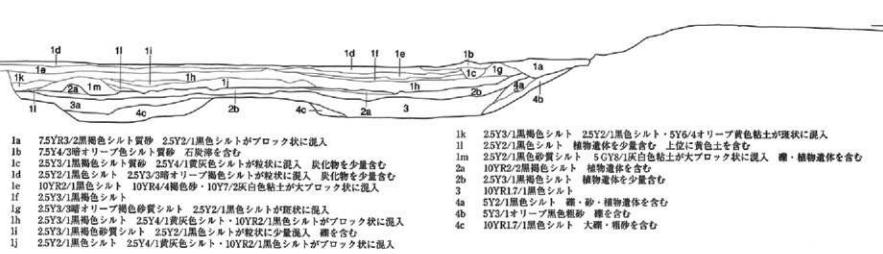
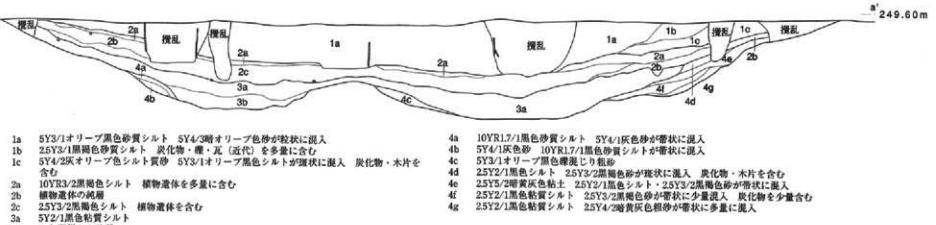
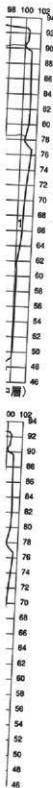
非陶磁器：破片数 木・石・金属製品：個体数

第6図 遺物分布（1）

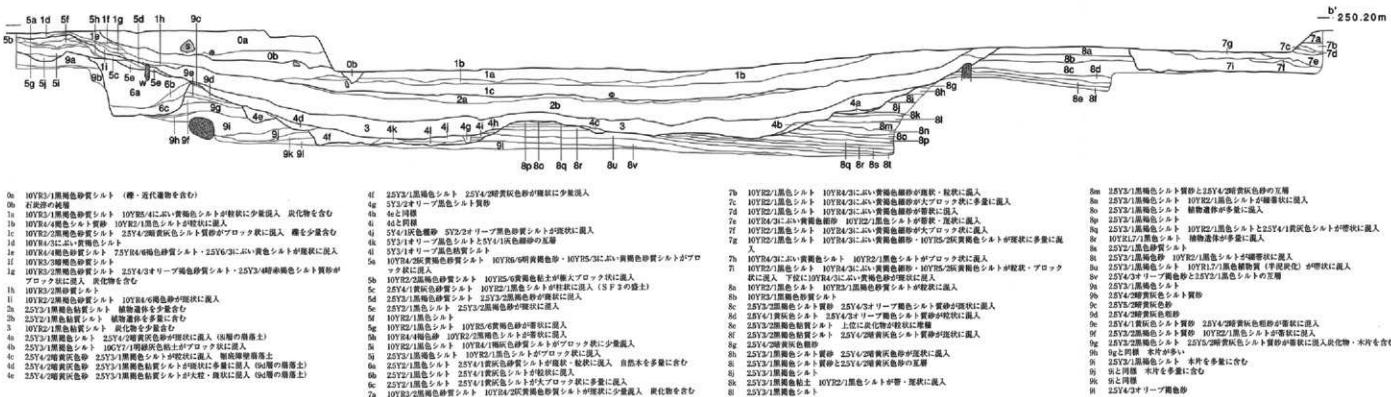
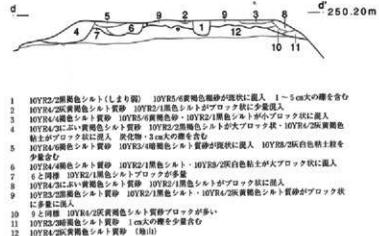
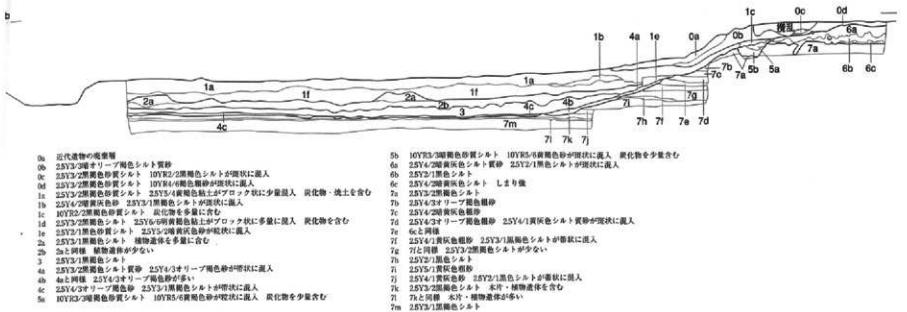


*陶磁器：破片数 木・石・金属製品：個体数

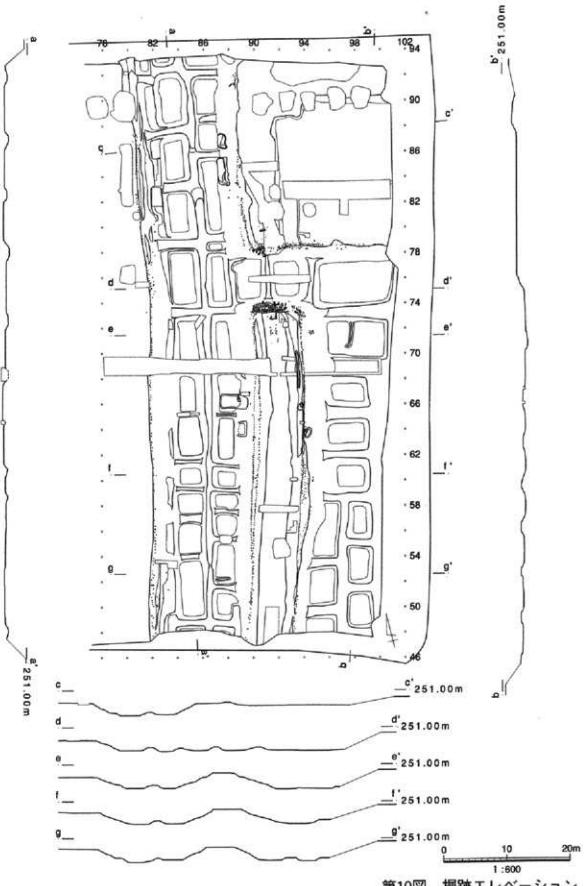
第7図 遺物分布（2）



0 10 20 m
1:300

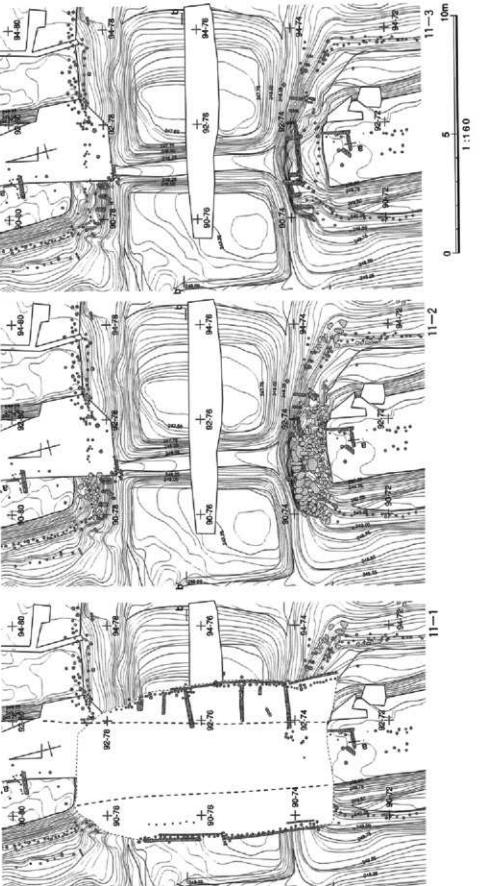


第9図 SD1・2, SF3

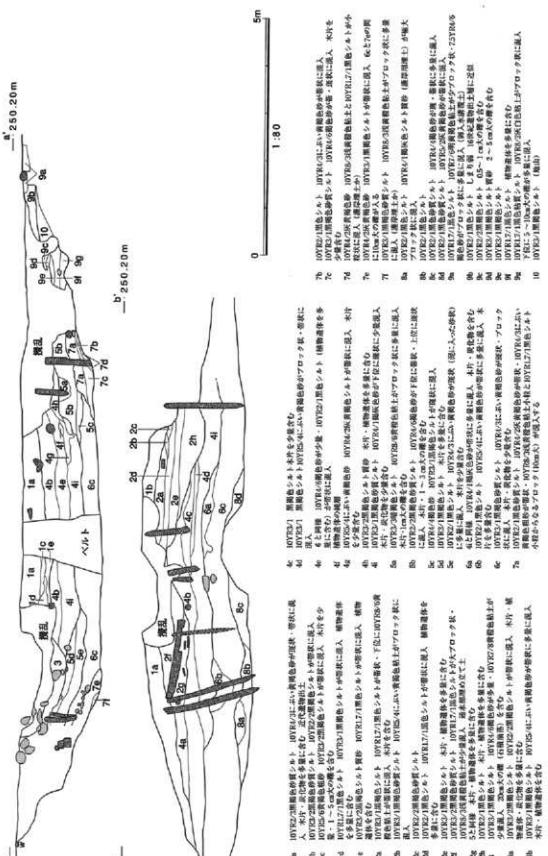


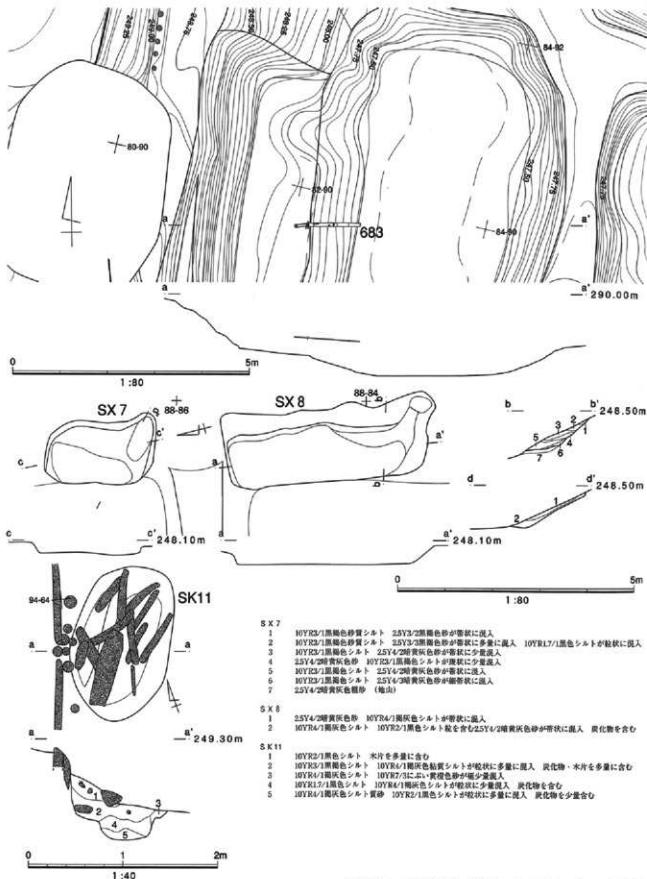
第10図 挖跡エレベーション

第11回 SD6平面圖

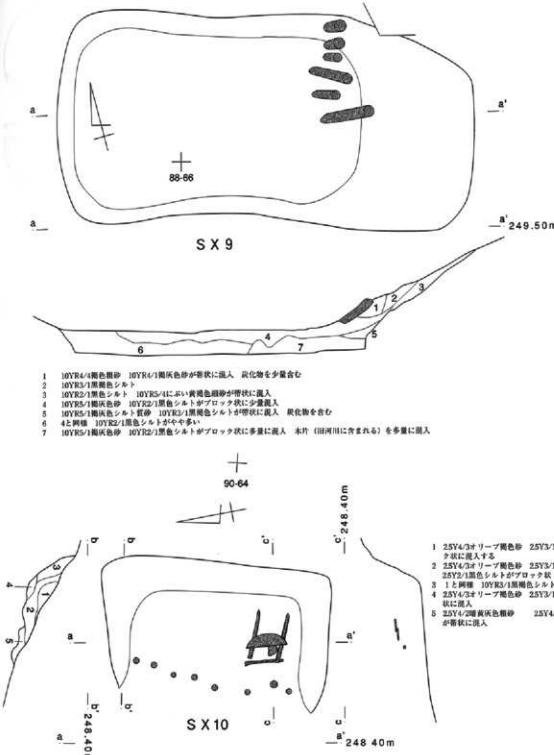


第12図 SD6土層断面図

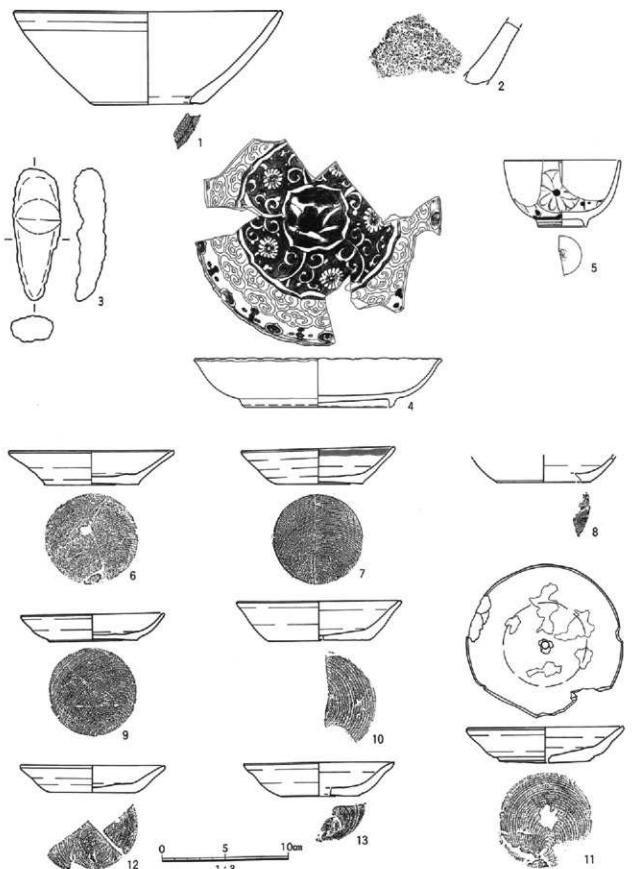




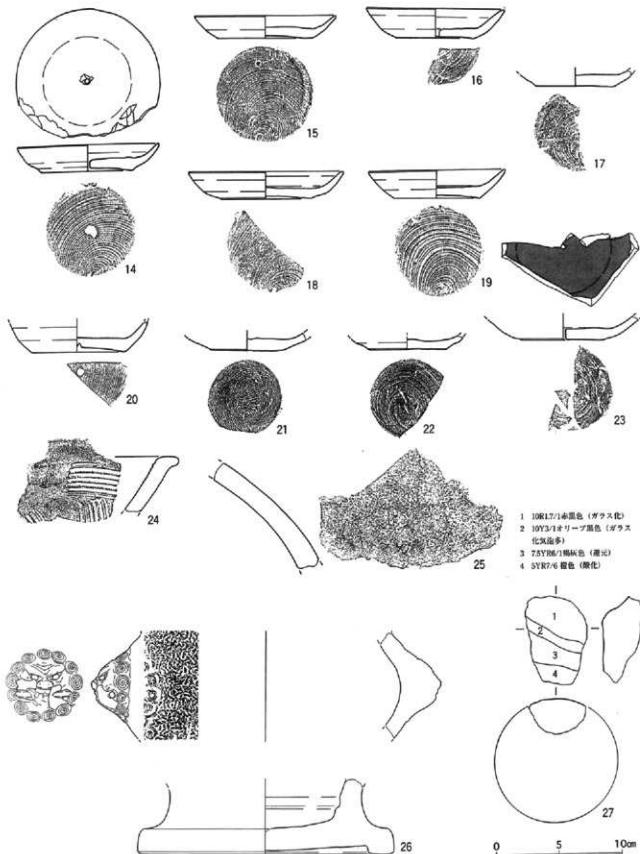
第13図 脊差出土状況、S X 7・8、S K 11



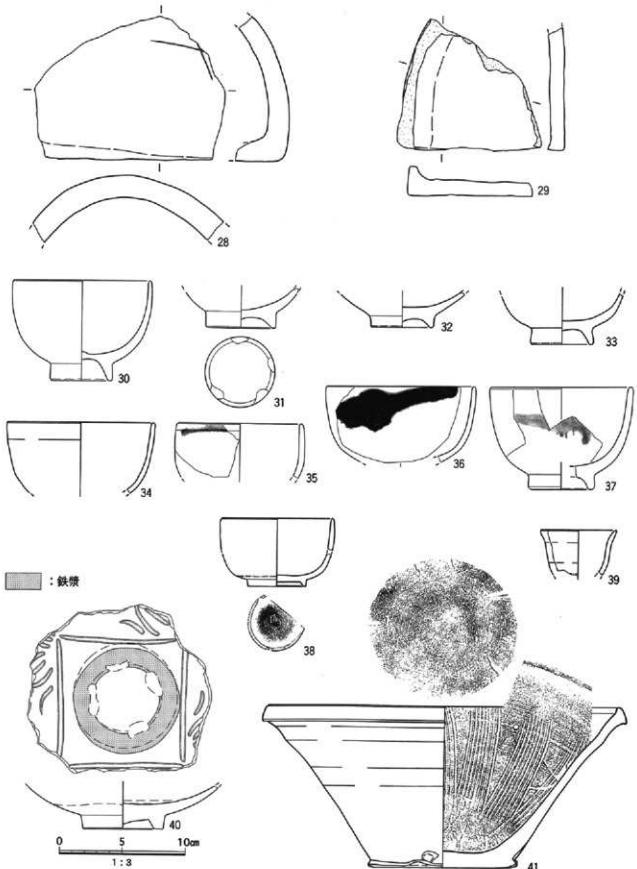
第14図 S X 9・10



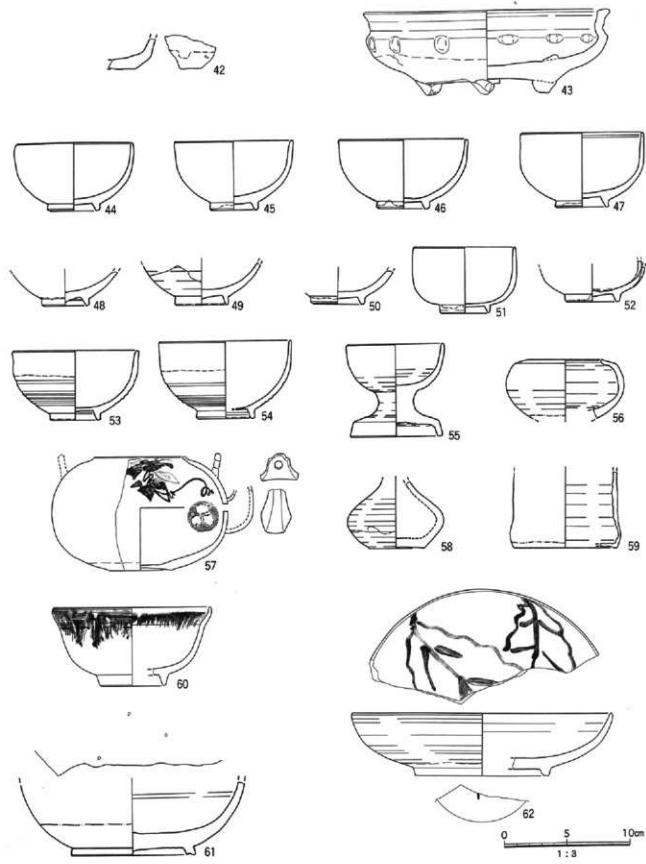
第15図 上・中層出土 土器・陶磁器



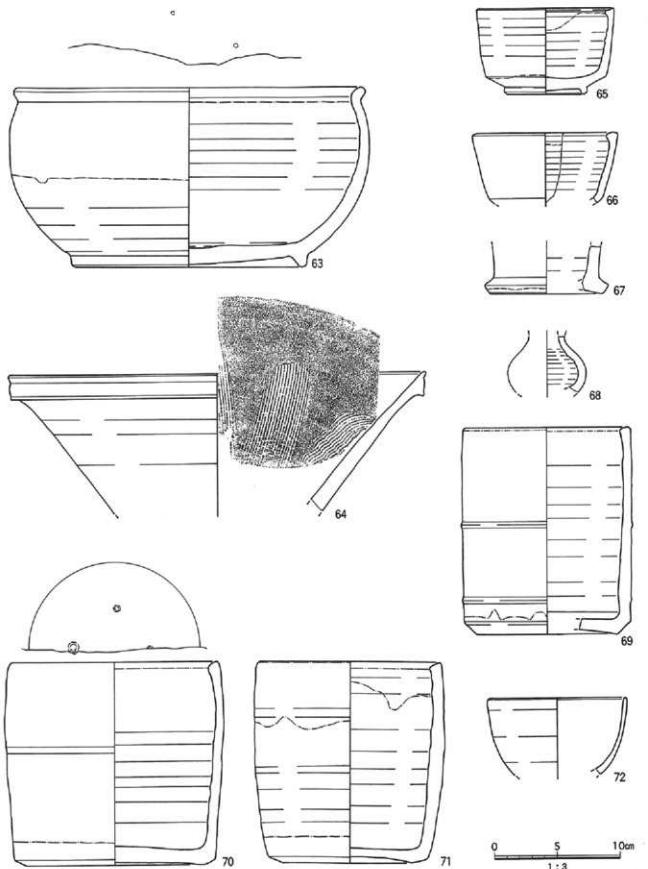
第16図 中層出土 土器・土製品



第17図 中層出土 土製品・陶器

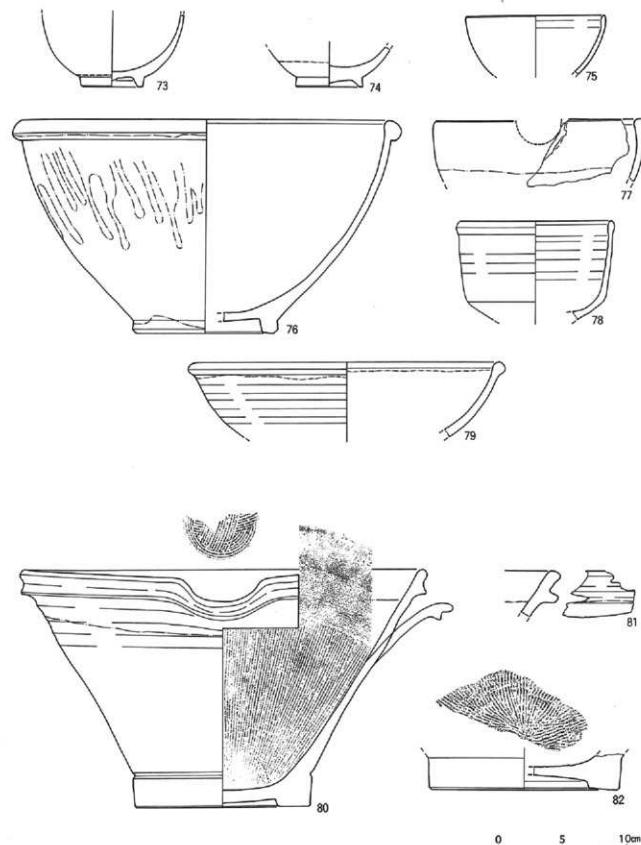


第18図 中層出土 陶器 (1)



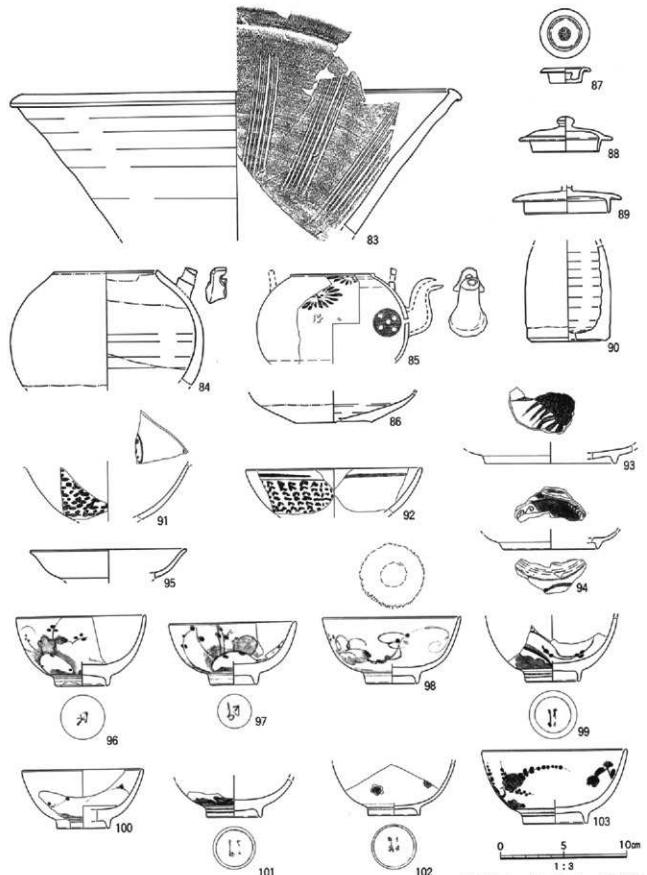
第19図 中層出土 陶器(2)

— 40 —



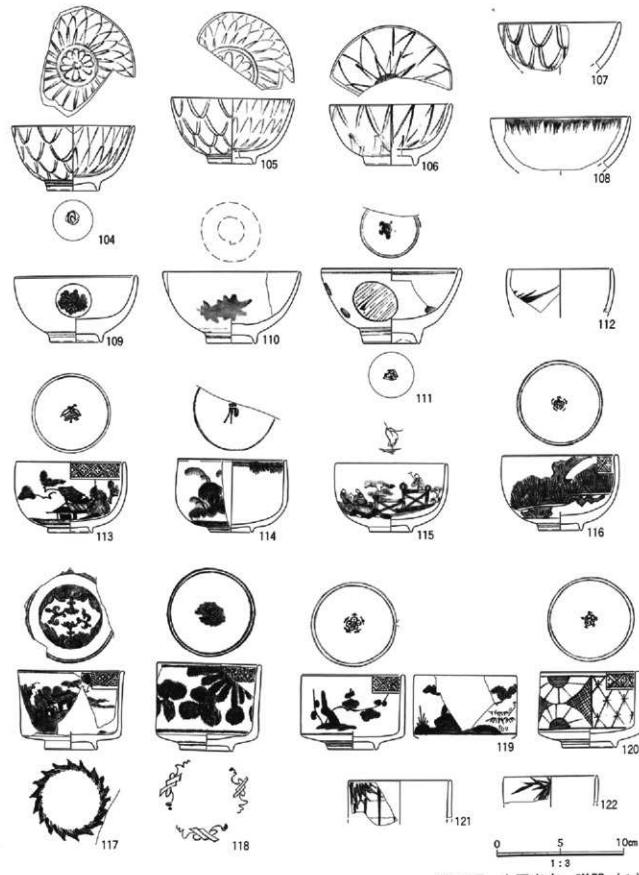
第20図 中層出土 陶器(3)

— 41 —



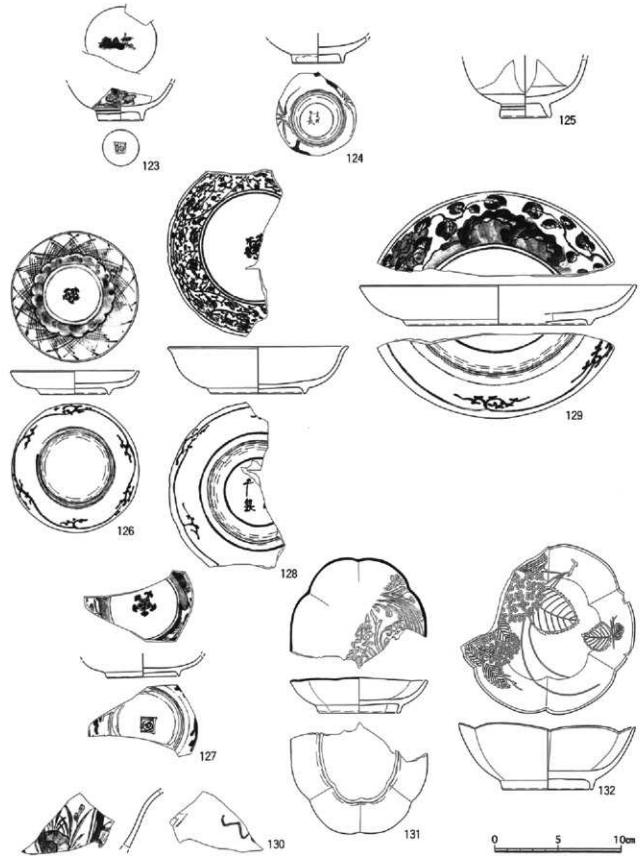
第21図 中層出土 陶磁器

- 42 -



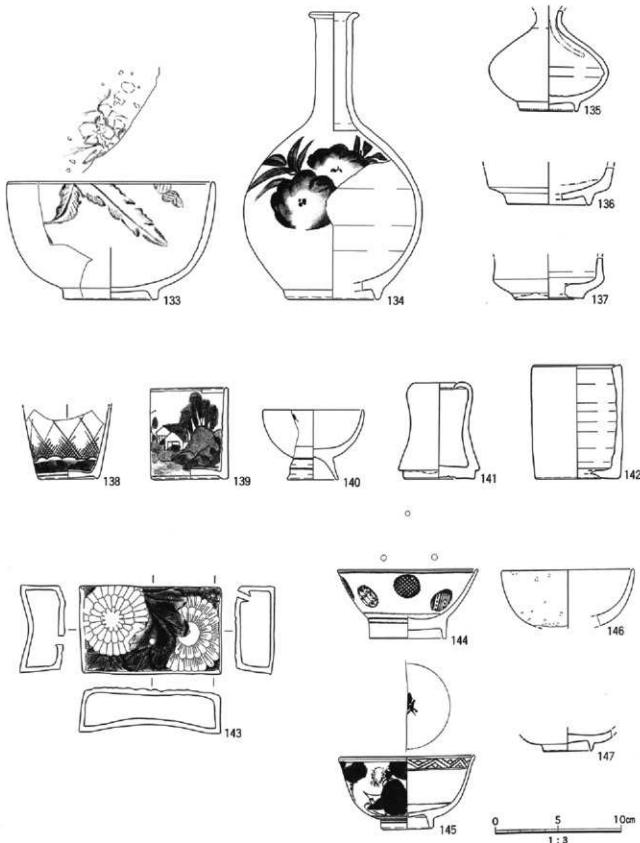
第22図 中層出土 磁器 (1)

- 43 -



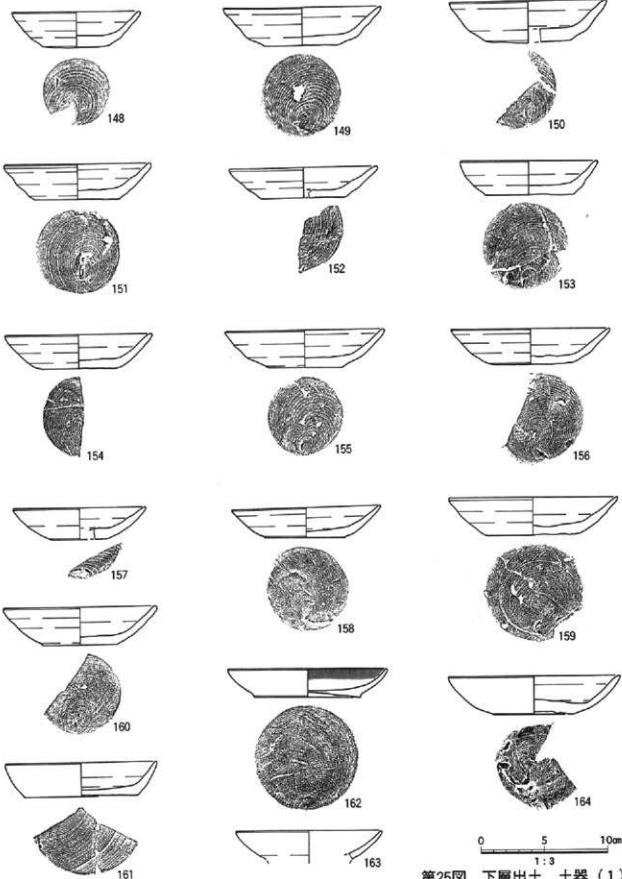
第23図 中層出土 磁器（2）

- 44 -



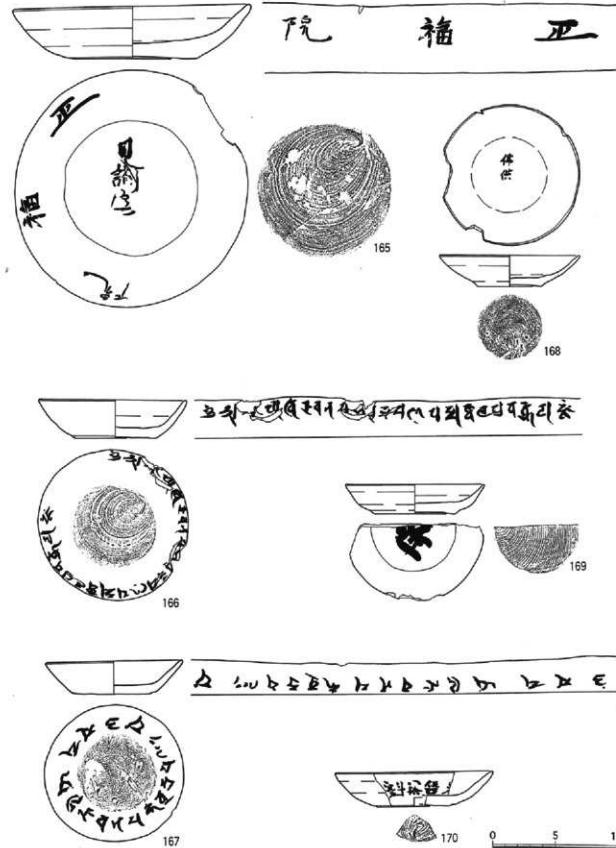
第24図 中層出土 磁器（3）

- 45 -



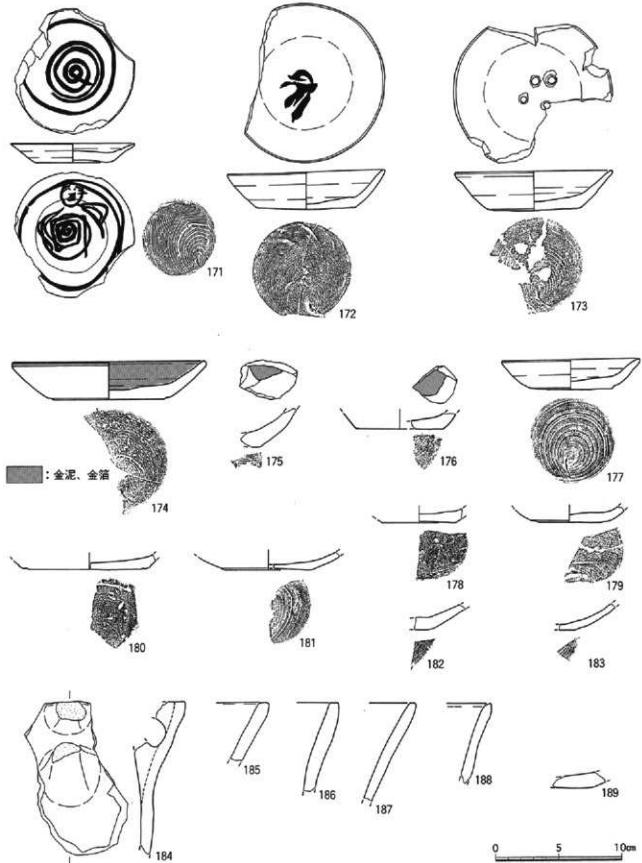
第25図 下層出土 土器 (1)

- 46 -

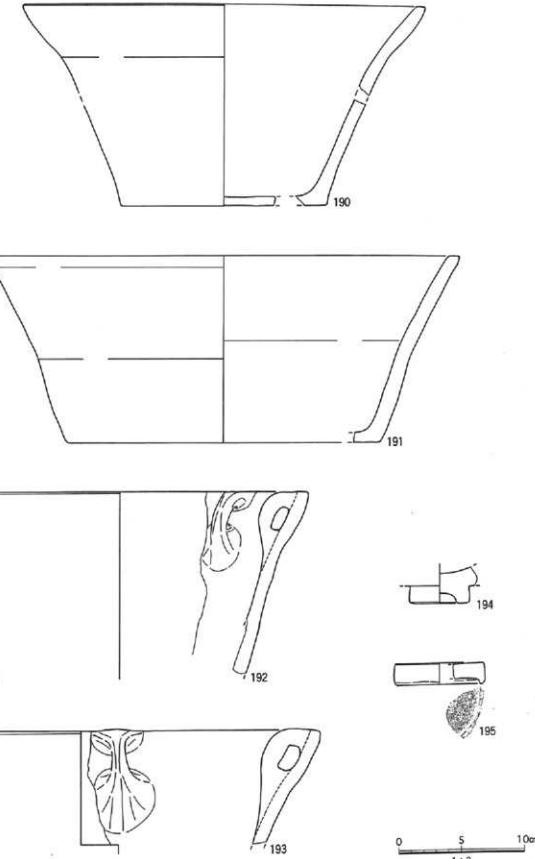


第26図 下層出土 土器 (2)

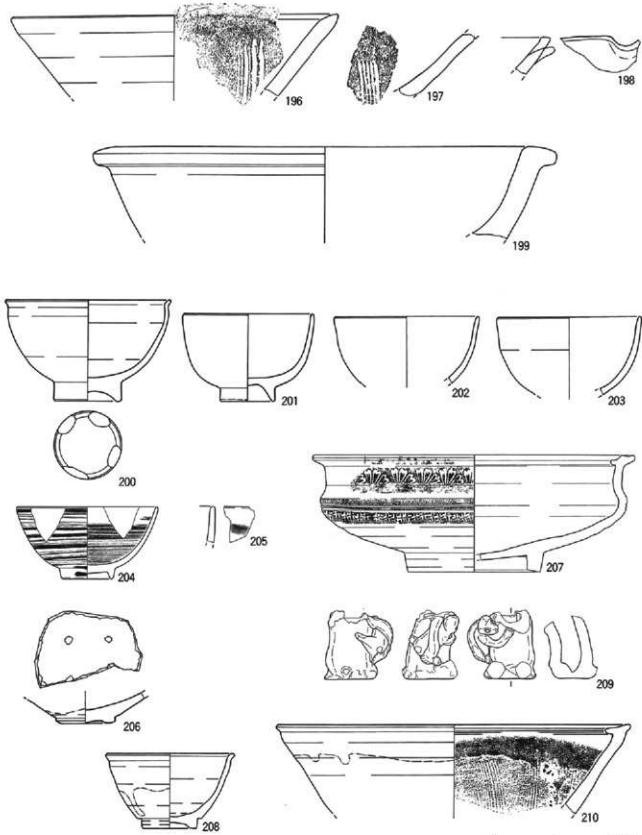
- 47 -



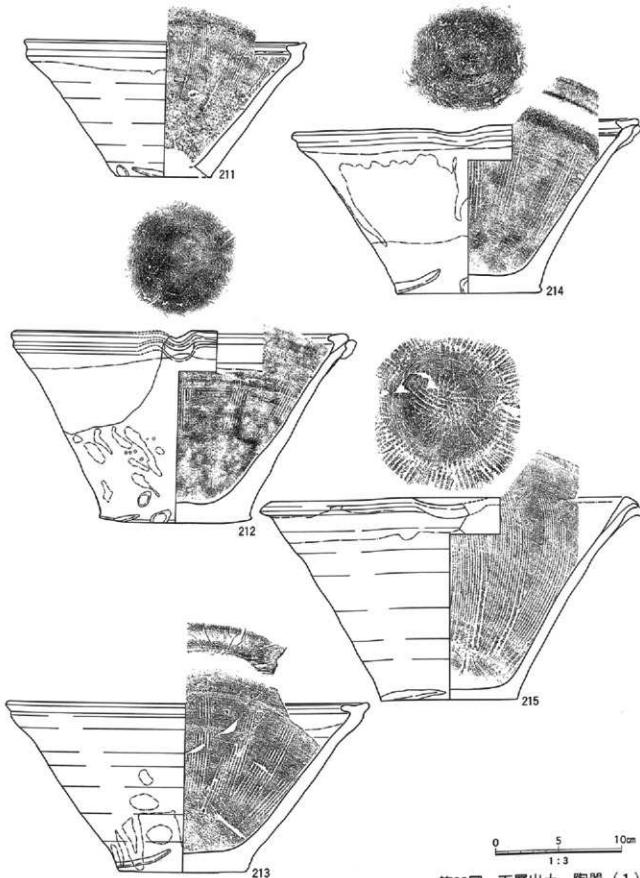
第27図 下層出土 土器(3)



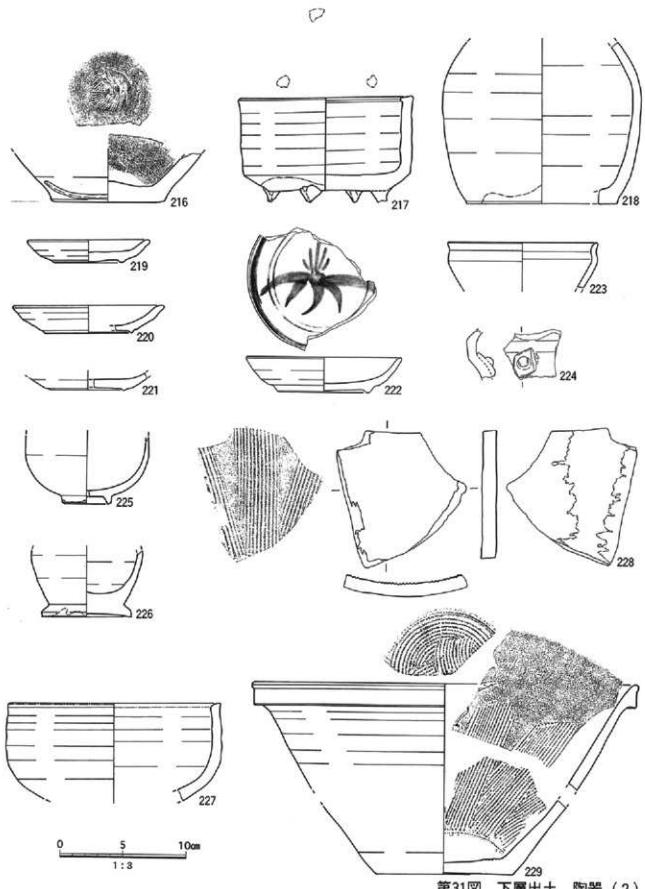
第28図 下層出土 土器(4)



第29図 下層出土 土器・陶器

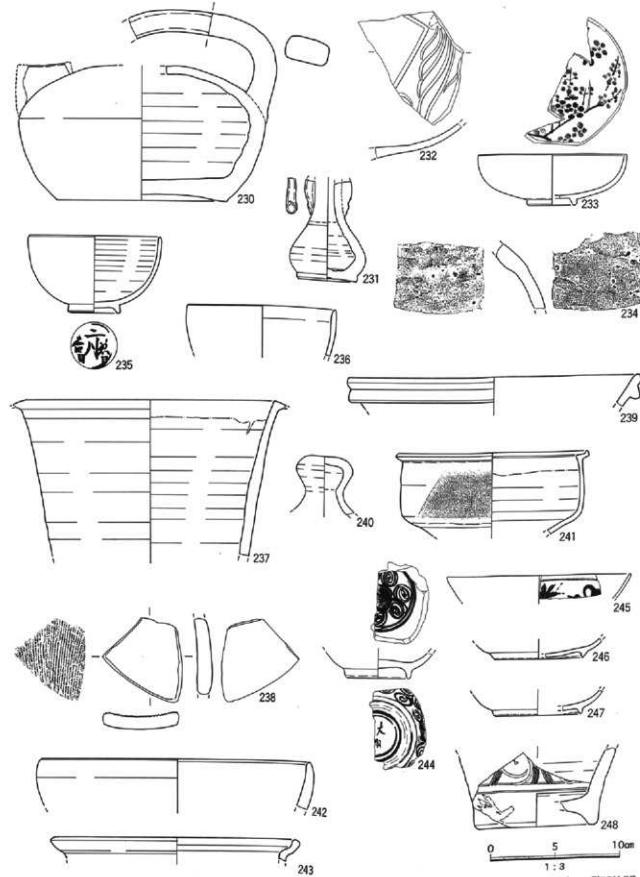


第30図 下層出土 陶器 (1)



第31図 下層出土 陶器 (2)

- 52 -



第32図 下層出土 陶磁器

- 53 -



第33図 下層出土 磁器

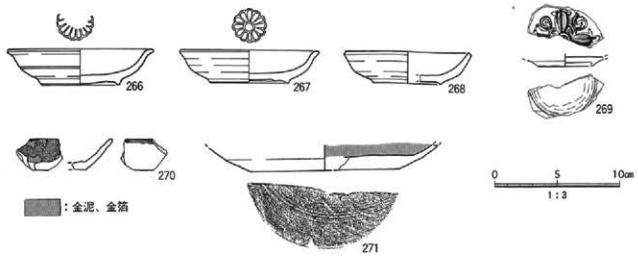
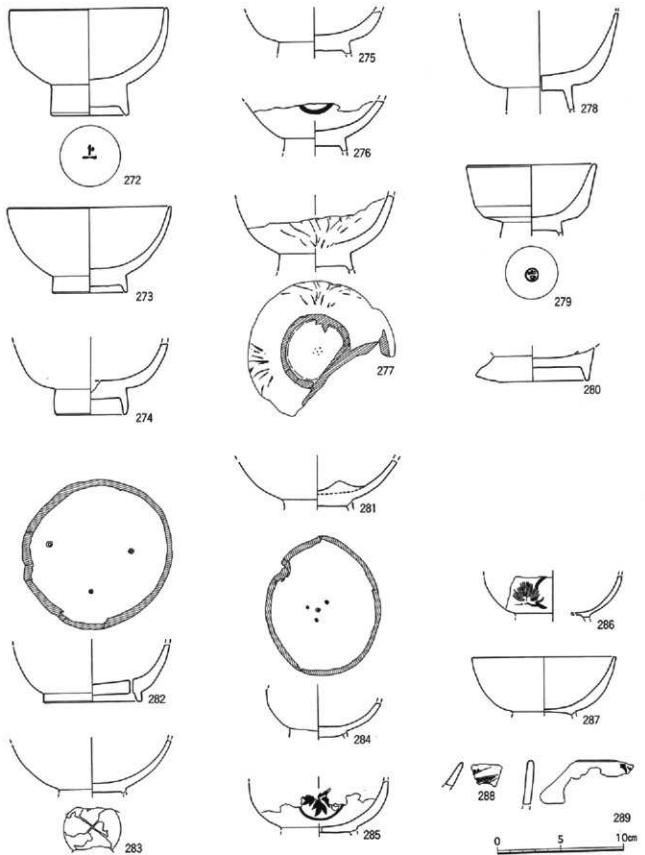


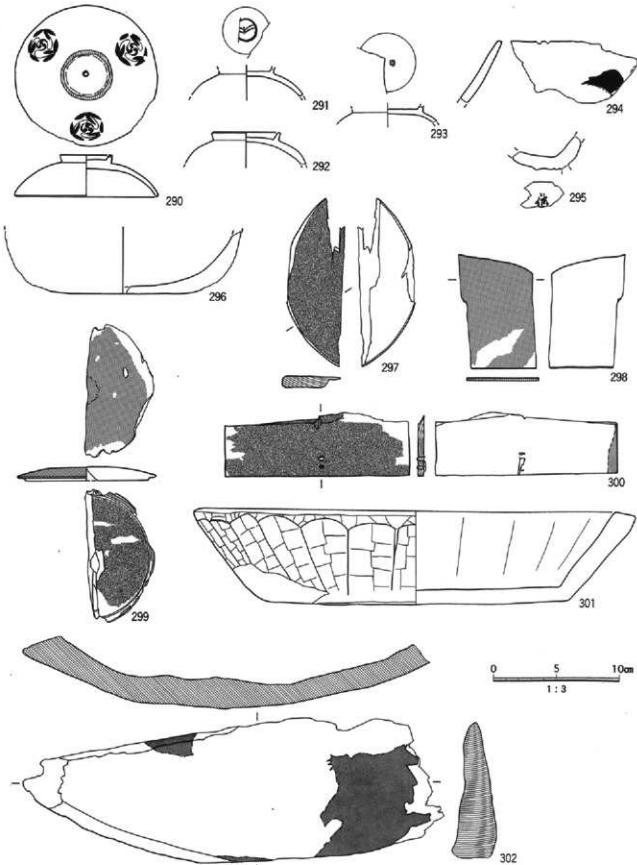
表1 木製品集計表

第34図 S.E.3・遺構外出土 土器・陶磁器



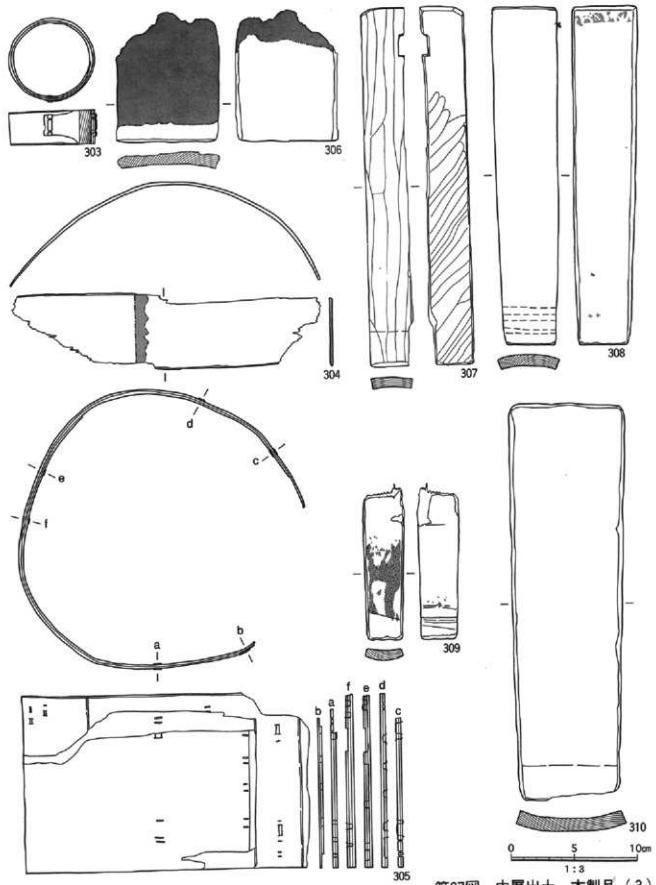
第35図 中層出土 木製品(1)

— 56 —

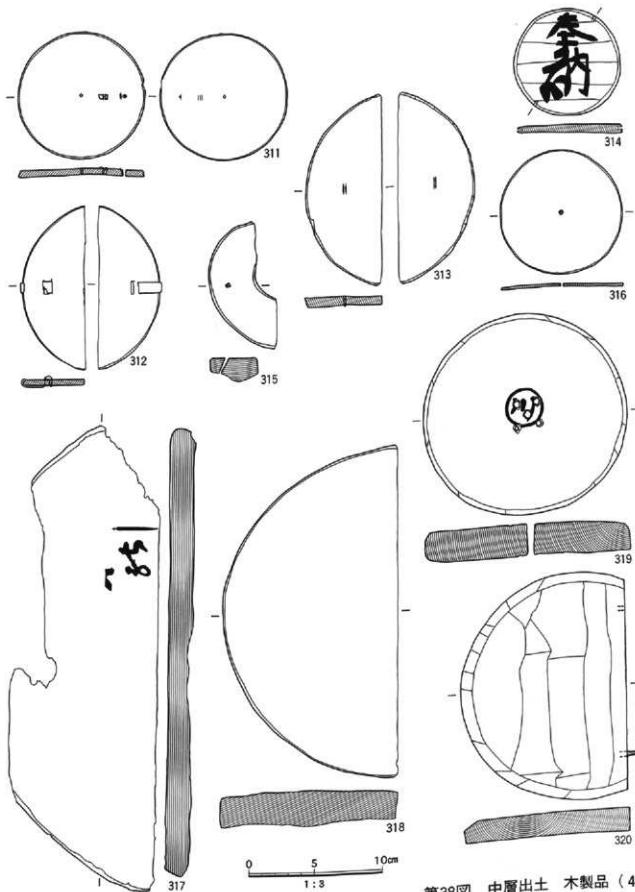


第36図 中層出土 木製品(2)

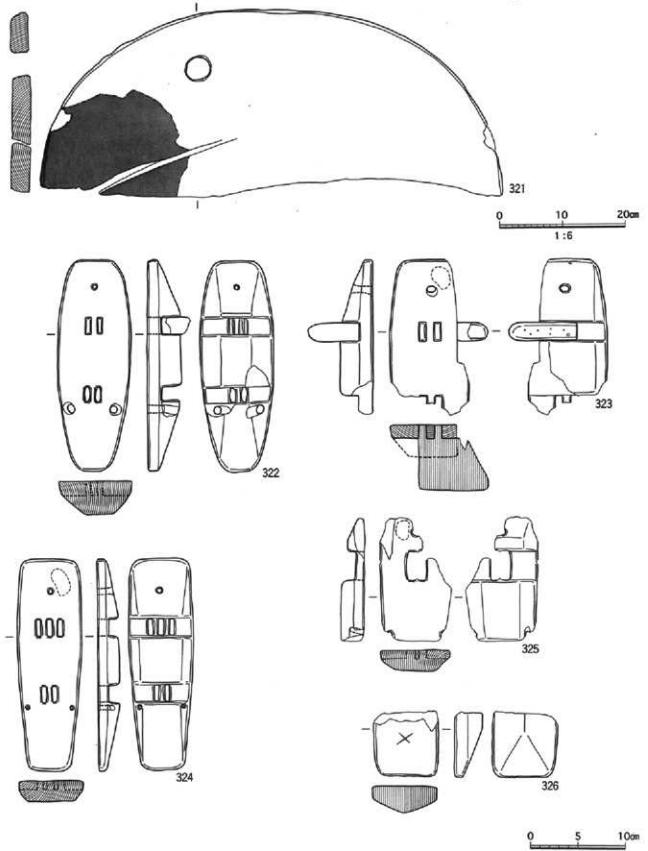
— 57 —



第37図 中層出土 木製品(3)

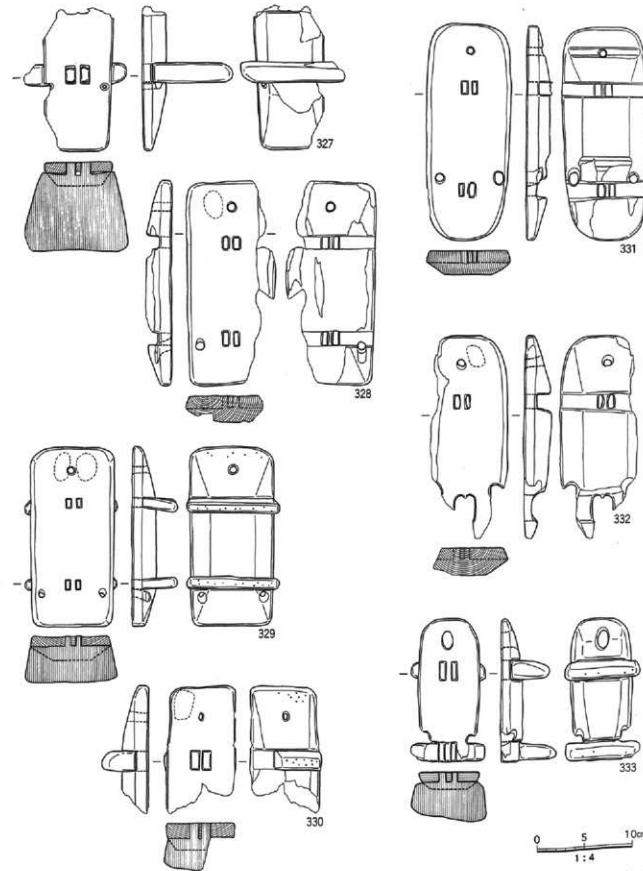


第38図 中層出土 木製品(4)



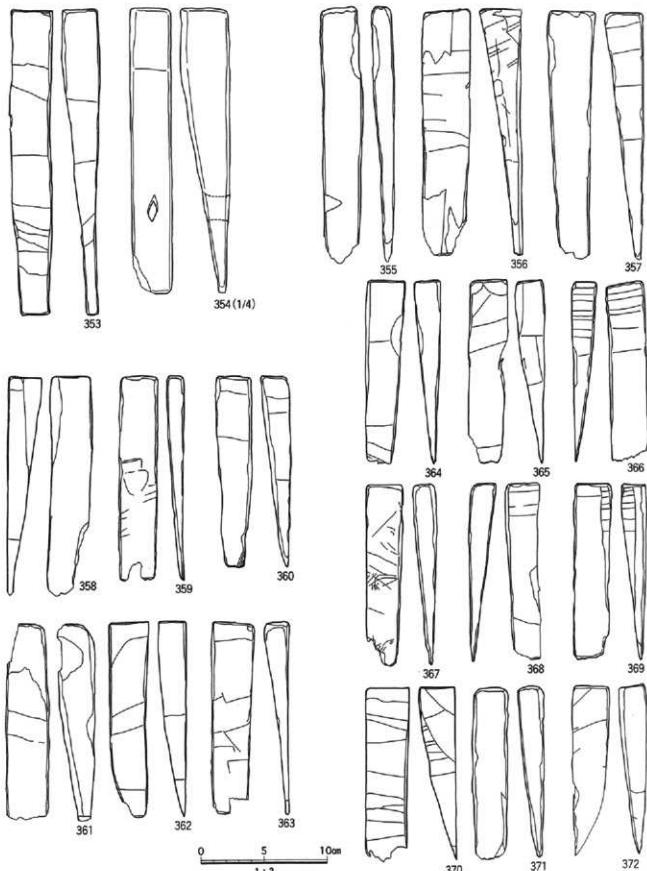
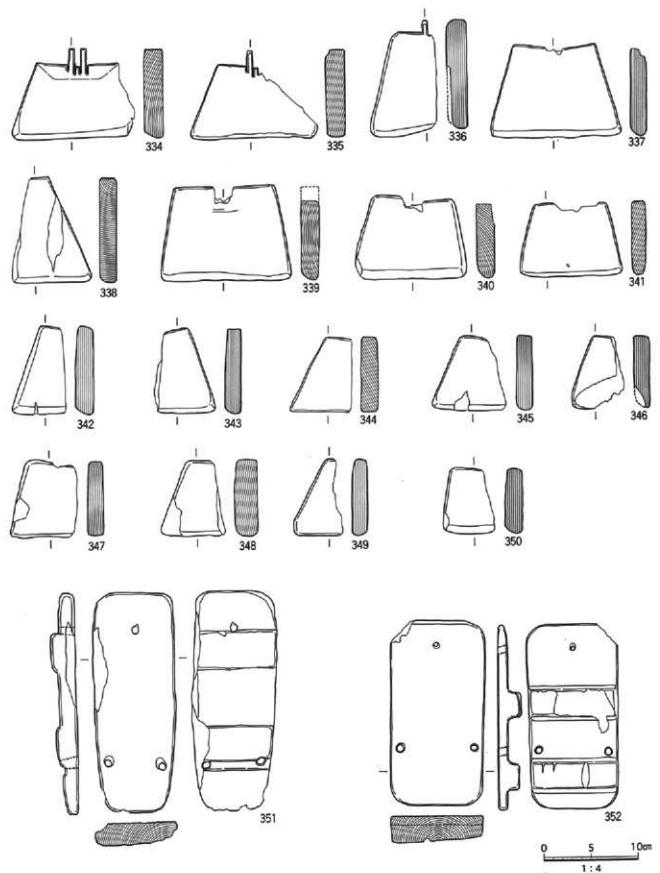
第39図 中層出土 木製品 (5)

— 60 —

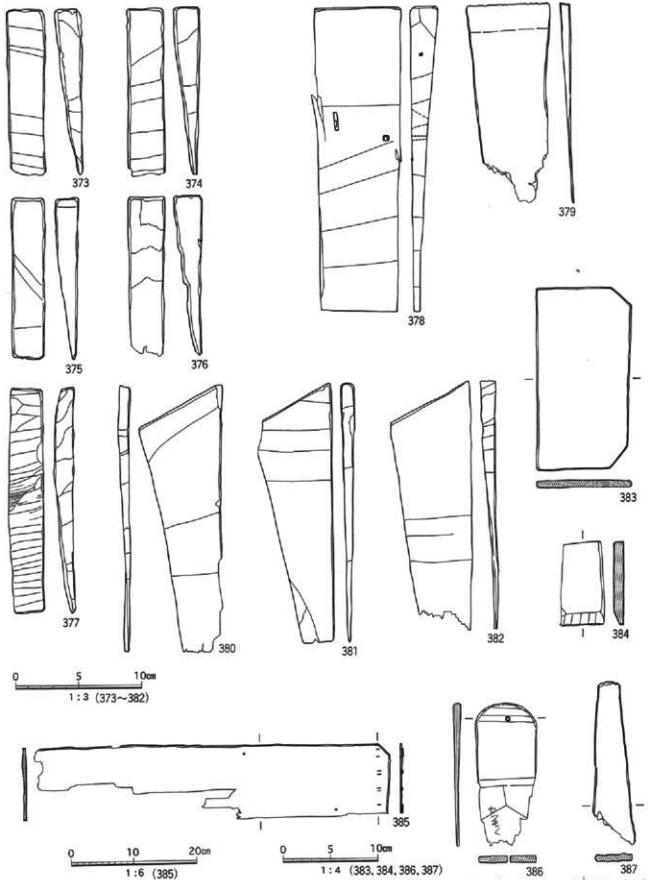


第40図 中層出土 木製品 (6)

— 61 —

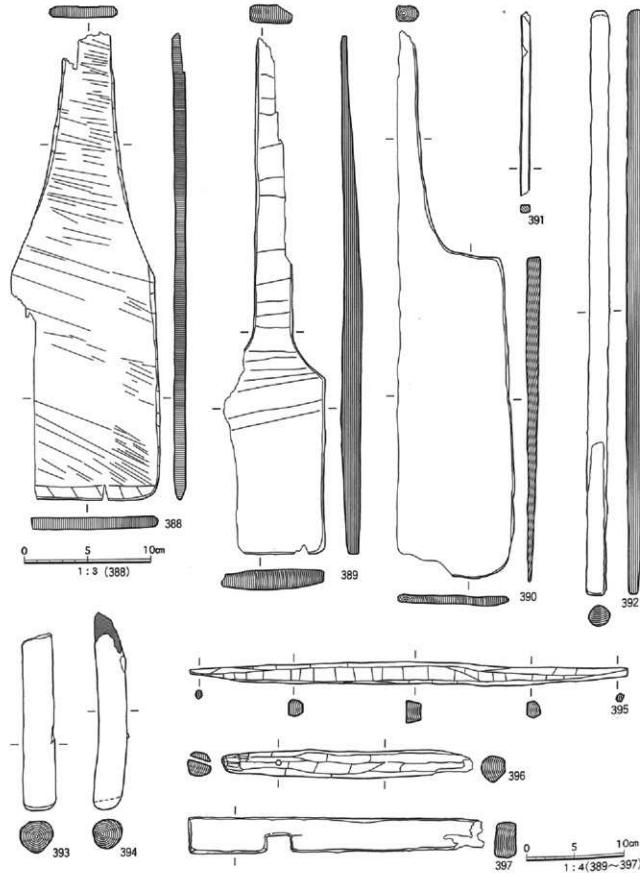


第42図 中層出土 木製品 (8)



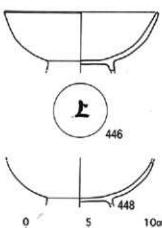
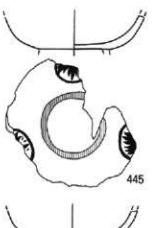
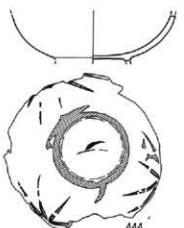
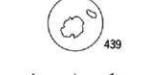
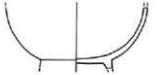
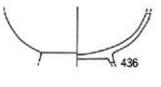
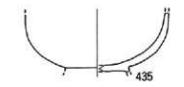
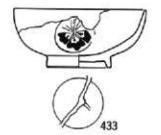
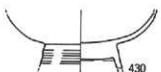
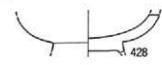
第43図 中層出土 木製品 (9)

— 64 —

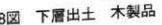
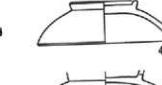
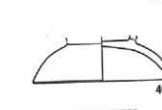
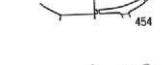
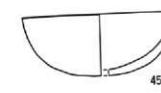
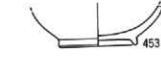
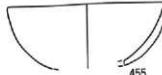
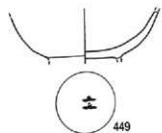


第44図 中層出土 木製品 (10)

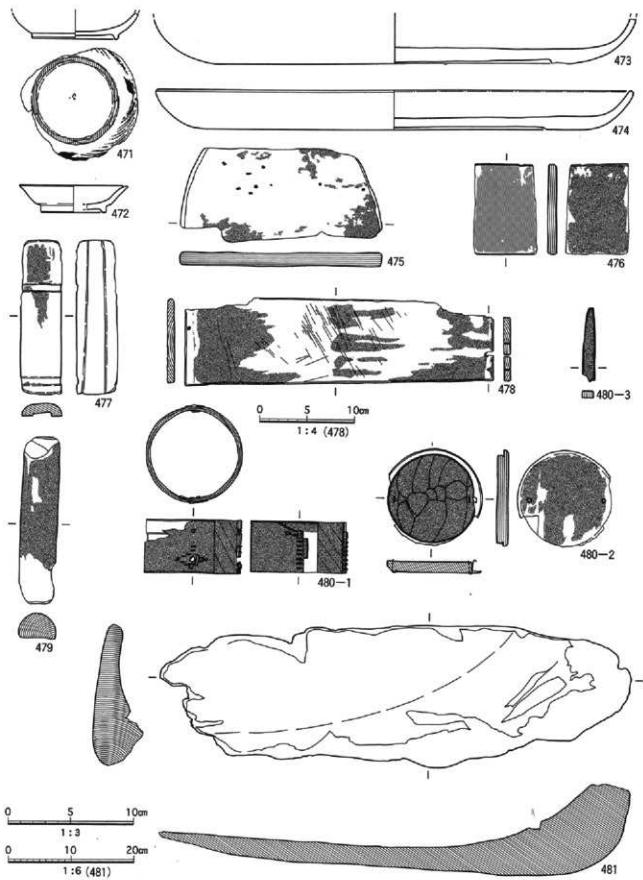
— 65 —



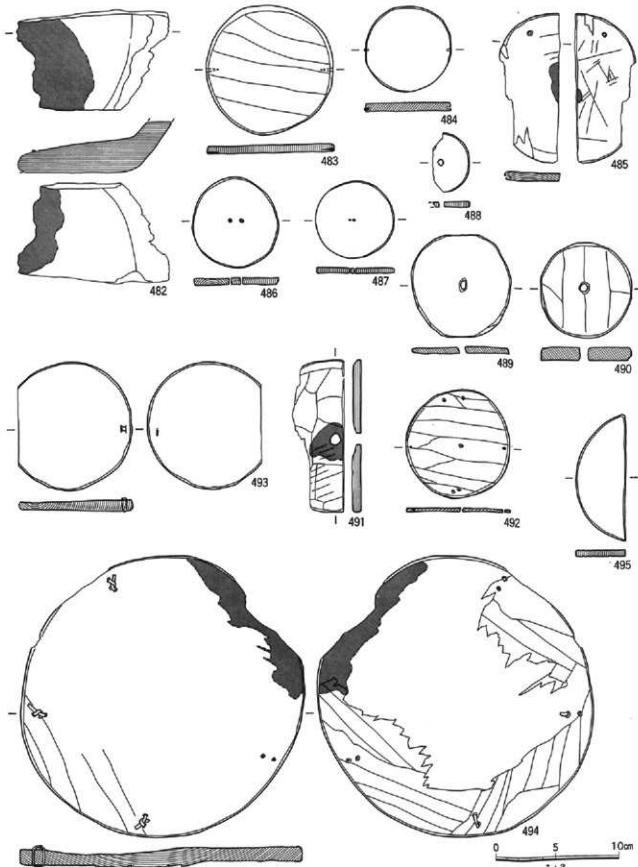
第47図 下層出土 木製品(1)



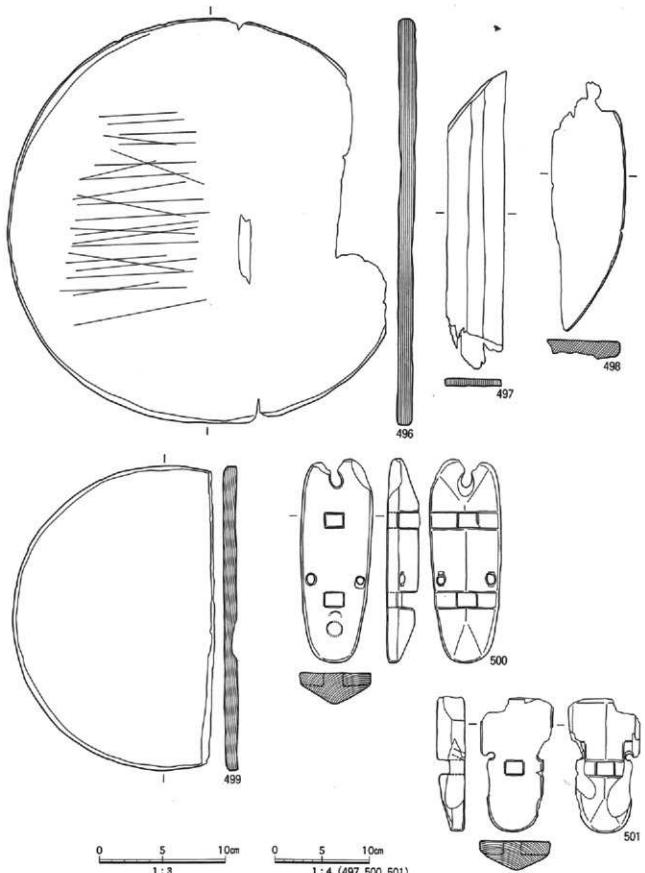
第48図 下層出土 木製品(2)



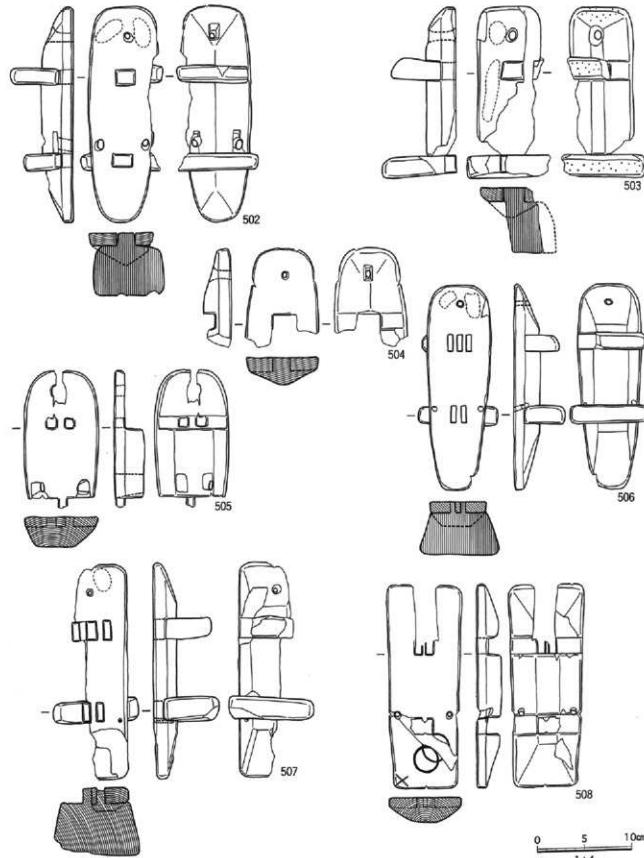
第49図 下層出土 木製品（3）



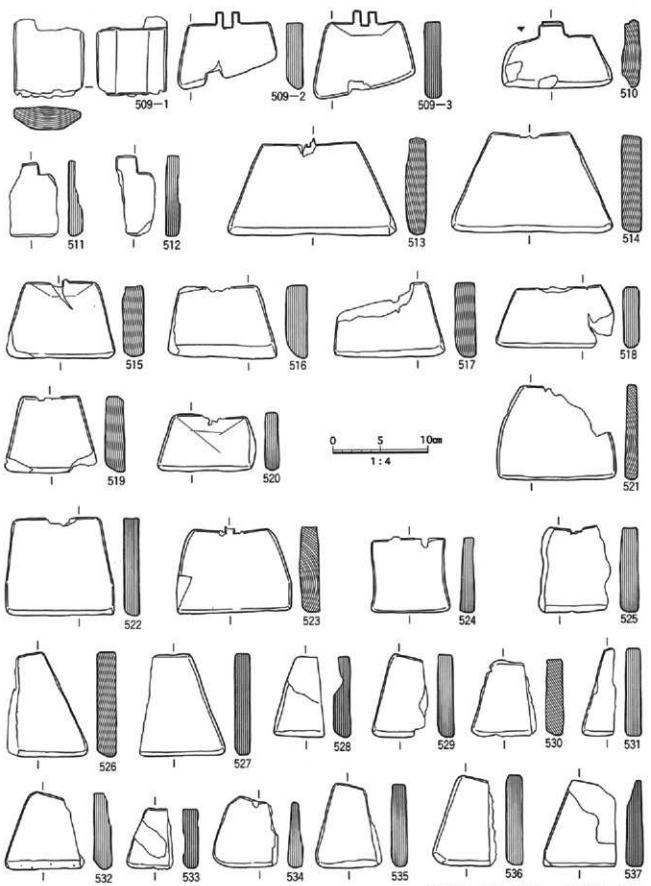
第50図 下層出土 木製品（4）



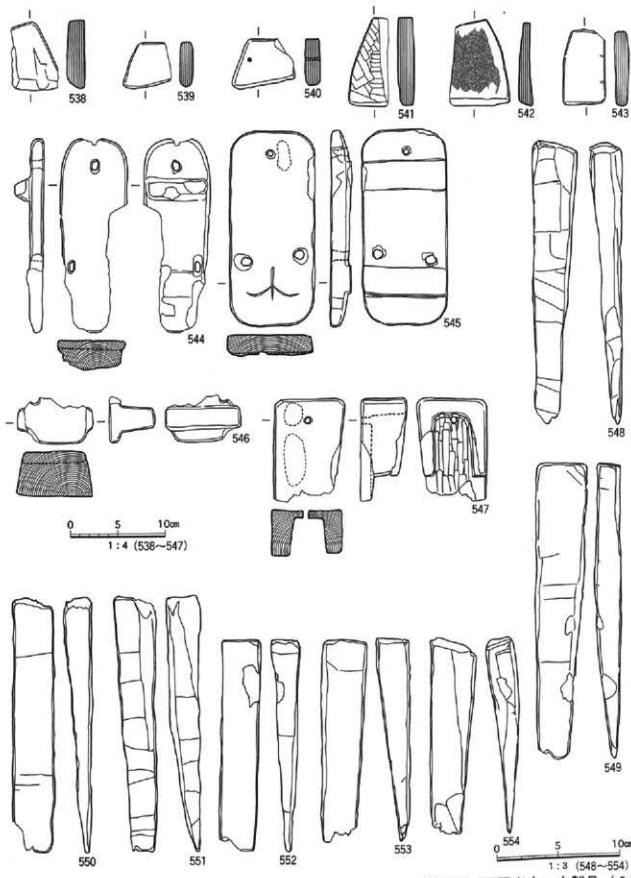
第51図 下層出土 木製品（5）



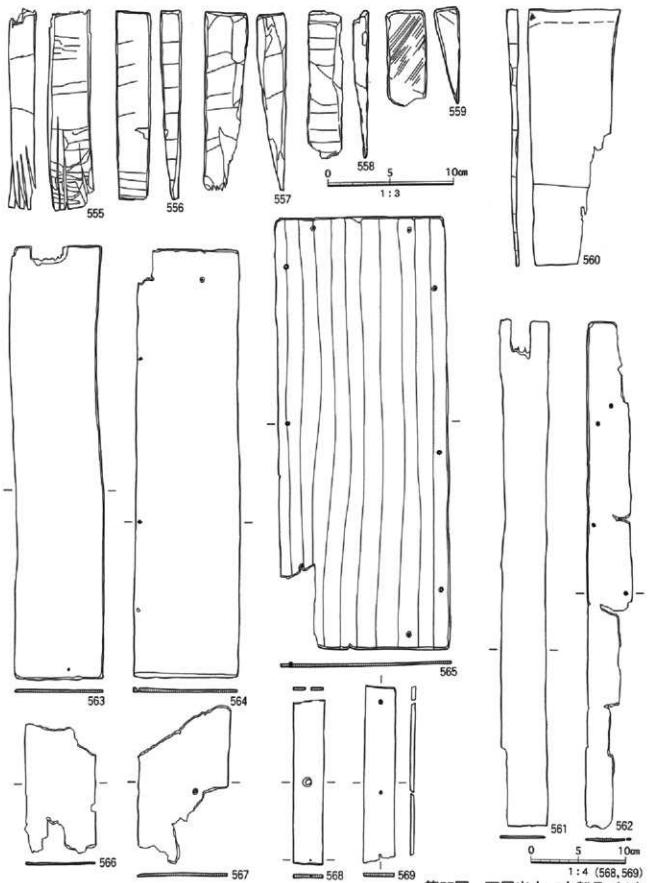
第52図 下層出土 木製品（6）



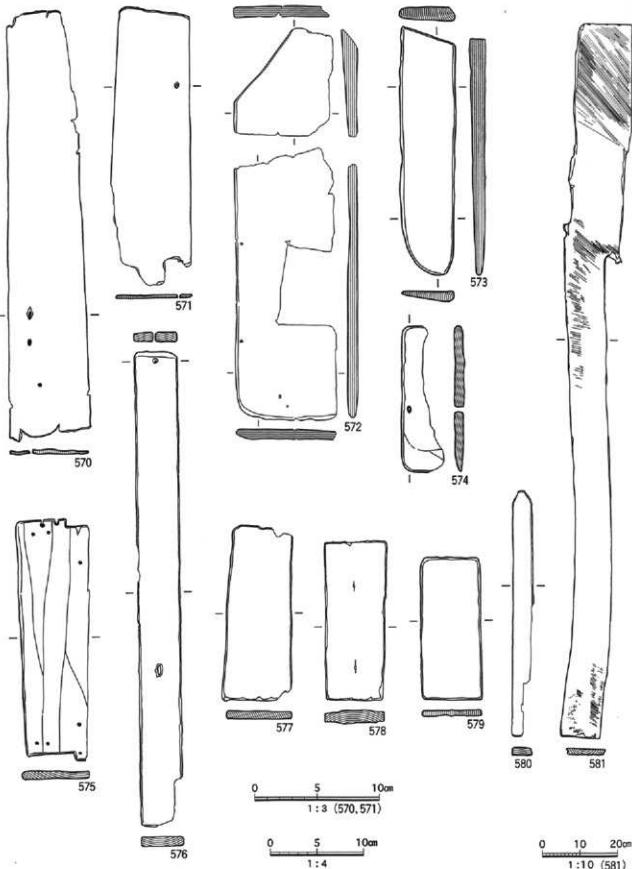
第53図 下層出土 木製品(7)



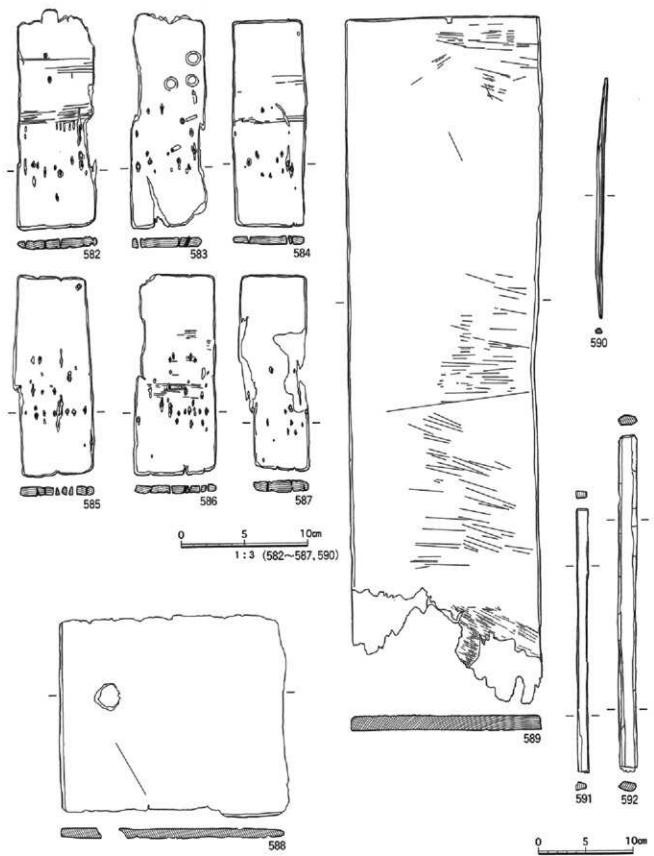
第54図 下層出土 木製品(8)



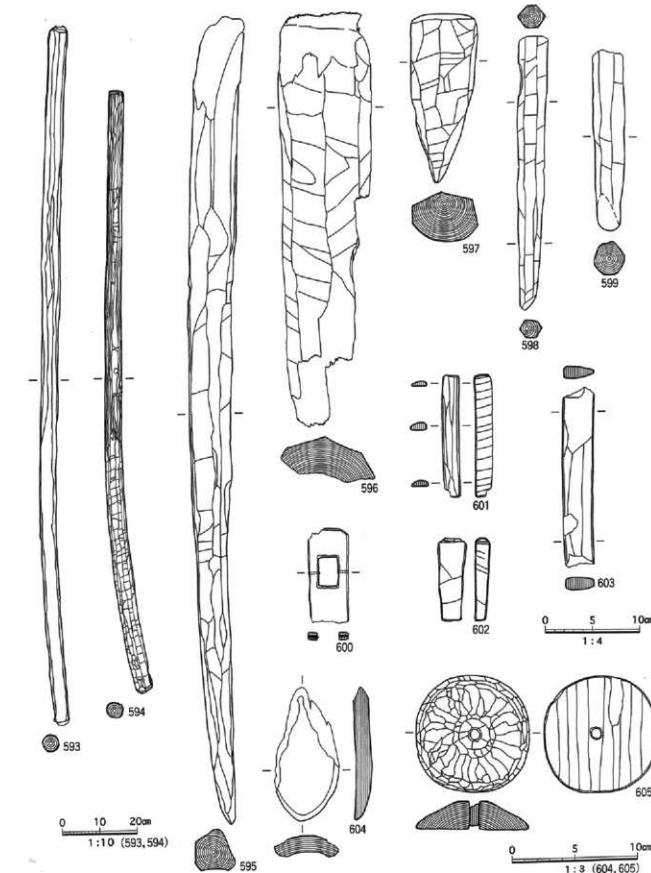
第55図 下層出土 木製品(9)



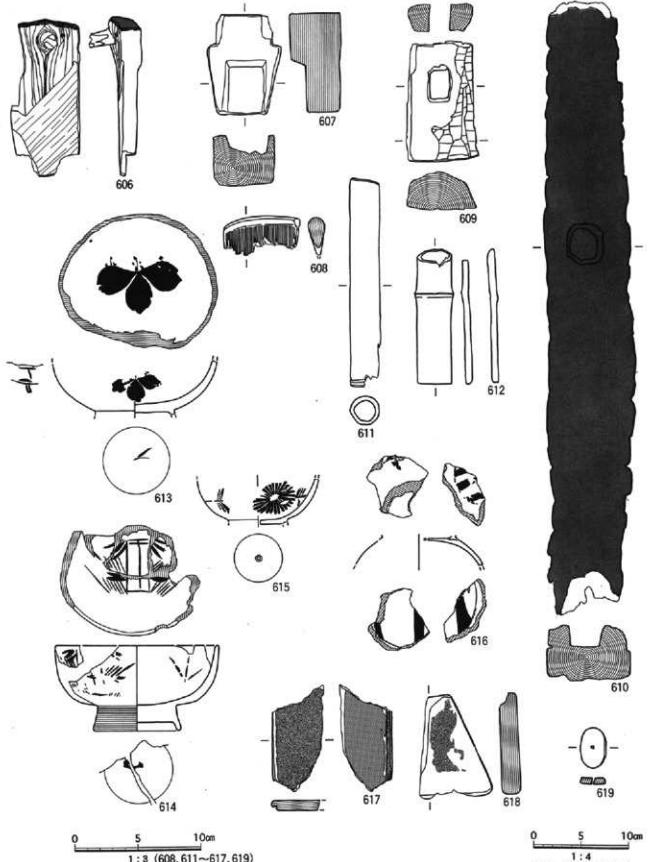
第56図 下層出土 木製品(10)



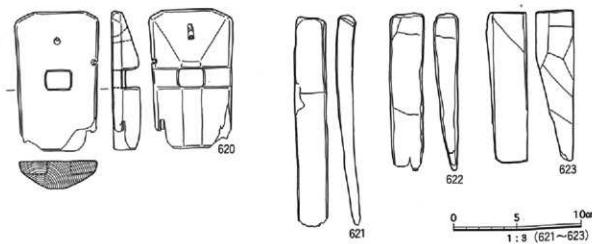
第57図 下層出土 木製品 (11)



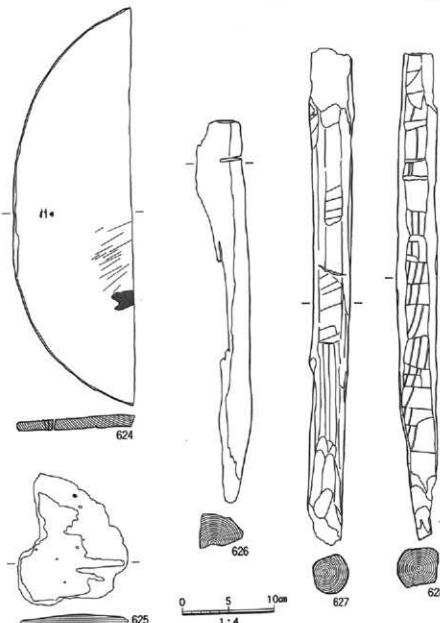
第58図 下層出土 木製品 (12)

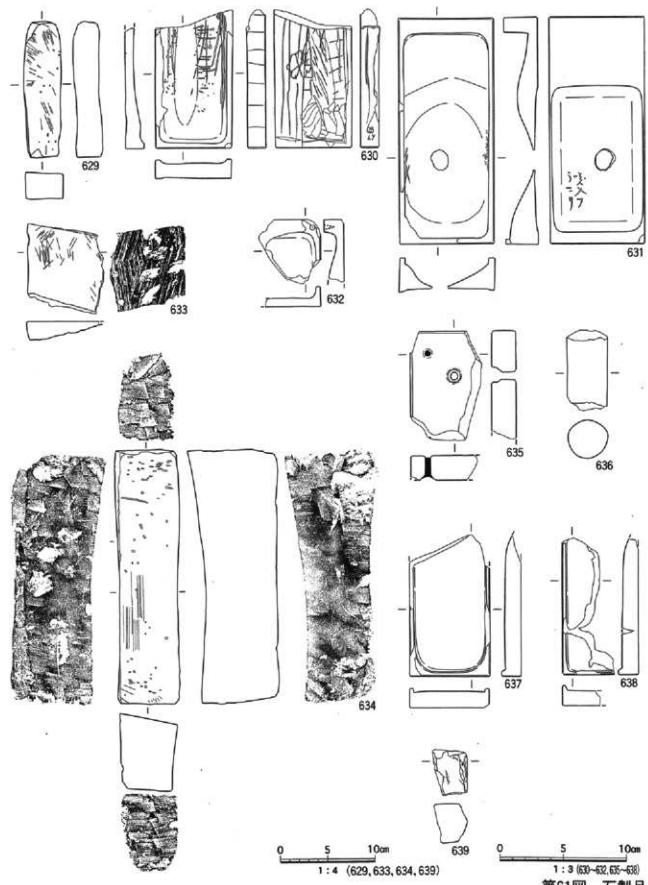


第59図 下層・SD 6出土 木製品

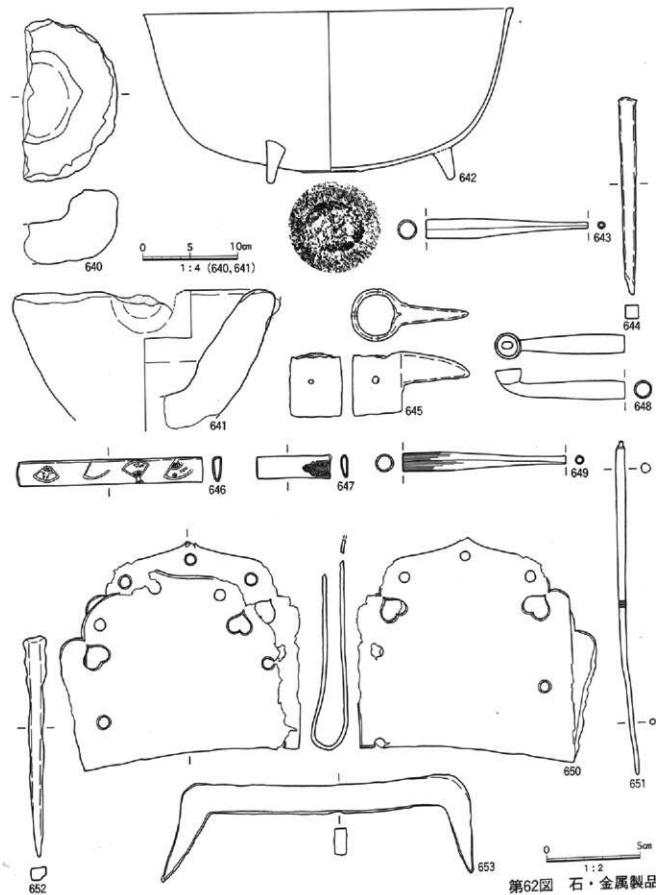


第60図 SD 6・SX10出土 木製品

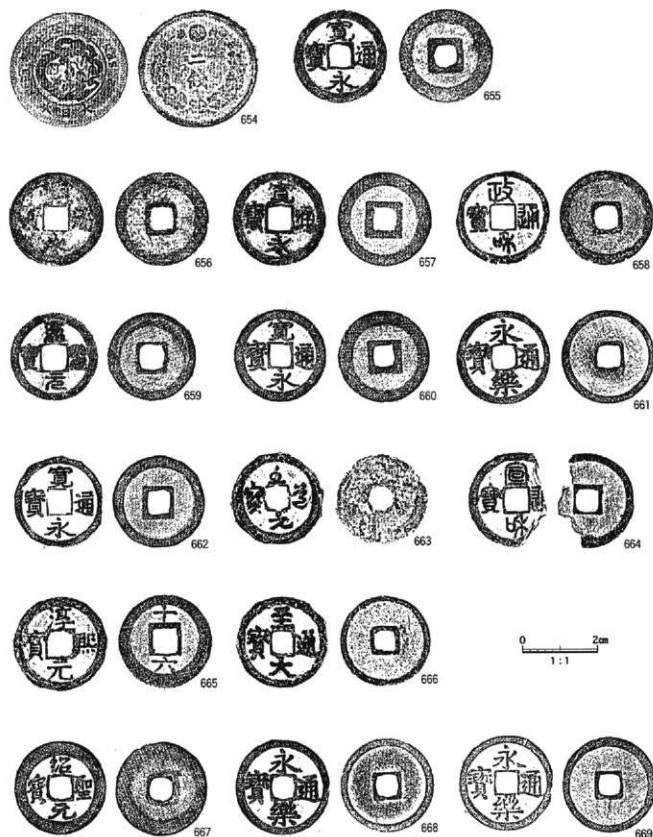




第61図 石製品

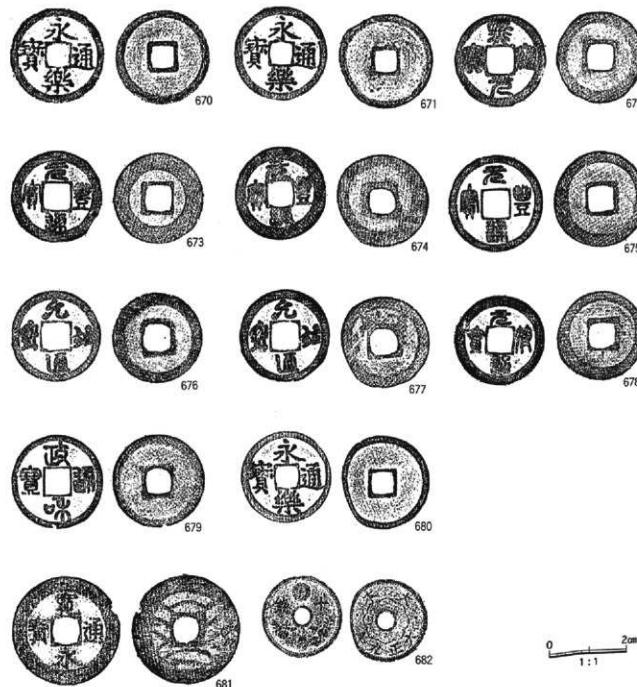


第62図 石・金属製品



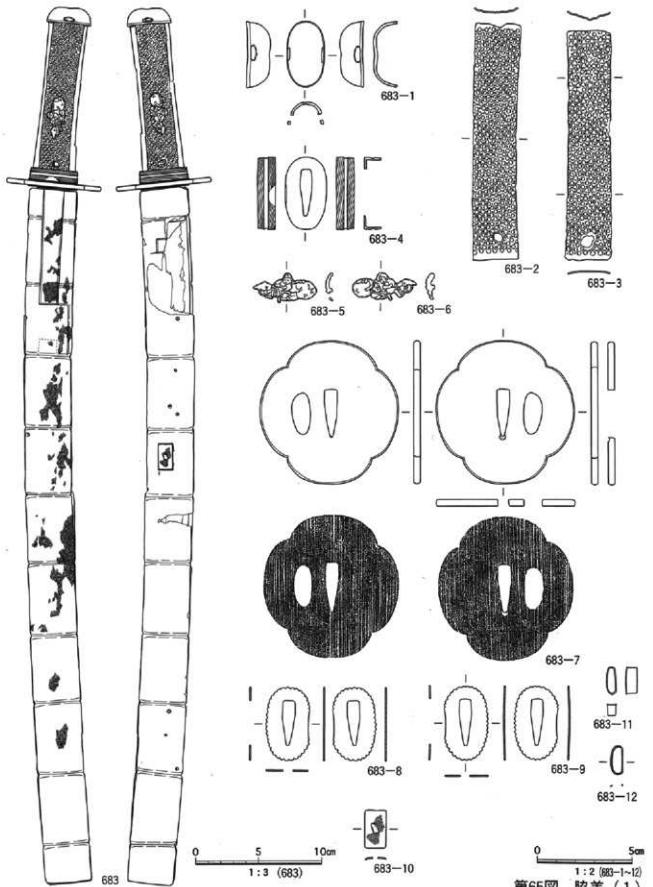
第63図 錢貨（1）

— 84 —



第64図 錢貨（2）

— 85 —



1:2 (683-1~12)



第66図 脇差(2)

表 4 土器・土製品・陶磁器観察表

- 89

番号	学名	英名	日本名	原産地	用途	特徴	備考
205	22 15 土居 植物	植物	植物	S.D.F.4 (82-72)	植	17 YMR / 7.1灰褐色 S.YR / 7.1灰褐色	人形 糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
206	22 15 土居 植物	植物	植物	S.D.F.4 (82-72)	植	17 YMR / 7.1灰褐色 S.YR / 7.1灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
207	22 15 土居 植物	植物	植物	S.D.F.4 (82-72)	植	17 YMR / 7.1灰褐色 S.YR / 7.1灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
208	22 15 土居 植物	植物	植物	S.D.F.4 (82-72)	植	17 YMR / 7.1灰褐色 S.YR / 7.1灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
209	22 15 土居 植物	植物	植物	S.D.F.4 (82-72)	植	17 YMR / 7.1灰褐色 S.YR / 7.1灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
210	22 15 土居 植物	植物	植物	S.D.F.4 (82-72)	植	17 YMR / 7.1灰褐色 S.YR / 7.1灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
211	20 20 藤原 丹	藤原	藤原	S.D.F.3 (82-82)	丹	59 10YR 6/7灰褐色 5YR 5/4灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
212	20 20 藤原 丹	藤原	藤原	S.D.F.3 (82-82)	丹	59 10YR 6/7灰褐色 5YR 5/4灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
213	20 21 藤原 丹	藤原	藤原	S.D.F.4 (82-82)	丹	130 7.5Y 6/1灰褐色 133 2.5Y 5/6暗褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
214	20 22 藤原 丹	藤原	藤原	S.D.F.4 (82-82)	丹	130 10YR 5/1灰褐色 8.5Y 6/1灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
215	20 22 藤原 丹	藤原	藤原	S.D.F.2 (82-82)	丹	108 2.5Y 6/1灰褐色 108 2.5Y 6/1灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
216	21 20 藤原 丹	藤原	藤原	S.D.F.3 (82-82)	丹	108 5.7Y 6/5灰褐色 7.5Y 6/3灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
217	21 20 藤原 丹	藤原	藤原	S.D.F.4 (82-82)	丹	94 8.5Y 6/1灰褐色 10Y 5/1灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
218	21 22 藤原 丹	藤原	藤原	S.D.F.4 (82-82)	丹	120 10YR 5/1灰褐色 8.5Y 6/1灰褐色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
219	21 23 藤原 丹	藤原	藤原	S.D.F.4 (82-82)	丹	120 10YR 8/1白色 10Y 8/1白色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少
220	21 23 藤原 丹	藤原	藤原	S.D.F.4 (82-82)	丹	116 10YR 8/1白色 10Y 8/1白色	糸糸白多シ少 糸糸白多シ少

表 5 木製品観察表

番号	規格	固形 形状	価格等	出力位置	長さ (口径)	幅 (底面)	厚さ (断面)	原色 (表面)	備考
272	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (82~83)	[124]	60	83	外面赤 内面赤 高台内黒(上)		
272	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (86~86)	[126]	60	83	外面赤 内面赤 高台内黒		
274	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (82~74)		45			外面赤 内面赤	
275	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (88~72)		高台輪大65#			外面黒 内面赤 高台内黒	
276	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (88~84)		高台輪大65#			外面黒(文) 黄面(文) 3段足	
277	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (82~84)		高台輪大65#			外面黒(文) 黄面(文) 3段足 高台内黒(有理)	
278	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (82~70)		高台輪大65#			外面黒(文) 黄面(文) 3段足 高台内黒(有理)	
279	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (86~76)	[102]	高台輪大65#	[49.5]		外面赤 内面赤 高台内黒(丸・有)	
280	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (82~60)		92			外面赤 内面赤 高台内黒 ゆがみ	
281	35 29 側面輪	身	S D I F 2		高台輪大65#			外面赤 内面赤 高台内黒 内面に浮き物	
282	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (82~60)		60			外面赤 内面赤 高台内黒 製品形状	
283	35 29 側面輪	身	S D I F 2 (82~62)		高台輪大65#			外面赤 内面赤 高台内黒(丸・有)	
284	35 30 側面輪	身	S D I F 2 (82~60)		高台輪大64#			外面赤 内面赤 高台内黒(丸・有)	
285	35 30 側面輪	身	S D I F 2 (82~60)		高台輪大65#			外面赤(丸) 内面赤(丸) 3段足 高台内黒	
286	35 30 側面輪	身	S D I F 2 (88~66)		高台輪大65#			外面黒(文) 黄面(文) 内面赤 高台内黒	
287	35 30 側面輪	身	S D I F 2 (82~60)		112			外面黒 内面赤 高台内黒(丸・有)	
288	35 30 側面輪	身	S D I F 2 (82~60)		高台輪大65#			外面黒 内面赤 高台内黒(丸・有)	
289	35 30 側面輪	身	S D I F 2 (84~66)		9			外見黒(不) 内面赤	
290	35 33 側面輪	身	S D I F 2 (92~76)	[112]	40	32.5		外面黒(文) (味・巴文3段足) 内面赤 高台内黒(〇)	
291	35 33 側面輪	身	S D I F 2 (82~76)		高台輪大63#			外面赤 内面赤 高台内黒(味)	
292	35 33 側面輪	身	S D I F 2 (82~76)		高台輪大62#			外面赤 内面赤 高台内黒(味)	
293	35 34 側面輪	身	S D I F 2 (84~66)		高台輪大64#			外見黒(不) 内面赤 高台内黒(味)	
294	35 35 側面輪	身	S D I F 2 (80~90)		外見黒(不)			外見黒(不) 内面赤	
295	35 35 側面輪	身	S D I F 2 (94~90)		高台輪大65#			外見黒 内面黒 高台内黒(味)	
296	35 35 側面輪	身	S D I F 2 (92~76)		高台輪大65#			外見黒 内面黒 高台内黒(味)	
297	35 35 側面輪	身	S D I F 2 (92~76)		9			外見黒(不) 内面赤	
298	35 35 側面輪	身	S D I F 2 (84~76)		112			外見黒(不) 内面赤	
299	35 35 側面輪	身	S D I F 2 (88~70)		112			外見黒(不) 内面赤	
300	35 35 側面輪	身	S D I F 2 (86~84)		146	[50]		4.5 銀皮目盛り 黒面漆 面部鏡面に銀付荷物	
301	36 35 側面輪	身	S D I F 2 (86~84)		30	250		黒色地 内面全赤手作加工 底部黒減	
302	36 35 側面輪	身	S D I F 2 (86~84)		11	[111]		11 外見黒 内面黒 輪形容の金具類	
303	36 35 側面輪	身	S D I F 2 (86~84)		33			内面化粧	
304	37 37 側面輪	板	S D I F 2 (82~74)		68			銀皮目盛り 銀付荷物	
305	37 37 側面輪	板	S D I F 2 (84~68)		130	2.5		銀皮目盛り 銀付荷物	
306	37 37 側面輪	板	S D I F 2 (80~94)		18	[221]	厚4	10.6 銀皮目盛り 銀付荷物	
307	37 38 側面輪	板	S D I F 2 (88~66)		104	[80]		10 外面黒(味) 内面を研ぎ化粧	
308	37 37 側面輪	板	S D I F 2 (82~70)		30	47		14 外面黒(味) 左横	
309	37 37 側面輪	板	S D I F 2 (82~70)		559	70		14 外面黒(味) 右横	
310	37 38 側面輪	板	S D I F 2 (84~68)		166	44		10 外面黒(味) 左横 内面に銀付荷物	
311	37 38 側面輪	板	S D I F 2 (82~66)		30.3	87		11 内面黒(味) 左横	
312	38 38 内板	身	S D I F 2 (86~76)		101.5			6.5 銀皮目盛り 刃彌2分身 中央に木綿	
313	38 38 内板	身	S D I F 2 (86~76)		135			4 銀皮目盛り	
314	38 38 内板	身	S D I F 2 (86~76)		135			4 銀皮目盛り	
315	38 38 内板	身	S D I F 2 (86~76)		135			4 銀皮目盛り	
316	38 38 内板	身	S D I F 2 (84~84)		887			7 「御前」墨書き 木柄黒(味)所	
317	38 38 内板	身	S D I F 2 (88~62)		[100.5]	[54]		19 扇孔	
318	38 38 内板	身	S D I F 2 (94~92)		98			3 中央に扇孔	
319	38 38 内板	身	S D I F 2 (88~62)		260			27 丸印(味)	
320	38 38 内板	身	S D I F 2 (88~62)		261			27 丸印(味)	
321	38 38 内板	身	S D I F 2 (84~68)		162			25 中央に5分所墨書き 丸印(味)	
322	38 39 内板	身	S D I F 2 (84~72)		181	130		19 刻れ印(味) 木打2分所	
323	39 39 内板	身	S D I F 2 (82~66)		725	293		29 ひ円印(味) 扇孔一様化	
324	39 40 側面輪	身	S D I F 2 (88~74)		221	76		35 ひ円印2分	
325	40 40 側面輪	身	S D I F 2 (88~90)		[114]	82		35 ひ円印2分	
326	39 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~66)		69	73		19 砂眼	
327	39 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~66)		80	80		23 ほぞ有3後2 斜面底	
328	39 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~66)		131	[76]		22 ほぞ有3後2 斜面底	
329	39 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~66)		69	69		28 研削	
330	40 41 側面輪	身	S D I F 2 (88~80)		135	72		25 ひ円印2分	
331	39 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~66)		95	[109]		21.5 研削	
332	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~76)		217	95		28 指彫裏	
333	40 41 側面輪	身	S D I F 2 (96~72)		189	90		25 先端に砂眼 研削底	
334	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~72)		47	56		10 研削	
335	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (88~72)		48	97		10 研削	
336	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~72)		47	56		10 研削	
337	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (88~72)		135	73		28 ひ円印2分	
338	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (84~72)		50	49		28 ひ円印2分	
339	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (84~72)		219	89		25 ひ円印2分	
340	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (84~72)		202	80		30 ひ円印2分	
341	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~64)		145	69		25 ひ円印2分	
342	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~64)		52	72		21.5 研削	
343	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~64)		59	79		21.5 研削	
344	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~54)		97	[131]		20 ひ円印2分	
345	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~54)		95	134		20 ほぞ3か	
346	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~74)		124	124		20 ほぞ3か	
347	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~58)		69	137		17 ほぞ2	
348	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (92~76)		112	86		18 ほぞ2	
349	41 41 側面輪	身	S D I F 2 (82~66)		103	137		19 ほぞ2	

番号	構造	形状	部位等	出力位置	長さ (口径)	幅 (底面)	厚さ (断面)	原色 (表面)	備考
349	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~52)		135	80	135	18 ほぞ2	
350	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~86)		78	106	15	18 ほぞ2	
351	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~64)		84	57	20 ほぞ2		
352	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (88~60)		90	65	18	18 ほぞ無し 梨挽用	
353	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		89	63	17	18 ほぞ無し	
354	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		87	63	17	18 ほぞ無し	
355	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~74)		78	55	17	18 ほぞ無し	
356	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~74)		83	55	17	18 ほぞ無し	
357	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~74)		83	55	17	18 ほぞ無し	
358	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~54)		140.5	27.5	20		
359	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	29.5	20.5		
360	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
361	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
362	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
363	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
364	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
365	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
366	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
367	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
368	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
369	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
370	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
371	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
372	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
373	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
374	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
375	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
376	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
377	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
378	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
379	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
380	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
381	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
382	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
383	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
384	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
385	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
386	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
387	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
388	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
389	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
390	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
391	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
392	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
393	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
394	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
395	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
396	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
397	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		140	30	20		
398	41 41 側面輪	下取	S D I F 2 (82~62)		1				

書名	著者	翻訳者	部数等	巻数	原名(西文)	翻訳(英語)	長さ(口径)
417 65 20 御用物 身	S D I F 3 (84- 92)	(56)	外函墨 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
418 46 30 御用物 身	S D I F 4 (82- 94)	55	外函墨 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
419 46 30 御用物 身	S D I F 4 (84- 96)	(57)	外函墨 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
420 46 30 (御用物 身)	S D I F 3 (84- 72)	高台鼎大怪 (6)	外函墨 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
421 46 30 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 74)	62	外函墨 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
422 46 30 (御用物 身)	S D I F 3 (84- 60)	(56)	外函墨 内函墨 高台内墨 (〔上〕)				
423 46 31 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 64)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 内函墨 高台内墨 (〔上〕)				
424 46 31 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 68)	66	外函墨 内函墨 高台内墨				
425 46 31 (御用物 身)	S D I F 4 (85- 90)	35	外函墨 内函墨 高台内墨				
426 46 31 (御用物 身)	S D I F 2 & 4 (92- 78)	高台鼎大怪 (6)	外函墨 (柳文 2章半) 内函墨 高台内墨				
427 47 31 (御用物 身)	S D I F 3 (84- 72)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 内函墨 高台内墨				
428 47 31 (御用物 身)	S D I F 3 (84- 72)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 内函墨 高台内墨				
429 47 31 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 70)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 (牛毛文 4横幅 下す文字) 内函墨				
430 47 31 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 62)	高台鼎大怪 (4)	外函墨 内函墨 高台内墨				
431 47 31 (御用物 身)	S D I F 2 & 3 (98- 68)	高台鼎大怪 (6)	外函墨 内函墨 高台内墨 (〔不明〕) ゆがみ大				
432 47 31 (御用物 身)	S D I F 3 (84- 60)	(189)	外函墨 (柳文 2章半) 内函墨				
433 47 31 (御用物 身)	S D I F 3 (84- 60)	(106)	外函墨 (柳文 2章半) 内函墨				
434 47 31 (御用物 身)	S D I F 4 (88- 90)	高台鼎大怪 (2)	外函墨 (丸文 2章半 2章半) 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
435 47 31 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 88)	高台鼎大怪 (2)	外函墨 内函墨 高台内墨				
436 47 32 (御用物 身)	S D I F 3 (84- 80)	高台鼎大怪 (6)	外函墨 内函墨 高台内墨				
437 47 32 (御用物 身)	S D I F 3 (84- 80)	高台鼎大怪 (6)	外函墨 内函墨 高台内墨				
438 47 32 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 96)	高台鼎大怪 (6)	外函墨 内函墨 高台内墨				
439 47 32 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 90)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
440 47 32 (御用物 身)	S D I F 4 (88- 94)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 (牛毛文 4横幅 下す文字) ゆがみ				
441 47 32 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 92)	高台鼎大怪 (4)	外函墨 内函墨 高台内墨				
442 47 32 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 92)	高台鼎大怪 (4)	外函墨 内函墨 高台内墨				
443 47 32 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 98)	高台鼎大怪 (6)	外函墨 内函墨 高台内墨				
444 47 32 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 98)	高台鼎大怪 (6)	外函墨 (柳文 3横幅) 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
445 47 32 (御用物 身)	S D I F 3 (84- 60)	高台鼎大怪 (4)	外函墨 (丸文 2章半 2章半) 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
446 47 32 (御用物 身)	S D I F 4 (84- 60)	高台鼎大怪 (4)	外函墨 (丸文 2章半 2章半) 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
447 47 32 (御用物 身)	S D I F 4 (84- 60)	高台鼎大怪 (4)	外函墨 (丸文 2章半 2章半) 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)	122			
448 47 32 (御用物 身)	S D I F 4 (84- 82)	高台鼎大怪 (4)	外函墨 (丸文 2章半 2章半) 内函墨 高台内墨				
449 47 32 (御用物 身)	S D I F 4 (84- 88)	高台鼎大怪 (4)	外函墨 (丸文 2章半 2章半) 内函墨 高台内墨				
450 48 33 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 66)	55	外函墨 内函墨 高台内墨 (〔上〕)				
451 48 33 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 66)	高台鼎大怪 (6)	外函墨 内函墨 高台内墨 (かたみ文)				
452 48 33 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 66)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 内函墨 高台内墨 (底部缺损)				
453 48 33 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 92)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 (柳文 3横幅) 内函墨				
454 48 33 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 92)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 (柳文 3横幅) 内函墨				
455 48 33 (御用物 身)	S D I F 4 (94- 92)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 (柳文 3横幅) 内函墨 高台内墨 (底部缺损)				
456 48 33 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 68)	(130)	外函墨 内函墨 高台内墨				
457 48 33 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 58)	(120)	外函墨 内函墨				
458 48 33 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 58)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 (柳文 3横幅) 内函墨				
459 48 33 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 70)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 (柳文 3横幅) 内函墨				
460 48 33 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 70)	高台鼎大怪 (5)	外函墨 (柳文 3横幅) 内函墨				
461 48 34 (御用物 身)	S D I F 4 (94- 78)	661	高台鼎大怪 (5)	外函墨 (柳文 3横幅) (経文 2章半) 内函墨 (柳文 1章半) 高台内墨 (〔不明〕)			
462 48 34 (御用物 身)	S D I F 4 (94- 78)	112	高台鼎大怪 (6)	外函墨 (柳文 3横幅) (経文 2章半) 内函墨 (柳文 1章半) 高台内墨 (〔不明〕)			
463 48 34 (御用物 身)	S D I F 4 (94- 80)	114	高台鼎大怪 (6)	外函墨 (柳文 3横幅) (経文 2章半) 内函墨 (柳文 1章半) 高台内墨 (〔不明〕)			
464 48 34 (御用物 身)	S D I F 4 (94- 80)	116	高台鼎大怪 (5)	外函墨 (柳文 3横幅) (経文 2章半) 内函墨 (柳文 1章半) 高台内墨 (〔不明〕)			
465 48 34 (御用物 身)	S D I F 3 (86- 68)	(105)	50	外函墨 内函墨 高台内墨			
466 48 34 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 64)	(113)	高台鼎大怪 (6)	外函墨 内函墨 高台内墨			
467 48 34 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 64)	(43)	外函墨 内函墨 高台内墨				
468 48 34 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 56)	(89)	外函墨 内函墨 高台内墨				
469 48 34 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 56)	(36)	外函墨 内函墨 高台内墨				
470 48 34 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 68)	(56)	外函墨 内函墨 高台内墨				
471 48 34 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 68)	(67)	外函墨 (千鳥・すさみ文) 内函墨 高台内墨 (〔不明〕)				
472 49 35 (御用物 身)	S D I T 9 (80- 62)	(85)	21,5	外函墨 内函墨 高台内墨			
473 49 35 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 86)	(274)	外函墨 内函墨 高台内墨				
474 49 36 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 56)	(372)	31 外函墨 (口唇墨まで) 内函墨				
475 49 36 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 68)	(75)	11 黒色墨				
476 49 36 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 68)	(72)	7 丹色墨				
477 49 36 (御用物 身)	S D I T 9 (84- 92)	(125)	10 橙色墨				
478 49 36 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 94)	(37)	7,6 黄色墨				
479 49 36 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 78)	(132)	7,6 黄色墨				
480 49 36 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 68)	(76)	7 墨				
481 49 36 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 68)	(76)	7 墨				
482 49 36 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 68)	(53)	8,5 紫色墨				
483 49 36 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 68)	(5)	5,5 全黑色墨				
484 49 37 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 94)	(744)	222	5 中央に毫孔			
485 49 37 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 54)	(120)	(80)	30 一部脱化			
486 49 39 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 80)	102	6,5 木板墨 2ヶ所				
487 49 39 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 80)	70	6,5 木板墨 2ヶ所				
488 49 39 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 80)	67	6,5 木板墨 2ヶ所				
489 49 39 (御用物 身)	S D I F 3 (82- 80)	61,5	4,5 木板墨 2ヶ所				
490 49 39 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 54)	(23)	5 ◎孔				
491 50 46 (御用物 身)	S D I F 4 (82- 60)	件84	5 中央に毫孔				

書名	翻訳者	形態	新規	出目置	長さ(口徑)	幅(底面)	墨子(底面)	備考
490 50 46 (内坂状 物)		S D I F 3 (84- 78)	50	中央に毫孔	10	中央に毫孔		
491 50 46 (内坂状 物)		S D I F 3 (84- 78)	70	50	120	3,5 黑色墨		
492 50 46 (内坂状 物)		S D I F 4 (84- 56)	66	3 丸孔 2ヶ所 ケビキ墨 木羽残存	3	丸孔 2ヶ所		
493 50 46 (内坂状 物)		S D I F 4 (82- 68)	68	68	110	9 檀木墨前彫		
494 50 46 (内坂状 物)		S D I F 4 (82- 62)	62	62	223	14 御用墨前彫 5ヶ所削		
495 50 46 (内坂状 物)		S D I F 4 (82- 62)	100	100	38	5		
496 51 50 (内坂状 物)		S D I F 2 & 3 (82- 58)	329		13,5	片方の鏡に刀物墨多数		
497 51 50 (内坂状 物)		S D I F 2 & 3 (82- 58)	300	[61]	9,5			
498 51 50 (内坂状 物)		S D I F 2 & 3 (98- 56)	135		14			
499 51 50 (内坂状 物)		S D I T 1 墓	240		10			
500 51 52 (露印下駄 台)		S D I F 3 上面	25	25	32	はぞ六一 機き印 [○]		
501 51 52 (露印下駄 台)		S D I F 3 上面	25	25	15	はぞ六一 機き印 [○]		
502 52 52 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	228	72	34	はぞ六一 指揮氣		
503 52 52 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	64	64	16	はぞ六一 指揮氣		
504 52 52 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	65	65	18	はぞ六一 指揮氣		
505 52 52 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	66	66	22	はぞ六一 指揮氣		
506 52 52 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 60)	215	67	27	はぞ六三 3次2 指揮氣		
507 52 52 (露印下駄 台)		S D I F 3 (84- 70)	103	49	17	はぞ六三 3次2 指揮氣		
508 52 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	215	75	26,5	はぞ六二 機き印 [○] 2 墓印 [×]		
509 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 3 (84- 68)	86	73	24			
510 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 3 (84- 68)	85	65	17			
511 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 64)	80	118	19	はぞ一		
512 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (84- 76)	79	52	15	はぞ一		
513 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 78)	85	42	16	はぞ一		
514 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 76)	103	120	21	はぞ一 残部に卯孔 丸庭度化		
515 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 3 (84- 64)	83	118	21,5	はぞ一 台痕		
516 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	90	84	19	はぞ一		
517 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 64)	77	117	21			
518 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 64)	82	93	17			
519 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	83	93	17			
520 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	85	54	15	はぞ二		
521 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	100	126	13	中央部に卯孔 丸庭度化		
522 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 3 (82- 76)	104	115	11			
523 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 3 (82- 66)	85	111	21	はぞ二		
524 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	91	94	15	はぞ二		
525 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 62)	93	93	16	はぞ二		
526 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 3 (96- 62)	110	85	20			
527 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (84- 74)	106	90	16	無面墨取り		
528 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 62)	85	54	15			
529 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 60)	86	69	18			
530 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (80- 60)	86	68	18			
531 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 62)	93	93	18			
532 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 78)	83	83	18			
533 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 56)	49	49	18			
534 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 56)	72	69	18			
535 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 56)	72	69	18			
536 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 74)	96	68	18			
537 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 75)	91	77	18			
538 53 53 (露印下駄 台)		S D I T 3 (84- 75)	72	49	18			
539 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 74)	97	51	13,5			
540 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 70)	53	69	18	卯孔墨		
541 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (80- 62)	93	42	18	卯孔度化		
542 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 68)	92	64	15	無孔墨		
543 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 58)	80	46	14	卯孔に射穴 補修手		
544 53 53 (露印下駄 台)		S D I P 4 (82- 56)	80	71	30			
545 53 53 (露印下駄 台)		S D I F 4 (82- 56)	206	89	22	織紋路		
546 53 54 (内坂状 物)		S D I F 3 (82- 70)	109	80	48			
547 53 54 (内坂状 物)		S D I F 3 (82- 76)	106	74	49	木		

番号	種別	固有名	部品名	出土地点	長さ (寸)	幅 (寸)	厚さ (寸)	備考
549	54	鉛	S D 1 F 4 (82-60)	235	42	21		
550	48	鉛	S D 1 F 4 (82-68)	201	33	22		
551	54	鉛	S D 1 F 4 (82-60)	202	33	27		
552	54	鉛	S D 1 F 4 (82-76)	167	30	23		
553	54	鉛	S D 1 F 4 (82-60)	36	33	26		
554	54	鉛	S D 1 F 4 (82-56)	156	33	27		
555	54	鉛	S D 2 F 3 (96-74)	[155]	33	18		
556	54	鉛	S D 1 F 3 (88-64)	149	28	16.5		
557	55	鉛	S D 1 F 3 (84-72)	[146]	34	23		
558	54	鉛	S D 1 F 3 (82-60)	121	22	12		
559	54	鉛	S D 1 F 3 (82-76)	[76]	33	19		
560	55	鉛	S D 1 F 4 (82-78)	232	71	8	压痕	
561	55	鉛	S D 1 F 3 (84-82)	369	35.5	1.5		
562	55	鉛	S D 1 F 3 (82-72)	[399]	36	2	穿孔	
563	55	鉛	S D 1 F 3 (82-72)	343	70	2	穿孔	
564	55	木製	S D 2 F 3 (86-82)	238	84	3.5	木製に穿孔 木軒残存	
565	55	木製	S D 2 F 3 (86-82)	343	136	2.5	木製 木軒残存	
566	55	木製	S D 1 F 3 (82-72)	[101]	85.5	1.5		
567	55	木製	S D 1 F 3 (82-72)	[105]	71	2	穿孔	
568	55	木製	S D 1 F 3 (82-72)	[171]	33	1.5	木製に穿孔	
569	55	木製	S D 1 F 3 (82-76)	[186.5]	32.5	3.5	木製に穿孔	
570	56	木製	S D 1 F 3 (82-72)	[336]	64	3	穿孔	
571	56	木製	S D 1 F 3 (82-72)	[217]	63	2.5	穿孔	
572	56	木製	S D 1 F 3 (86-84)	[368]	108	17		
573	56	木製	S D 1 F 3 (82-72)	[364]	108	16.5		
574	56	木製	S D 1 F 3 (82-54)	[103]	44	10	穿孔	
575	56	木製	S D 1 F 3 (82-72)	[248]	78	8.5	穿孔	
576	56	木製	S D 1 F 4 (82-64)	531	46	10	穿孔	
577	56	木製	S D 1 F 4 (82-60)	185	70	8.5		
578	56	木製	S D 1 F 4 (82-60)	185	63	14		
579	56	木製	S D 1 F 4 (82-70)	151	64	7		
580	56	木製	S D 1 F 3 (84-64)	259	21	8		
581	56	木製	S D 2 F 3 (98-98)	1886	153	17	刃物痕多数	
582	57	木製	S D 1 F 3 (86-60)	[174]	63	8.5	木軒残存	
583	57	木製	S D 1 F 3 (86-60)	[179]	60	8.5	9 円形穿孔 木軒残存	
584	57	木製	S D 1 F 3 (86-60)	[158]	58	8.5	9 円形穿孔	
585	57	木製	S D 1 F 3 (86-60)	158	63	9	木軒残存	
586	57	木製	S D 1 F 3 (86-60)	159	65	7	木軒残存	
587	57	木製	S D 1 F 3 (86-60)	154	53	9.5	木軒残存	
588	57	木製	S D 1 F 3 (86-60)	[261]	213	10		
589	57	木製	S D 2 F 3 (100-60)	[725]	202	15	刃物痕多数	
590	57	木製	S D 1 F 4 (82-78)	[908]	5			
591	57	木製	S D 1 F 4 (82-78)	267.5	11	8		
592	57	木製	S D 1 F 4 (82-60)	[356]	18	9.5		
593	57	木製	S D 1 F 4 (82-60)	[183]	42.5	9		
594	58	木製	S D 1 F 3 (82-94)	1870	97	9		
595	58	木製	S D 1 F 3 (86-68)	846	95.5	9		
596	58	木製	S D 1 F 3 (84-68)	498	100	40	上端崩れ	
597	58	木製	S D 1 F 4 (82-60)	[128]	70	51		
598	58	木製	S D 1 F 4 (82-60)	[290.5]	32	25		
599	58	木製	S D 1 F 4 (82-74)	[142]	45	15	刃物痕多数	
600	58	木製	S D 1 F 3 (86-32)	100	43	8	木軒残存	
601	58	木製	S D 1 F 3 (84-76)	129	13	7.5		
602	58	木製	S D 1 F 3 (82-70)	87	20	16		
603	58	木製	S D 1 F 3 (82-70)	[180]	31	13		
604	58	木製	S D 1 F 4 (88-72)	165	65	13		
605	58	木製	S D 1 F 3 (82-64)	長度92	短幅89	21	中央少に木縫	
606	59	加工品	S D 1 F 3 (84-72)	171.5	83	56	上端崩れ化粧	
607	59	加工品	S D 1 F 3 (82-82)	107	76	53		
608	59	加工品	S D 1 F 3 (82-28)	60	31	13		
609	59	加工品	S D 1 F 4 (80-72)	[127]	72	40		
610	59	加工品	S D 1 F 4 (82-58)	[666]	93	62	全面脱化粧	
611	59	竹製品	S D 2 F 3 (98-66)	165	73	7	竹縫が抜かれている	
612	59	竹製品	S D 1 F 4 (82-78)	106	73	7	竹縫が抜かれている	
613	59	竹製品	S D 1 F 4 (82-78)	[67]	73	7	竹縫が抜かれている	
614	59	竹製品	S D 2 F 3 (98-66)	[67]	73	7	竹縫が抜かれている	
615	59	竹製品	S D 2 F 3 (98-66)	[67]	73	7	竹縫が抜かれている	
616	59	竹製品	S D 2 F 3 (98-66)	[67]	73	7	竹縫が抜かれている	
617	59	竹製品	S D 6	[83]	[41]	7	外側面 内側面	

番号	種別	固有名	部品名	出土地点	長さ (寸)	幅 (寸)	厚さ (寸)	備考
513	69	金	下駄箱	S D 6	108	20	3.5	裏地
519	69	金	下駄箱	S D 6	7	25	5	空孔
520	69	金	下駄箱	S D 6	147	89	25	六矢
521	69	金	下駄箱	S D 6	166	25	25	
522	69	金	下駄箱	S D 6	126	27	27	
523	69	金	下駄箱	S D 6	111	21	21	
524	69	金	下駄箱	S X 10 F 2 (88-64)	422	127	14	複数越巻り 両面に刃物状(なま板状用) 一部脱落 424-428-柄出土
525	69	金	下駄箱	S X 10 F 2 (88-64)	406	70	12	複数
527	69	金	下駄箱	S X 10 F 2 (88-64)	325	750	140	40 加工工具のこぼれ痕明
528	69	金	下駄箱	S X 10 F 2 (88-64)	315	43	43	

表 6 石製品観察表

番号	固有名	種類	材質	出土位置	此さ	幅	厚さ	備考
629	61	55	石	脚灰	S D 1 F 2 (84-64)	145	35	29 13V 8.4/2 黒色
630	61	56	石	脚灰	S D 1 F 2 (84-64)	111	61	13V 8.4/2 黒色 面面に縦目条状、高輪郭
631	61	56	石	脚灰	S D 1 F 2 (84-64)	185	75	27 13V 8.4/2 黒色 面面に縦目条状、高輪郭
632	61	56	石	脚灰	S D 1 F 2 (84-64)	511	149	15.5 黒色 面面に縦目条状、高輪郭
633	61	56	石	脚灰	S D 1 F 2 (84-64)	97	81	20 7.5V 5/2 黒色オリーブ
634	61	56	石	脚灰	S D 1 F 2 (84-64)	318	64	97 10V 8.4/2 黒色白色 剥離
635	61	56	石	脚灰	S D 1 F 2 (84-64)	67	57	19.5 黑色、白身に黒
637	61	56	石	脚灰	S D 1 F 2 (84-64)	117	63.5	15.5 黑色
638	61	56	石	脚灰	S D 1 F 3 (84-56)	109	41.5	16 黑面端 632 と同一脚体
640	61	56	石	脚灰	S D 1 F 3 (84-56)	45	36	42 7.5V 6/1 黑色
641	61	56	石	脚灰	S D 1 F 3 (84-56)	260		13V 8.4/2 黒色
642	61	56	石	脚灰	S D 1 F 3 (84-56)	260		13V 8.4/2 黒色

表 7 金属製品観察表

番号	固有名	種類	材質	出土位置	此さ	幅	厚さ	備考
642	52	3.5	鉄	S D 1 F 2 (84-64)	196	5	95 丸通口	
643	52	3.5	鉄	S D 1 F 2 (84-64)	87	55	13V 8.4/2 黒色	
644	52	3.5	鉄	S D 1 F 3 (90-94)	104	10.3	9	
645	52	3.5	鉄	S D 1 F 2 (84-64)	62.2	27.8	34 純物特有	
646	52	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	98.5	13	4.5 黒色 茶子	
647	52	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	39.8	13	4.5 黒色	
648	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	89	14	13V 8.4/2 黒色	
649	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	87	10.5	55 金銀	
650	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	111	12	2 金銀	
651	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	178	14.5	13V 8.4/2 黒色	
652	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	116	15	5	
653	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	16	14	13V 8.4/2 黒色	
654	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	183.5	18	13.5 13V 8.4/2 黒色	
655	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.8	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
656	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
657	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
658	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
659	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
660	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
661	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
662	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
663	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
664	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
665	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
666	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
667	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
668	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
669	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
670	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
671	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
672	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
673	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
674	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
675	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
676	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
677	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
678	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
679	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
680	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
681	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
682	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-60)	182.4	56.5	13.5 13V 8.4/2 黒色	
683	62	3.5	鉄	S D 1 F 3 (84-6				

表10 陶器集計表

番号	種類	部機	剖面	剖位	出土位置	長さ	幅	厚さ	備考	SD1				SD2				SD			
----	----	----	----	----	------	----	---	----	----	-----	--	--	--	-----	--	--	--	----	--	--	--

報告書抄録

ふりがな	よねざわじょうあとはつくつちょうさほうこくしょ
書名	米沢城跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	山形県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第66集
編著者名	高桑 登・黒沼幹男
編集機関	財団法人山形県埋蔵文化財センター
所在地	〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301
発行年月日	1999年3月31日

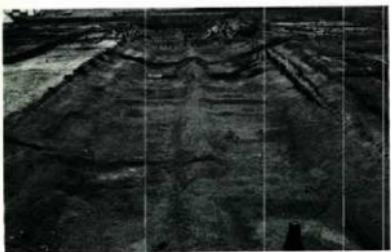
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
米沢城跡	山形県 米沢市 丸の内 一丁目	6202	1216	37度 54分 30秒	140度 6分 45秒	19980713 ~ 19981210	5,000	山形県立 置賜広域 文化施設 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
米沢城跡	城館跡	中近世	堀跡	中世土器・陶磁器 近世土器・陶磁器 木製品 石製品 金属製品	幅40m、長さ90mの規模 で、堀底に障壁を持つ「障子堀」を確認した。堀跡から多量の遺物が出土した。 (総出土箱数: 89)

図版



調査区全景（東から）



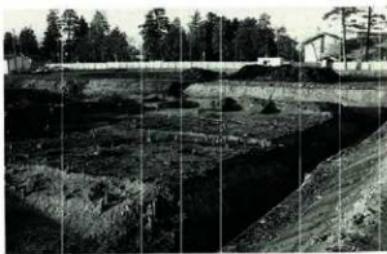
SD 1 完掘状況（南から）



SD 2 完掘状況（南から）

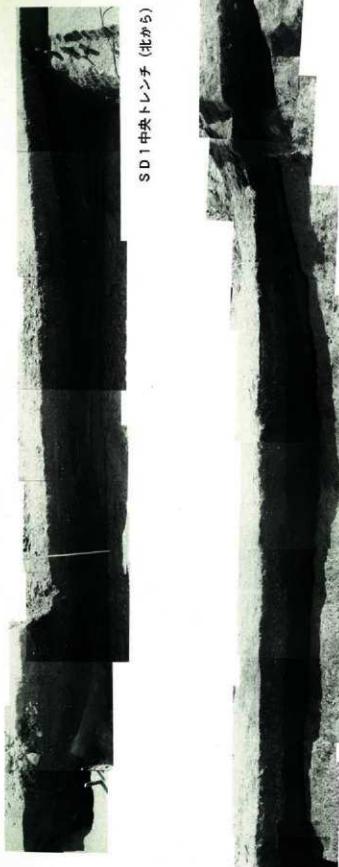


SF 3 上面（南から）



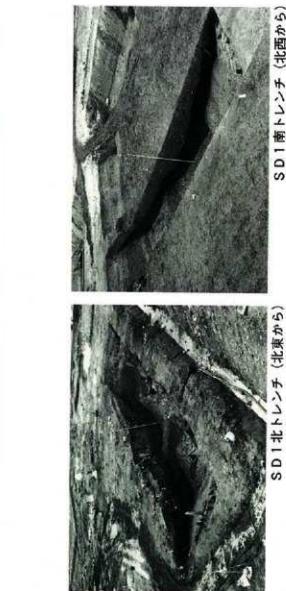
SD 2 北平場（南東から）

図版 2



SD 1 中央トレンチ (北から)

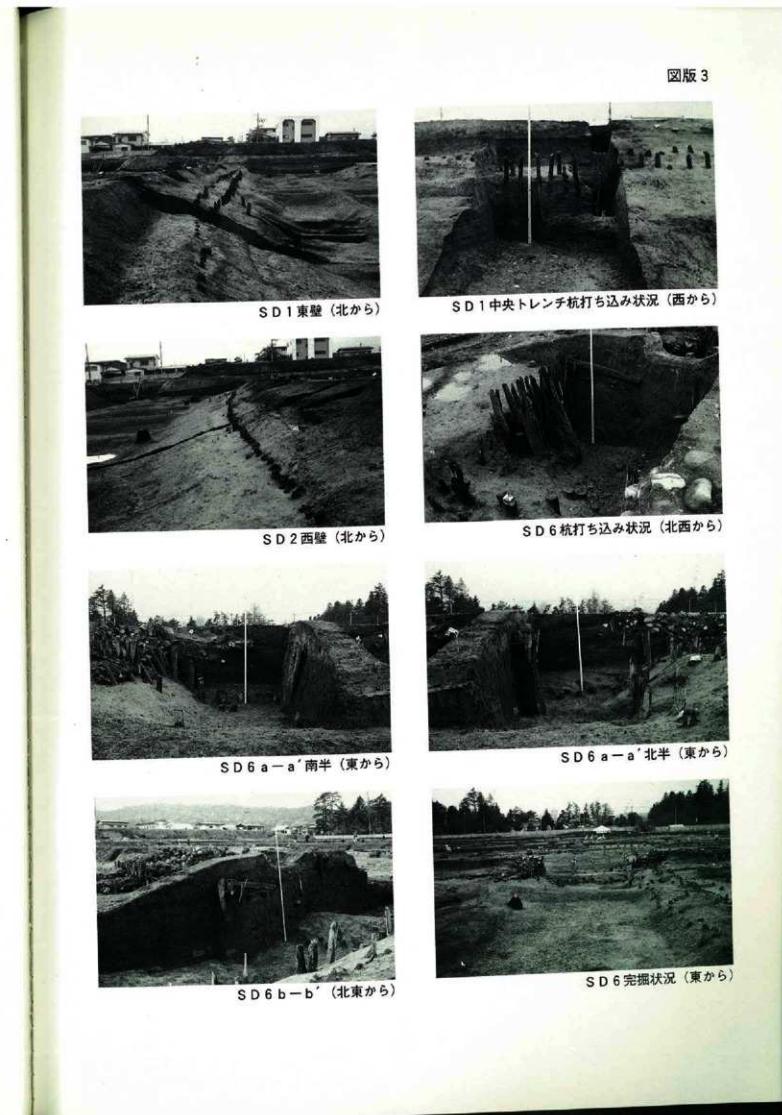
SD 2 中央トレンチ (北から)



SD 1 南トレンチ (北西から)

SD 1 北トレンチ (北東から)

SD 6 北トレンチ (北東から)



図版 3

図版4



SD 6 北壁 (南から)



SD 6 北壁 (南西から)



SD 6 北壁石積除去状況 (南から)



SD 6 北壁 (南から)



SD 6 北壁 (西から)



SD 6 北壁石積除去状況 (西から)



SD 6 北壁 (東から)



SD 6 南壁石積崩落状況 (北から)

図版5



SD 6 南壁 (北から)



SD 6 南壁 (北東から)



SD 6 南壁石積除去状況 (北から)



SD 6 南壁石積除去状況 (北東から)



SD 6 南壁 (東から)



SD 6 南壁石積除去状況 (東から)



SD 6 南壁 (西から)



SD 6 南壁石積除去状況 (西から)

図版 6



S F 3 上面整地層（南から）



S F 3 整地層土層断面（西から）



S X 9 土層断面（北西から）



S X 8 土層断面（北西から）



S X 10 遺物（624～628）出土状況（西から）



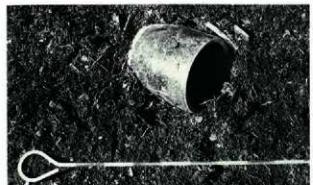
S X 10 土層断面（南西から）



S D 1 東整地川埋没自然木に残された遺物（工具痕）



S K 11 土層断面（北東から）



S D 1 中層遺物（71）出土状況（東から）



S D 1 下層遺物（208）出土状況（西から）



S D 1 下層遺物（174）出土状況（西から）



S D 1 下層遺物（171）出土状況（東から）



S D 1 下層遺物（166）出土状況（南東から）



S D 1 下層遺物（166）出土状況（東から）



S D 1 下層遺物（167）出土状況（南東から）



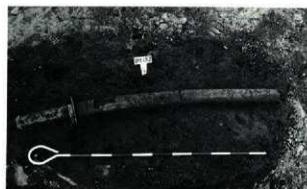
S D 1 西壁（82—78 G周辺）下層出土状況（北東から）

図版 7

図版 8



SD 1 下層遺物 (683) 出土状況 (東から)



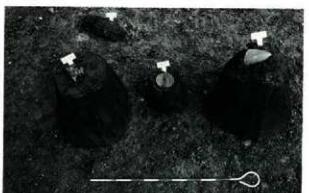
脇差 (683) 出土状況 (南から)



SD 1 下層遺物 (462) 出土状況 (北から)



SD 2 下層遺物 (461) 出土状況 (南から)



SD 1 下層遺物 (207, 209, 490) 出土状況 (南西から)



SD 1 下層遺物 (667~671) 出土状況 (西から)

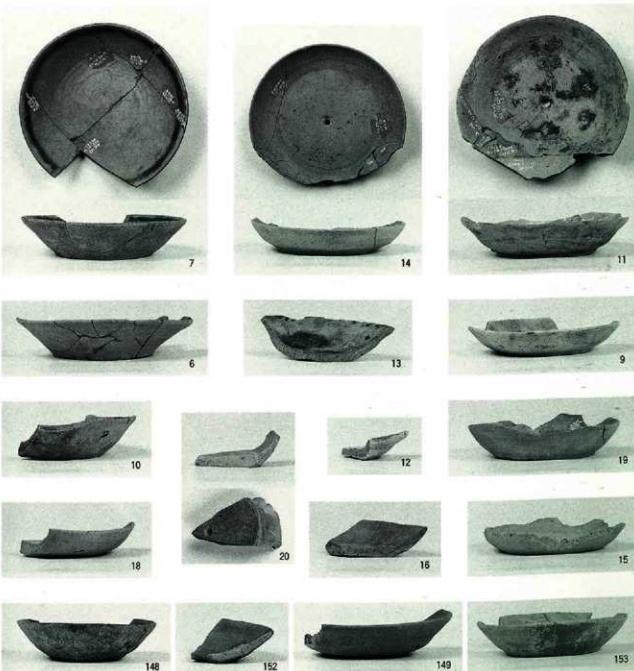


SD 1 (82~84G 南辺) 中層遺物出土状況(北から)

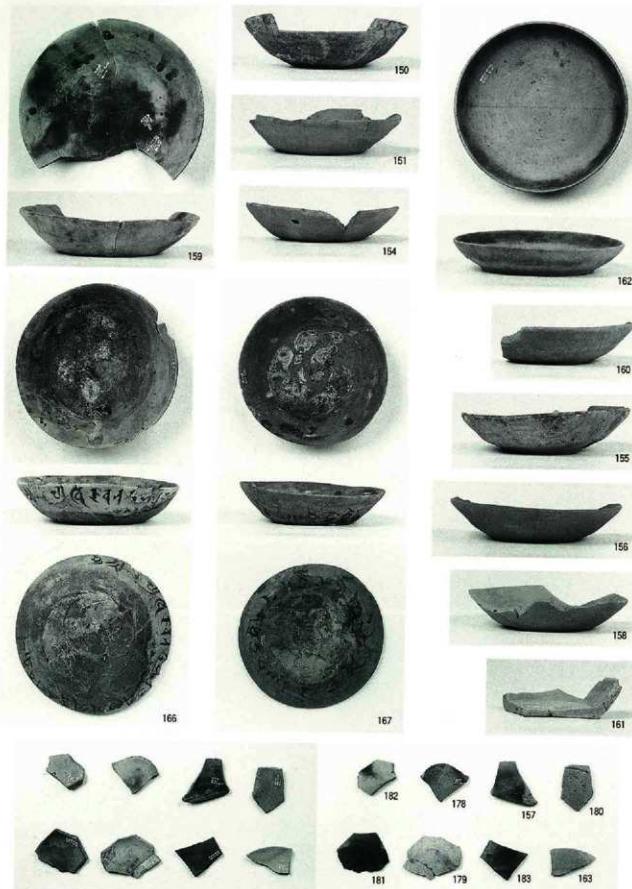


SD 1 完掘状況 (北から)

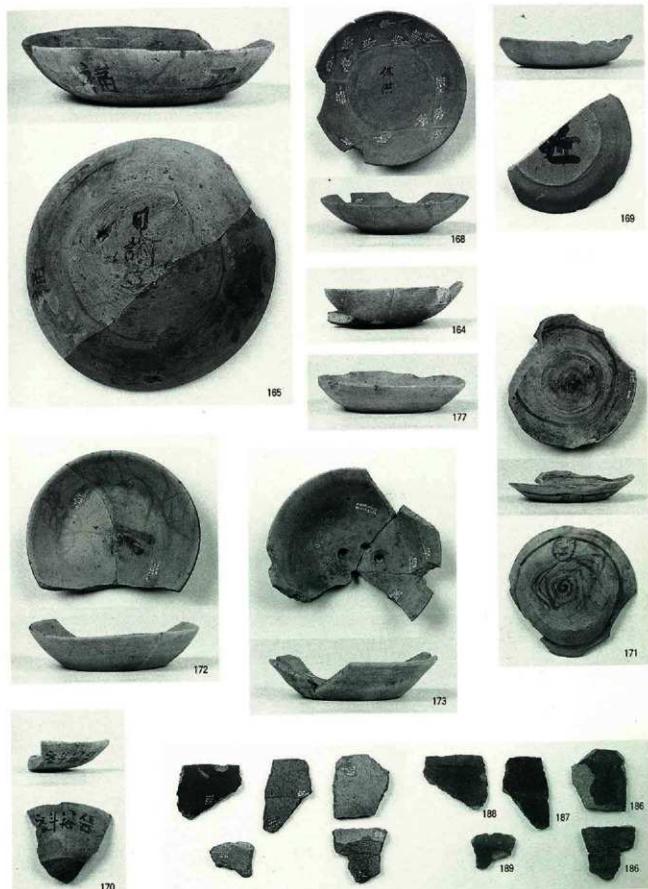
図版 9



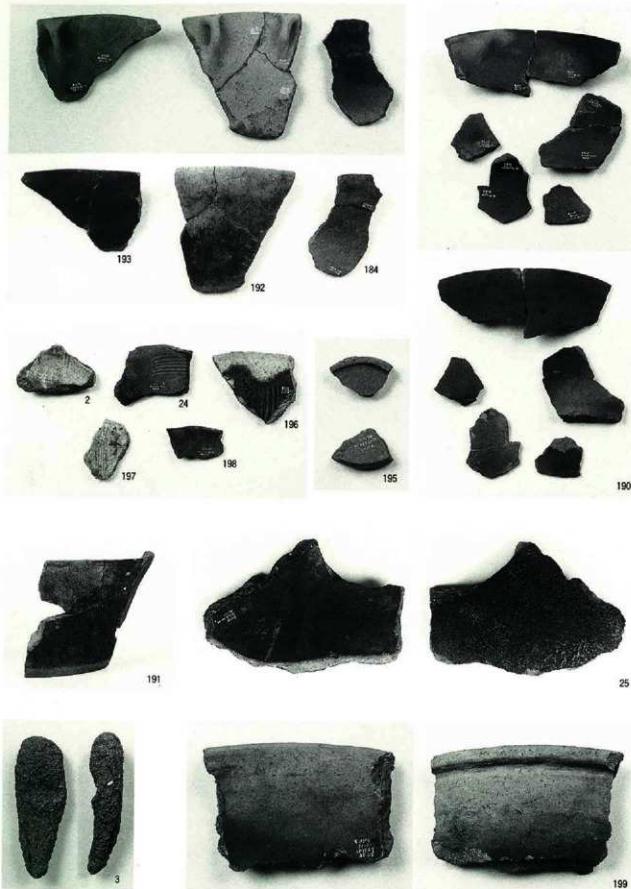
図版10



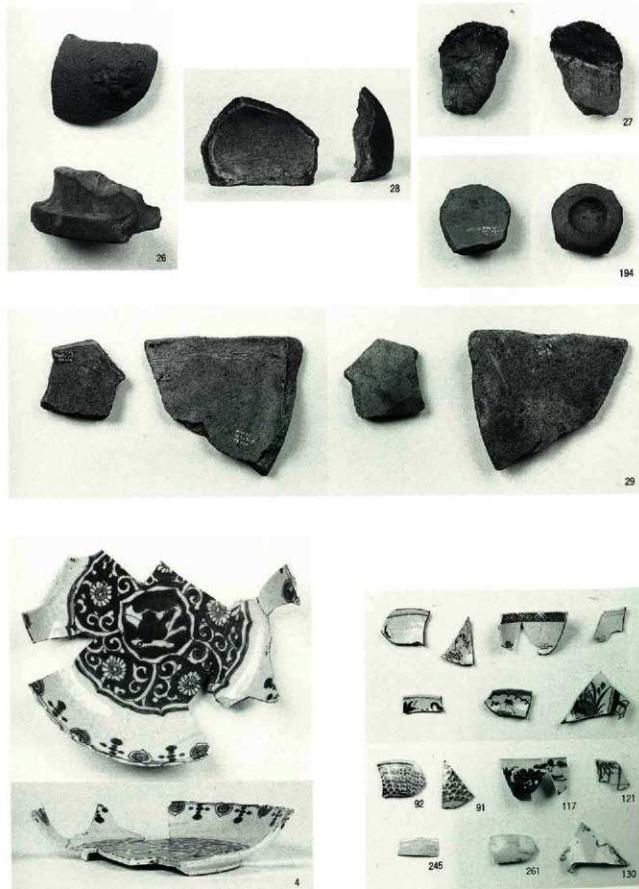
図版11



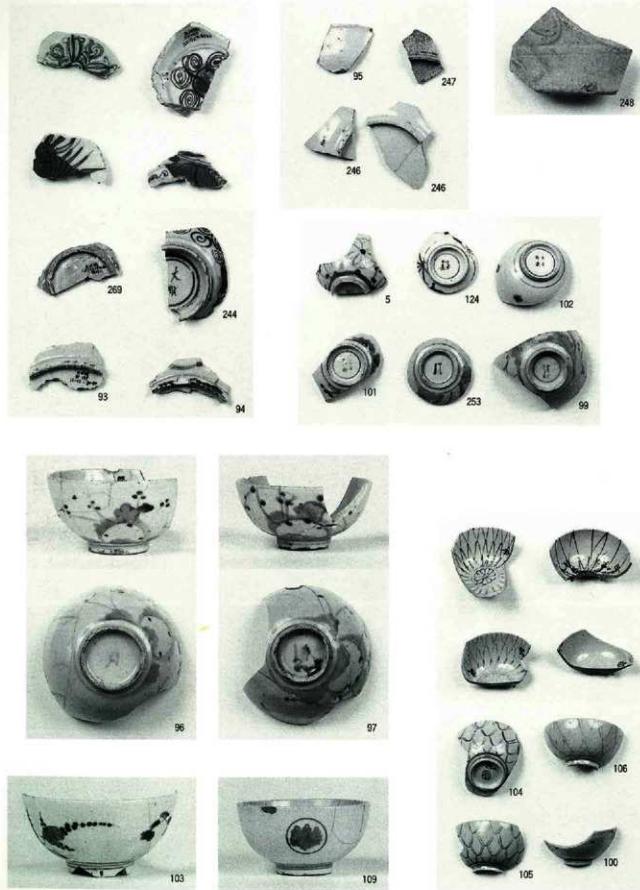
図版12



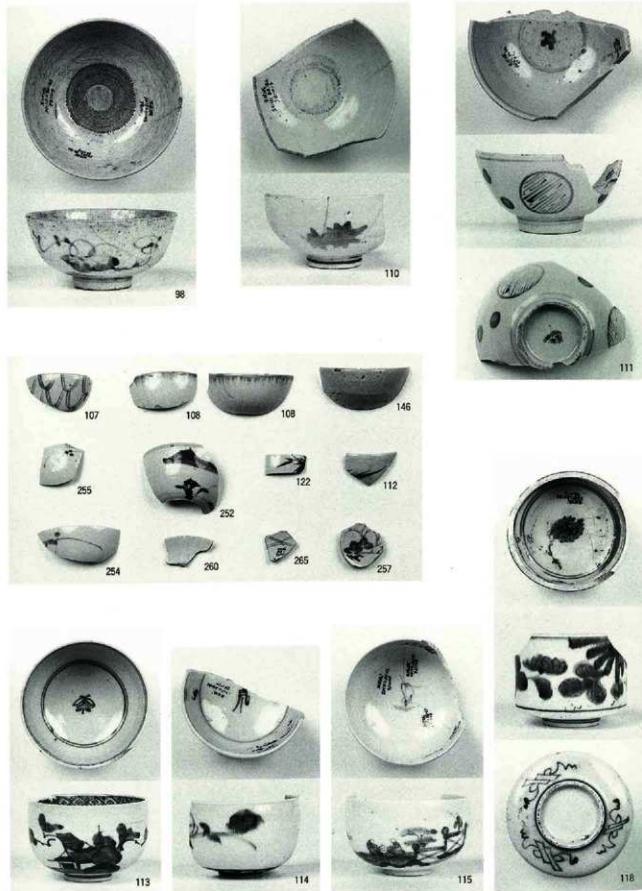
図版13



図版14



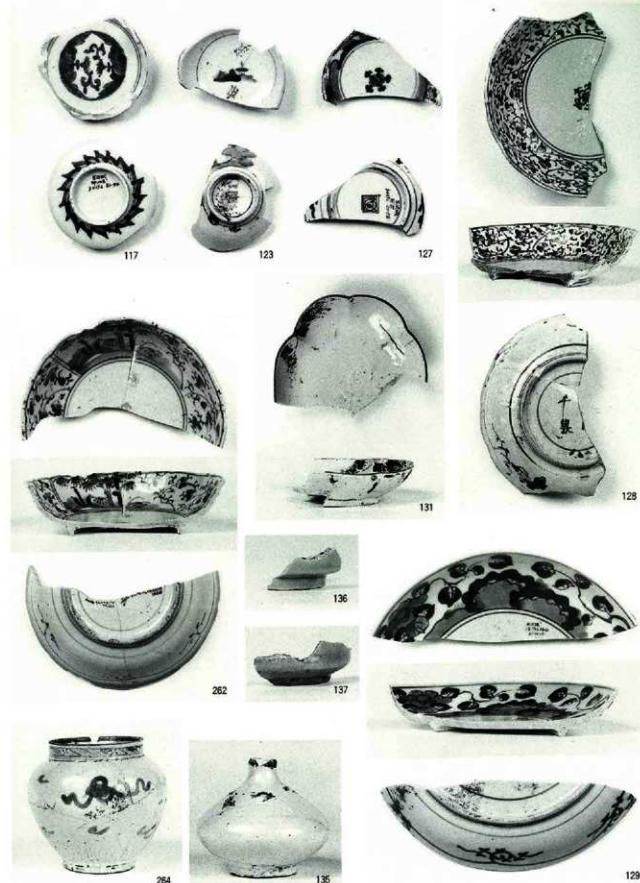
図版15



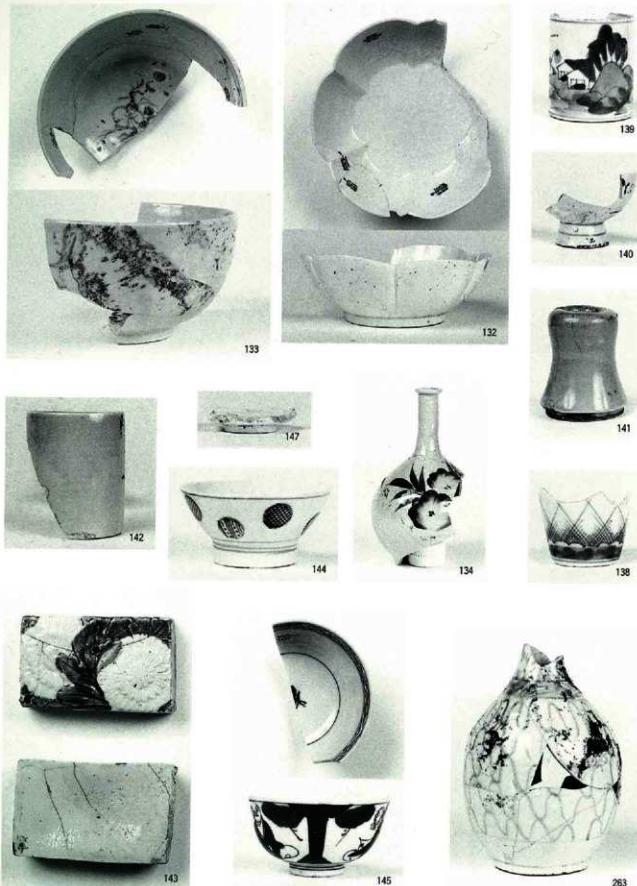
図版16



図版17



图版18



图版19



図版20



図版21



图版22



图版23



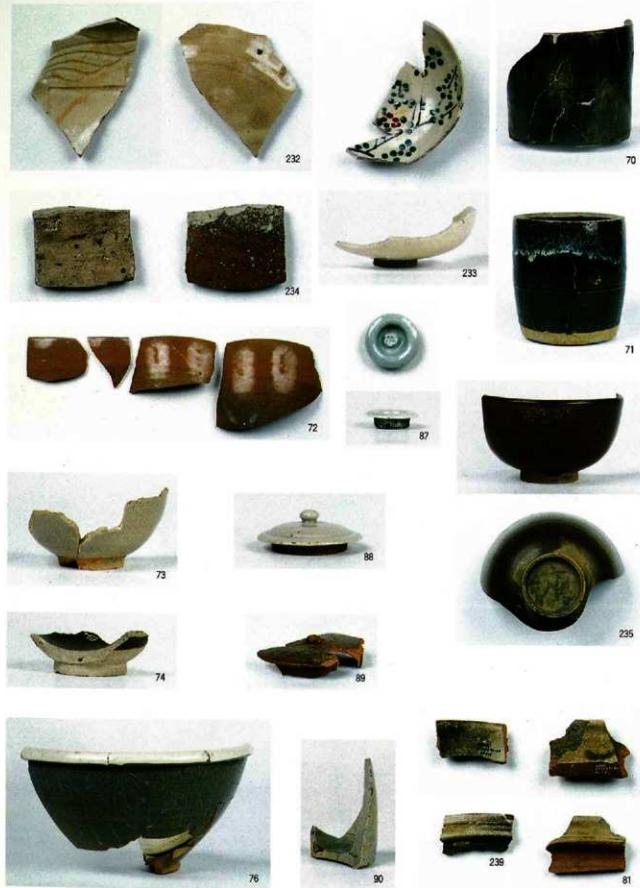
図版24



図版25



図版26



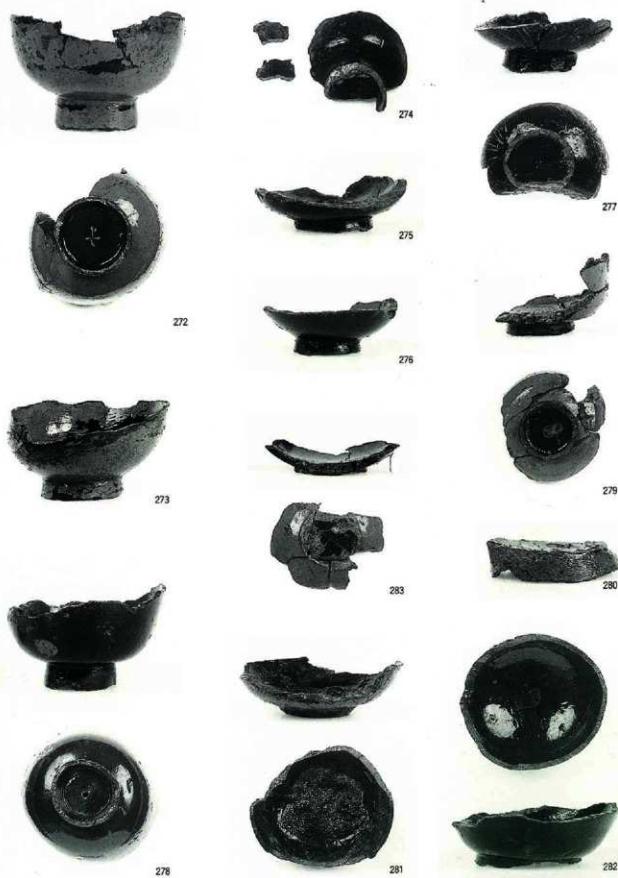
図版27



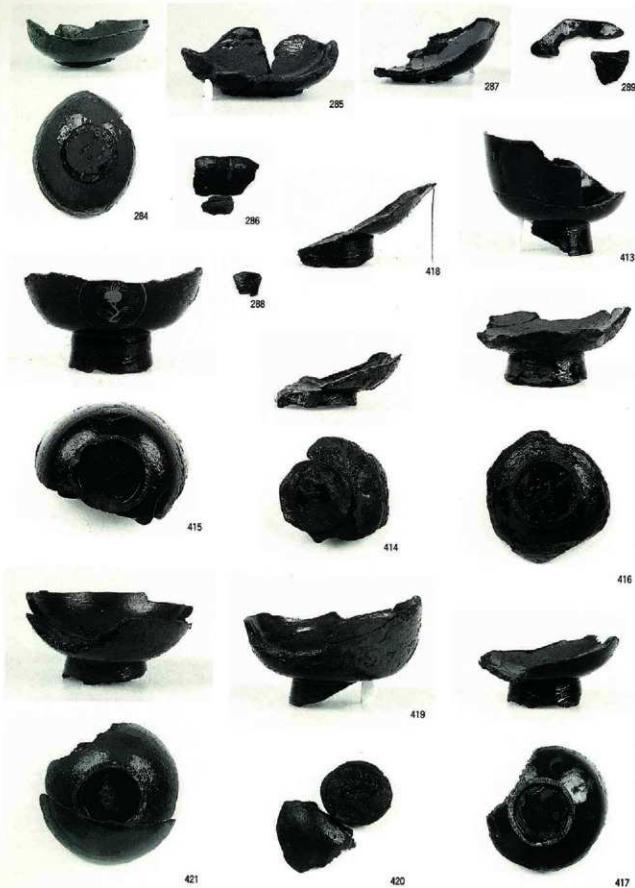
図版28



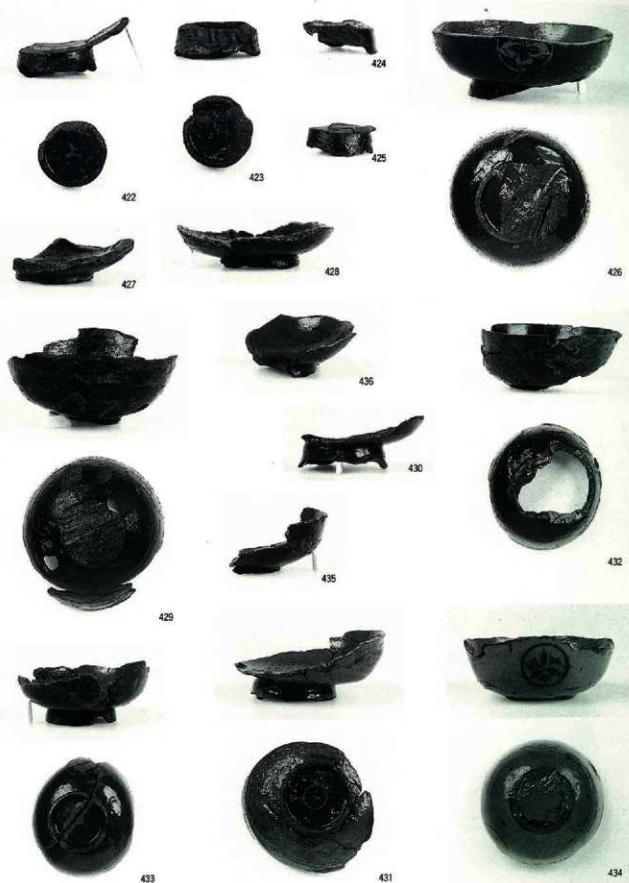
図版29



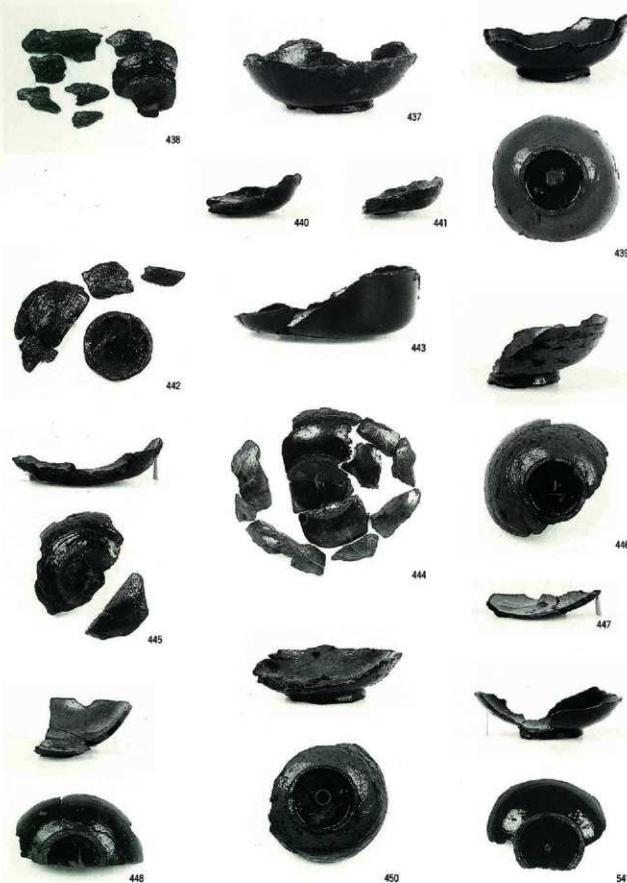
図版30



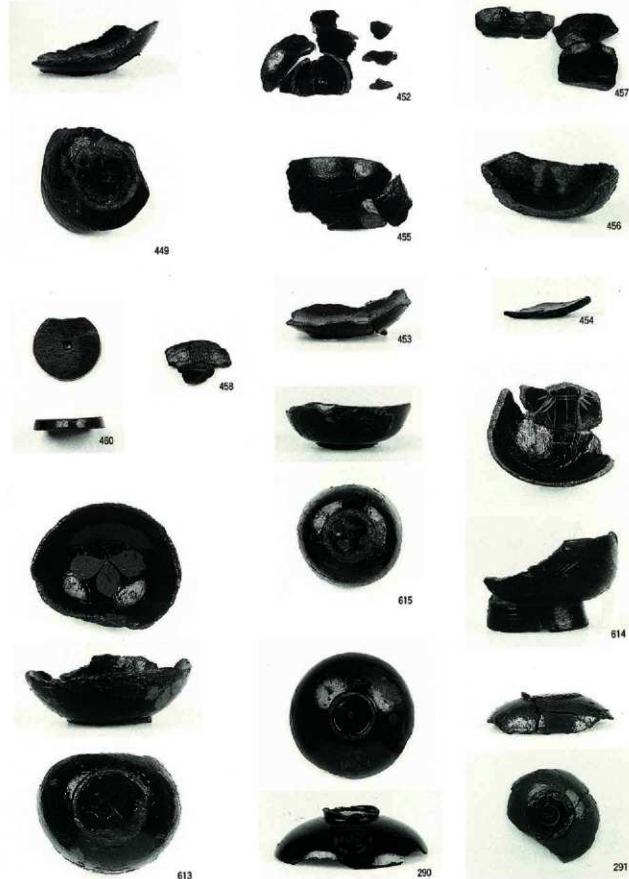
図版31



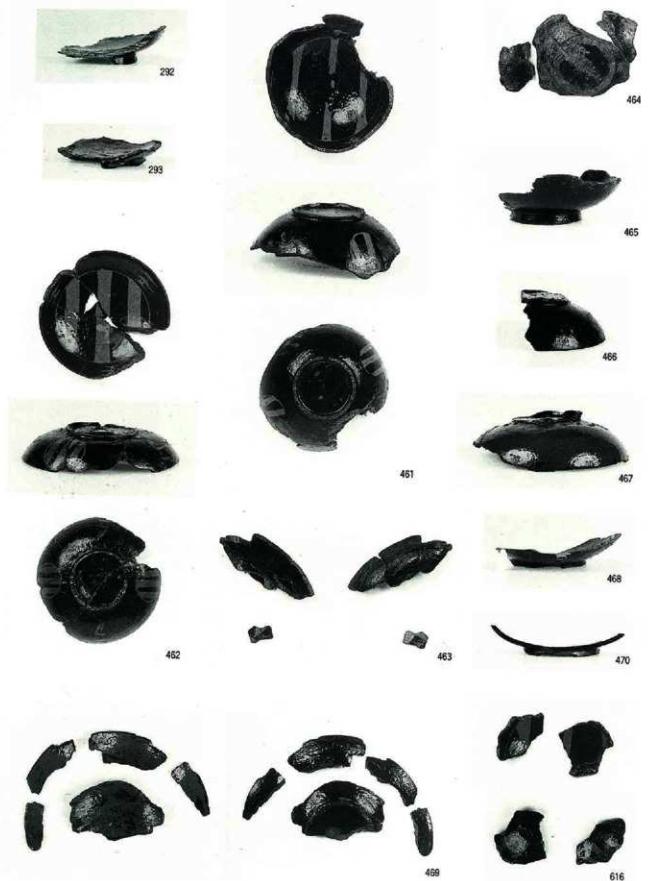
図版32



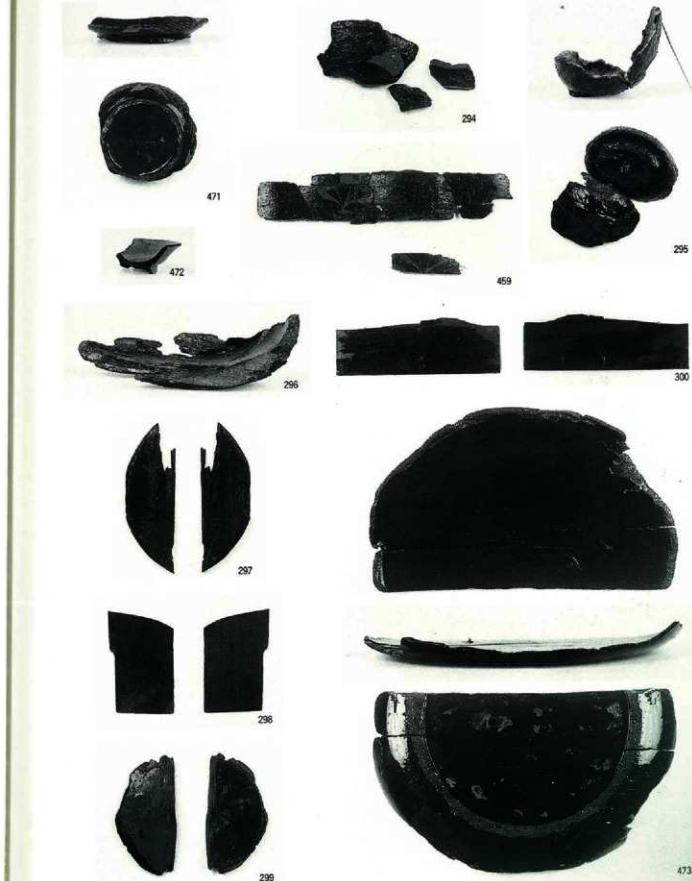
図版33



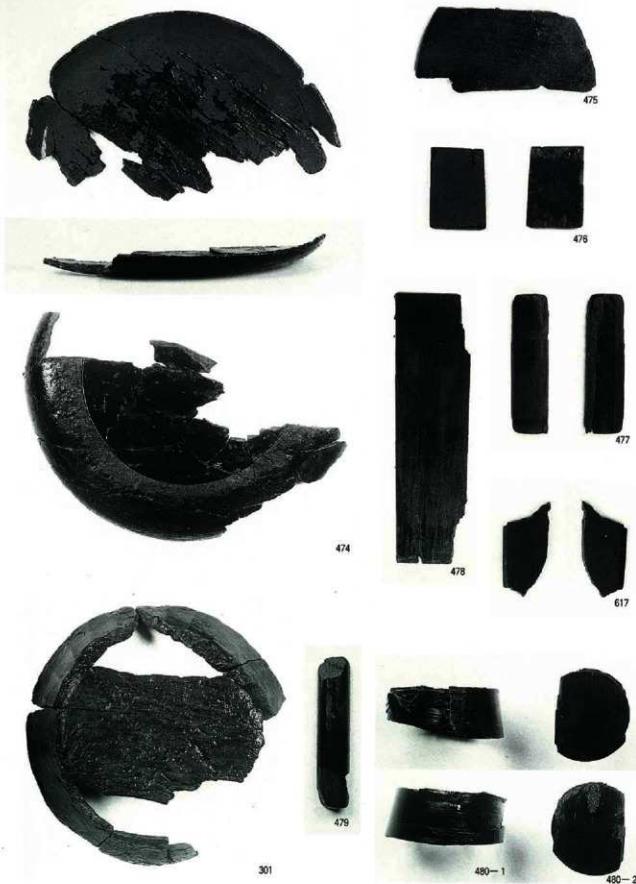
図版34



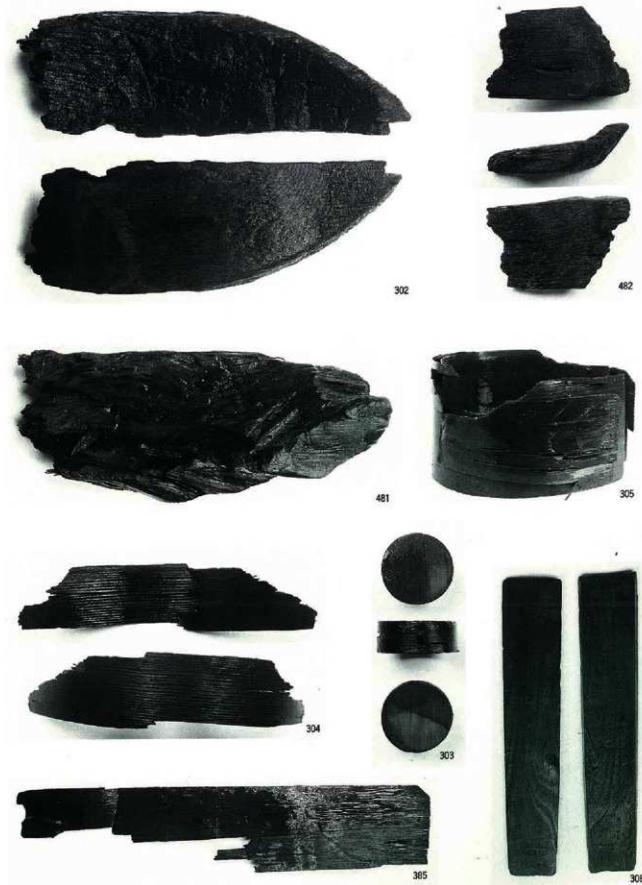
図版35



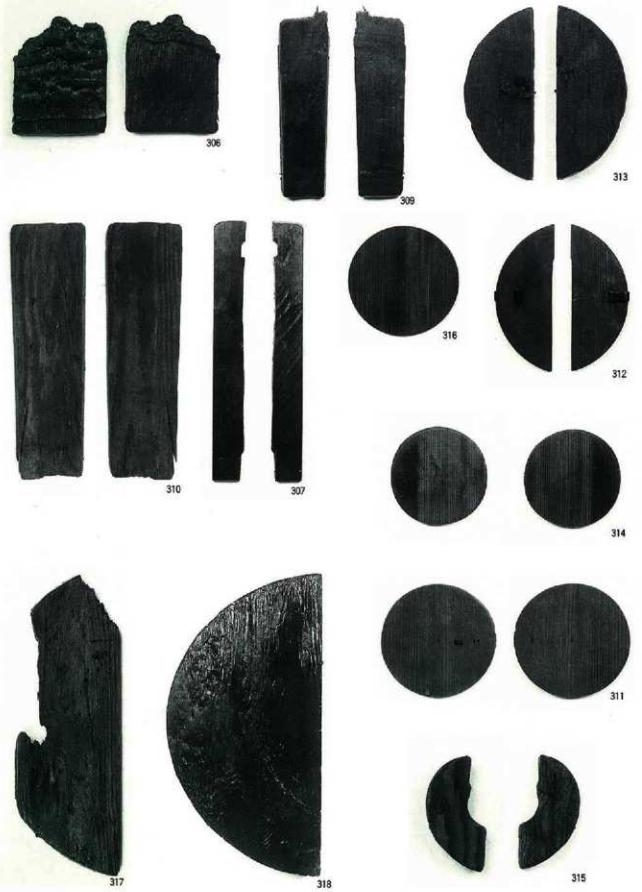
図版36



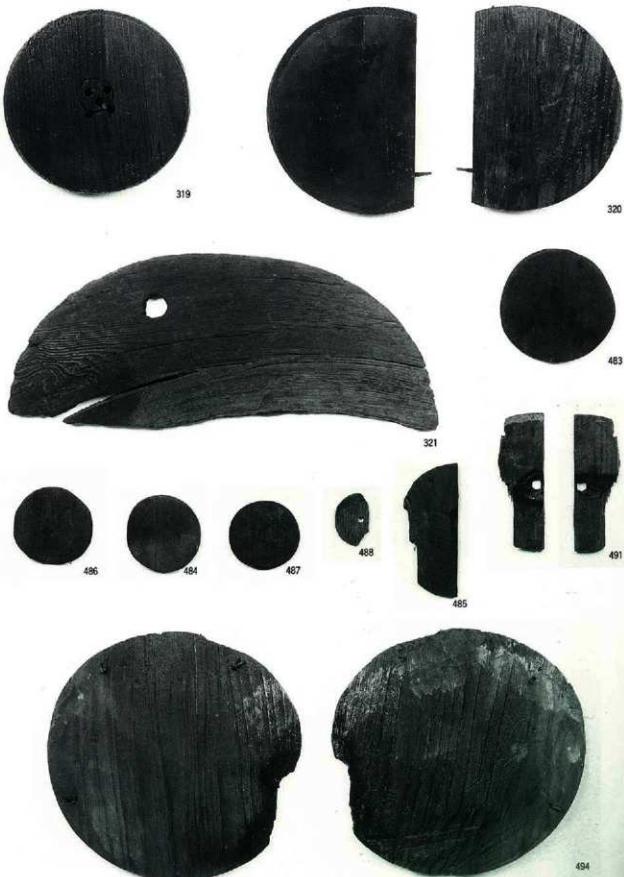
図版37



図版38



図版39



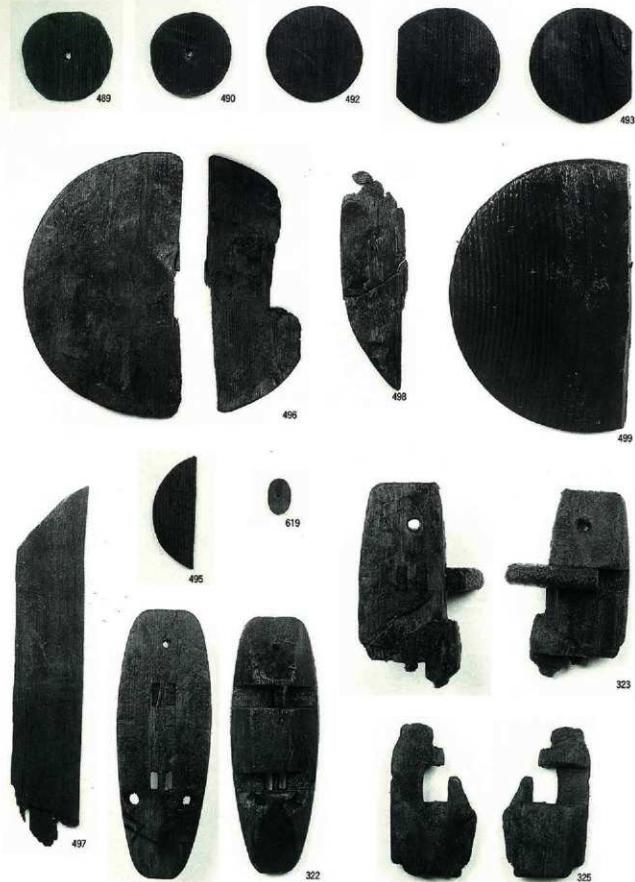
図版40



図版41



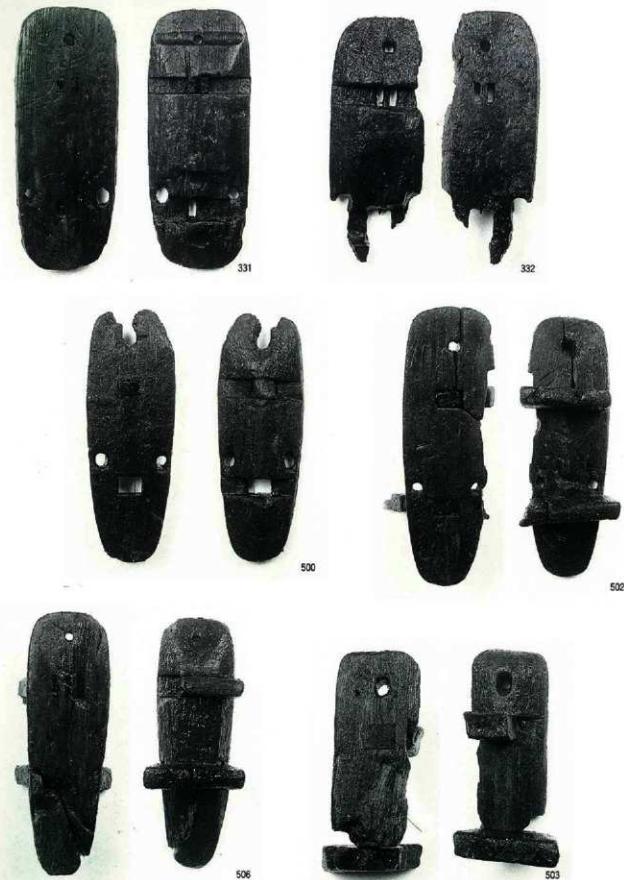
図版40



図版41



図版42



図版43



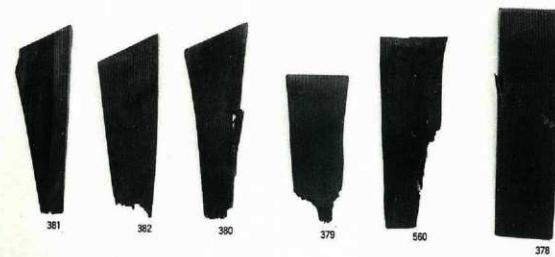
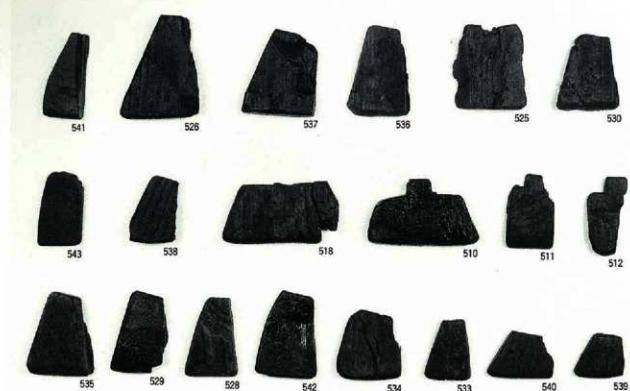
図版44



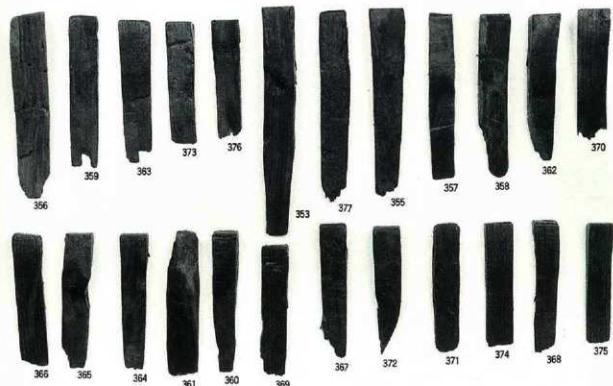
図版45



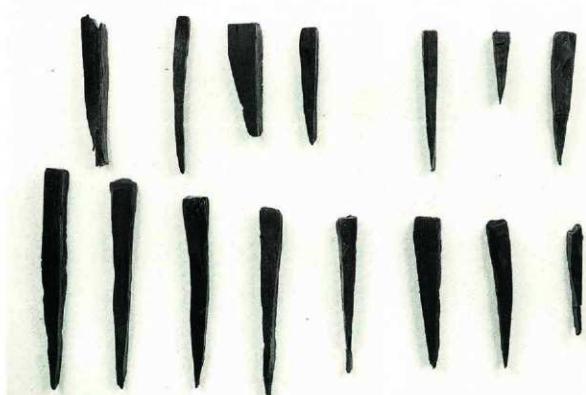
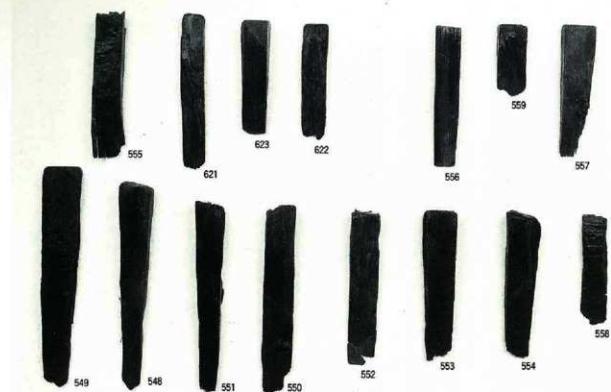
図版46



図版47



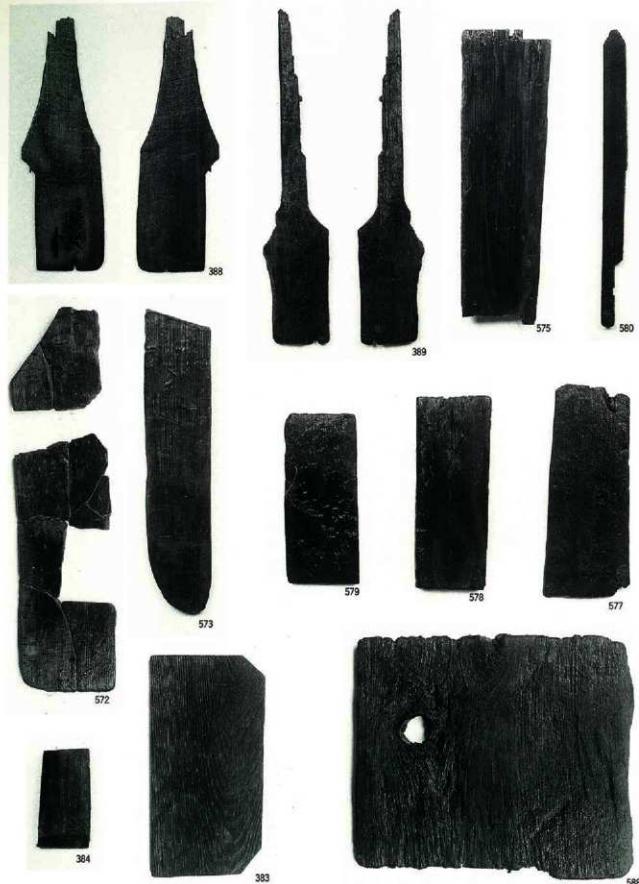
図版48



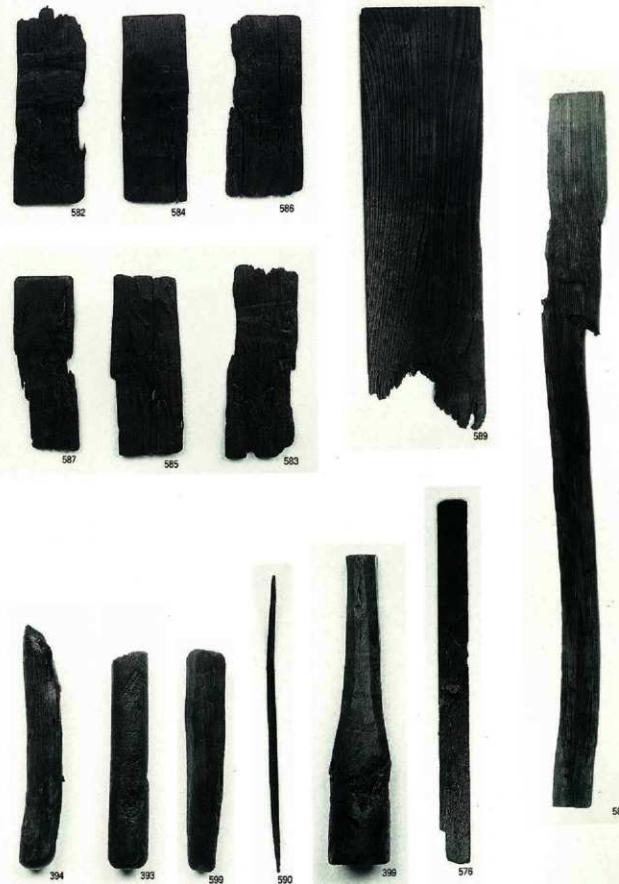
図版49



図版50



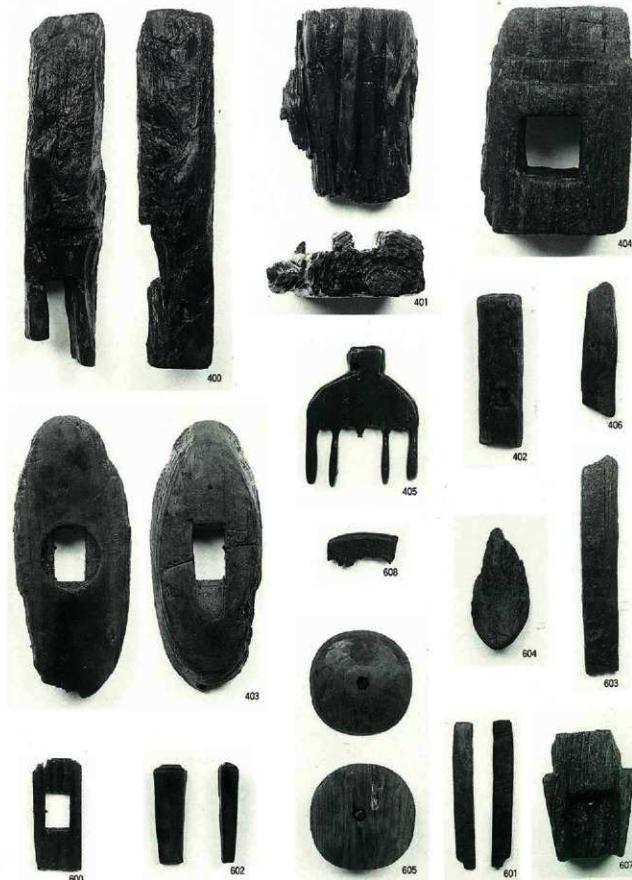
図版51



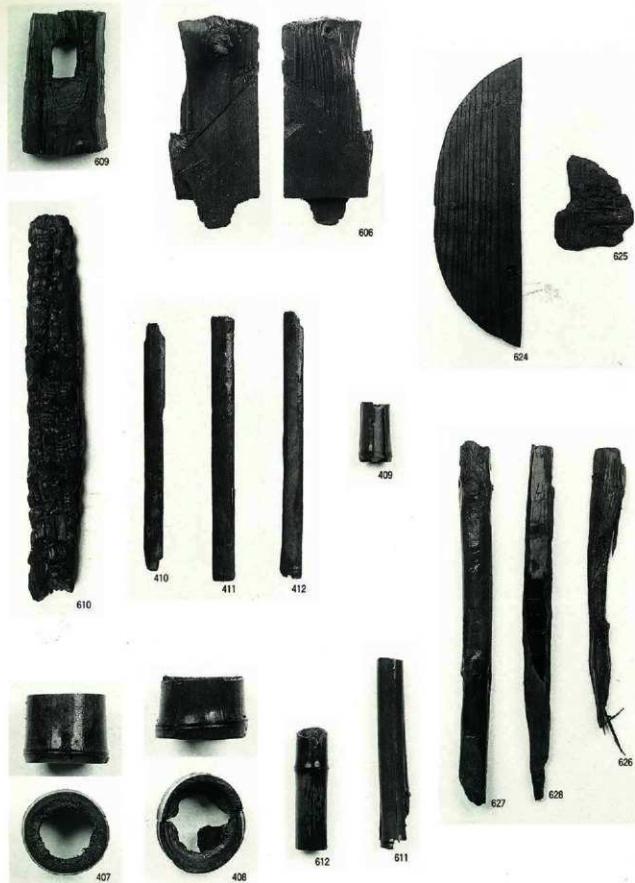
図版52



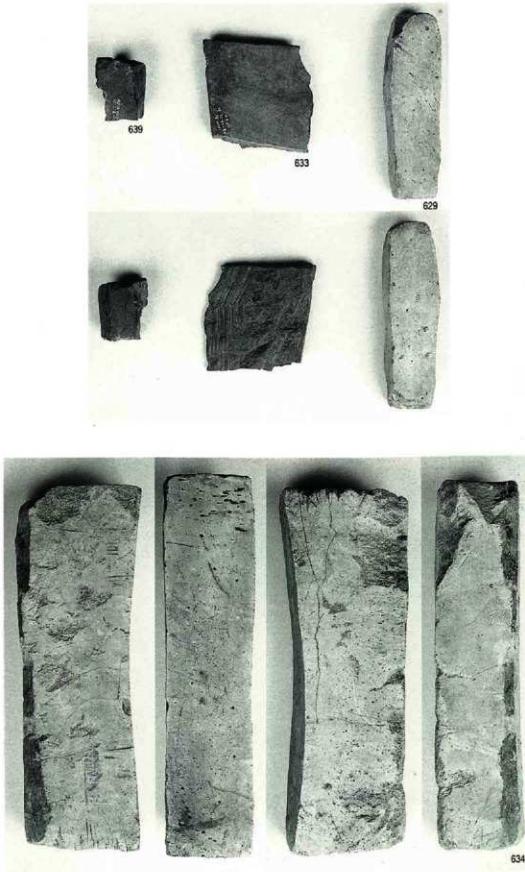
図版53



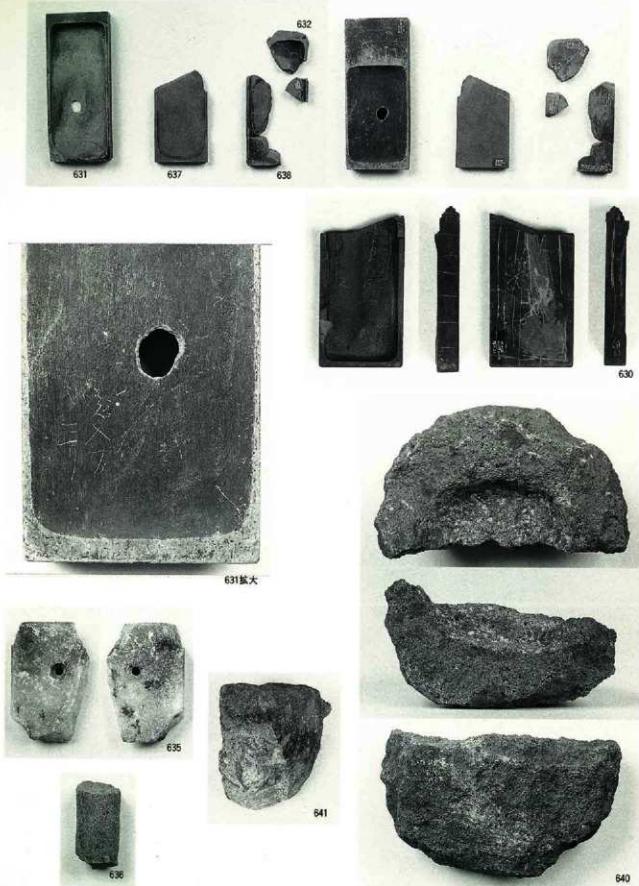
図版54



図版55



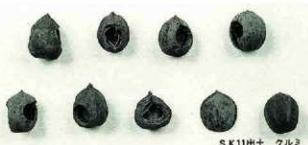
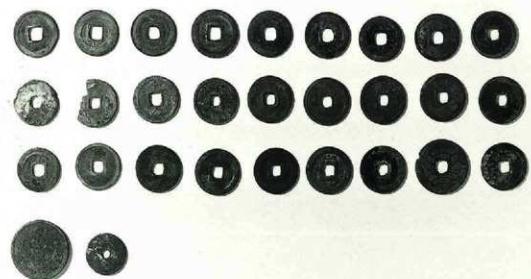
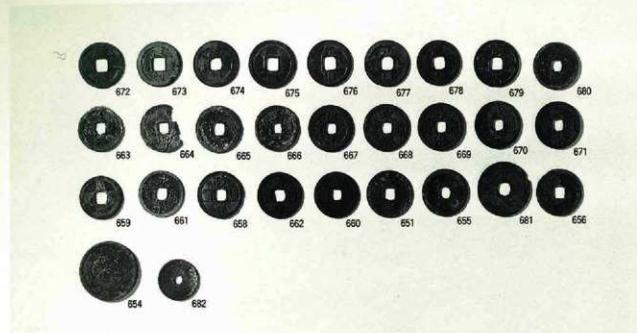
图版56



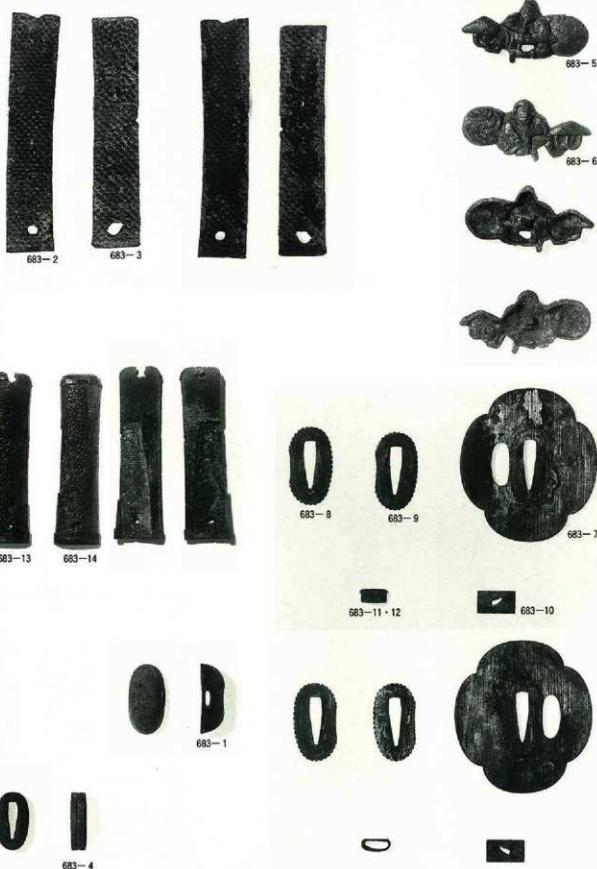
图版57

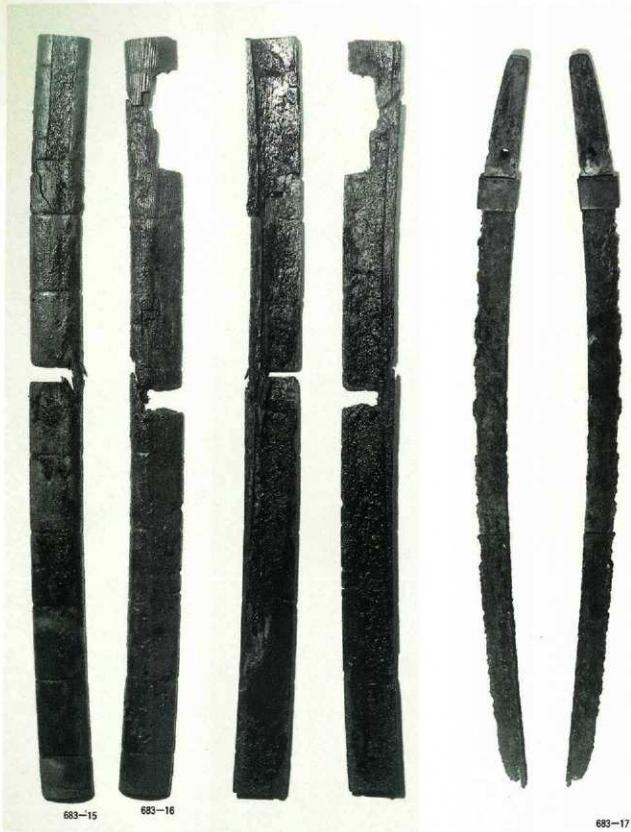


図版58



図版59





付
編

米沢城跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

米沢城跡は、米沢盆地の南部に位置する。米沢盆地は、中世頃に長井領であったが、夫授6年（1380）伊達宗遠に進攻されて伊達領となり、慶長3年（1598）から上杉領となってから、明治維新をむかえたとされている。米沢城の詳細な築城年代は不明であるが、少なくとも長井氏時代にその原形が造られたと考えられている。今回の発掘調査では、二の丸堀跡をはじめとして掘立柱建物跡・溝跡・井戸跡・池跡などの遺構、漆器・下駄などの木製品や陶磁器・かわらけなどが出土している。

今回の分析調査では、二の丸堀跡の埋積物を対象として、微細遺物の洗い出し・分類・同定を行った。今回は、二の丸堀付近の古植生を検討することを主目的としたので、協議のうえ、花粉分析・種実遺体同定を実施することにした。また、外側に梵字（「光明真言」）が墨書きされた土器の内面には、白色物質が付着していた。この白色付着物は、蠟の可能性が指摘されている。その素材を検討するために、赤外線吸収スペクトル法による分析（赤外分光分析）を実施する。

1 試 料

二の丸堀跡の埋積物は大きく3層に分層されており、最下層が粘土質土壤、その上位が植物遺体を多量に含む粘土、最上位が人為的な埋土となっている。土壤試料は、二の丸堀跡の埋積物を対象として、3点（試料名：SD1F3下層・F3上層・F2）が採取された。

また、土器試料は、17世紀代のかわらけ内面に付着した白色物質2点である。赤外線吸収スペクトル法では、あらかじめ試料物質が予想できるときには、既知のスペクトルと比較して未知物質の同定および確認ができ、物質の多重結合や官能基の構造がわかる（山田, 1986）。そこで、ロウの標準物質として木ロウ、ミツロウを同時に分析し、得られた吸収スペクトルと目的試料の吸収スペクトルを比較検討し、土器内付着物のロウの可能性を判定した。表1に試料の詳細を示す。

表1 分析資料の一覧

番号	採取位置	試料の質	時代性	項目		
				P	S	IR
1	SD1F2	泥炭質土壤（植物遺体を多く含む）	18～19世紀	○	○	
2	SD1F3上層	泥炭質土壤（植物遺体を含む）	18世紀頃		○	
3	SD1F3下層	泥炭質土壤	17～18世紀	○	○	
4	かわらけ（166）内面	土器付着の白色物質	17世紀			○
5	かわらけ（167）内面	土器付着の白色物質	17世紀			○

2 分析方法

（1）花粉分析

試料を湿重で約5g秤量し、水酸化カリウム処理、篩別、重液分離（臭化亜鉛、比重2.3）、

フッ化水素酸処理、アセトリシス処理（無水酢酸：濃硫酸 = 9 : 1）の順に物質・科学的な処理を施して花粉・胞子化石を分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は、同定・計数結果の一覧表および主要

表2 荷

花粉化石群集の層位分布図	試料番号	1	3
木本花粉	モミ属	—	1
草本花粉	ツバキ属	—	2
	トウヒ属	—	1
マツ属	マツ属裸苞束葉属	1	3
	マツ属裸苞束葉属	324	31
アカマツ	アカマツ(不明)	141	2
	スギ属	76	2
イネ科	イネ科イヌガヤ科ヒノキ科	—	1
クモクチ属	クモクチ属	8	9
ハバキ属	ハバキ属	1	4
カバキ属	カバキ属	1	3
ハンノキ属	ハンノキ属	1	7
ブナ属	ブナ属	2	14
コラムコ属	コラムコナラ属	8	76
クルミ属	クルミ属	5	22
ニホンカエデ属	ニホンカエデ属	1	—
カエデ属	カエデ属	1	4
カシ属	カシ属	—	1
カニコラ属	カニコラ属	1	6
トノキ属	トノキ属	1	2
クワ科	クワ科ドキヨク属	—	6
草本花粉	ヒムシケ属	—	1
	オゾロモガ属	—	1
	クロモ属	—	12
ミズゲ科	ミズゲ科	4	81
カキツリソウ科	カキツリソウ科	1	20
アメーナ科近似種	アメーナ科近似種	—	1
クワ科	クワ科	1	7
サザエタケ属	サザエタケ属	—	1
シノジ属	シノジ属	—	1
カズカサ属	カズカサ属	1	13
ナシコ科	ナシコ科	1	1
スイレン属	スイレン属	—	2
キンボウゲ科	キンボウゲ科	1	—
アブダナ科	アブダナ科	2	2
バクサン	バクサン	4	5
ヒノキ属	ヒノキ属	1	5
アカマツ	アカマツ	—	3
カバキ属	カバキ属	2	1
セワ属	セワ属	—	1
オババコ属	オババコ属	—	2
オニナミズク属	オニナミズク属	—	1
ヨモギ属	ヨモギ属	2	12
オナモミ属	オナモミ属	—	1
イケモチ科	イケモチ科	—	1
タマボシモモ科	タマボシモモ科	—	2
不育花粉	不育花粉	4	8
シダ類孢子	シダ類孢子	—	1
シダ類胞子	シダ類胞子	5	99
合計		595	512
木本花粉	木本花粉	575	220
草本花粉	草本花粉	20	193
不明花粉	不明花粉	4	8
シダ類孢子	シダ類孢子	5	99
統計(不明を除く)	統計(不明を除く)	598	512

3 結 果

(1) 花粉分析

結果を表2、図1に示す。花粉化石の出現傾向は、試料番号1と試料番号3で異なる。

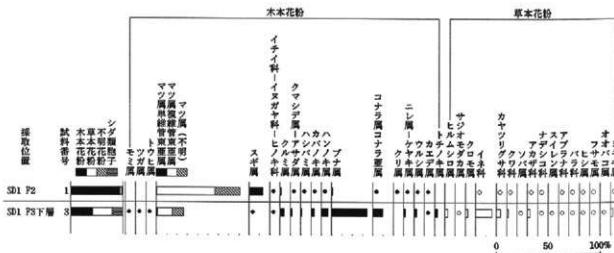


図1 主要花粉化石群集の層位分布
出雲率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉は総数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、○は1%未満を示す。

試料番号3では、ブナ属が高率に出現し、次いでマツ属（複維管束亞属を含む）、コナラ属、コナラ亜属が検出される。この他に、クルミ属、ハンノキ属、ニレ属—ケヤキ属、ウルシ属、トチノキ属などを伴う。草本花粉では、イネ科が多産し、ヒムシロ属、サジオモダカ属、クロモ属、カヤツリグサ科、クワ科、ソバ属、アカザ科、ヒシ属、フサモ属、ヨモギ属などを伴う。

試料番号1では、マツ属（その大半が複維管束亞属）が優占し、次いでスギ属が多産する。草本花粉は、イネ科・カヤツリグサ科・アザミ科・ヒシ属・フサモ属・ヨモギ属などがわずかに検出される程度であり、緋花粉・胞子に対して草本花粉の占める割合が、著しく低率である。

(2) 種害遺体同定

結果を表 3 に示す。試料番号 1 は有

表3 稳定透体圆白蜡

表3 雜種植物同定結果		試料番号	1	2	3
本木類					
マツ複被椎管東亜属	葉	多數	多數	—	—
スキ	葉	4	2	—	—
	果穂	1	—	—	—
サフラ	葉	2	—	—	—
マタタキ属	種子	—	—	—	1
草木類					
ヒルムシロ属	果實	—	1	20	
ミズアオイ属	果實	—	—	1	
カヤツリグサ属	果實	—	—	1	
ヒメビシ	果實	3	35	4	

・マツ属複維管束亜属

(*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

葉が検出された。完全なものはなく、全て破損している。保存状態の良いものは、基部より2本がつながった状態で検出されている。断面は半円形で幅は1mm程度。全周に気孔がある。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属

球果が検出された。黒褐色、球形で大きさ1cm程度。表面は摩耗し、鱗片も破損している。葉も検出されている。葉は長さ5mm程度。先端部は尖る。断面は菱形で径1mm程度。

・サワラ (*Chamaecyparis pisifera* Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

葉の断片が検出された。幅は1.5mm程度。葉は鱗片状で表裏がある。側葉の先端が左右に開く。

・マタタビ属 (*Actinidia* sp.) マタタビ科

種子の破片が検出された。褐色で、大きさは2mm程度。表面は硬質で光沢があり、丸いへこみが不規則に配列しているように見える。

・ヒルムシロ属 (*Potamogeton* sp.) ヒルムシロ科

果実が検出された。褐色、広卵形で、大きさ4mm程度。背部に小さな翼状の突起が2つある。背面の皮は、はがれやすい。

・カヤツリグサ科 (*Cyperaceae* sp.)

果実が検出された。長倒卵型で褐色。大きさは2mm程度。先端部は急に細くなり、尖る。表面は薄くて柔らかく、弾力がある。

・ミズアオイ属 (*Monochoria* sp.) ミズアオイ科

種子が検出された。黒褐色、長楕円形で大きさ1mm程度。表面には、縦方向に数本の隆起がある。表面には横長の表皮細胞が縦方向に密に配列する。種皮は薄く柔らかい。

・ヒメビシ (*Trapa incisa* Sieb. et Zucc.) アカバナ科ヒシ属

果実が検出された。褐色、偏平な倒三角形で大きさは2cm程度。4つの刺があり、刺が本体と比較して長い。果皮は薄くやや堅い。

(3)赤外分光分析

赤外線吸収スペクトルを、図2に示す。土器内付着物の赤外吸収スペクトル結果は、いずれも類似したスペクトルパターンを示し、3430、2930、2860、1710、1590、1450cm⁻¹付近の強い吸収帯が特徴的であり、特に1090、1040、790、720、530、470cm⁻¹付近に吸収が認められる。各吸収帯から推定される官能基は、次の通りである。3430cm⁻¹付近の吸収帯はO-HまたはN-Hの伸縮振動、2930cm⁻¹、2860cm⁻¹付近の吸収帯はC=Oの伸縮振動、1450cm⁻¹付近の吸収帯はC-H2基またはC-H3基のC-Hの対称変角振動、1090cm⁻¹付近の吸収帯はS i (A1)-Oの伸縮振動、1040cm⁻¹付近の吸収帯はS-Oの伸縮振動、920cm⁻¹付近の吸収帯は脂肪族カルボン酸等のO-Hの変角振動、これら以外の弱い吸収帯は上記の強い吸収帯に付随する

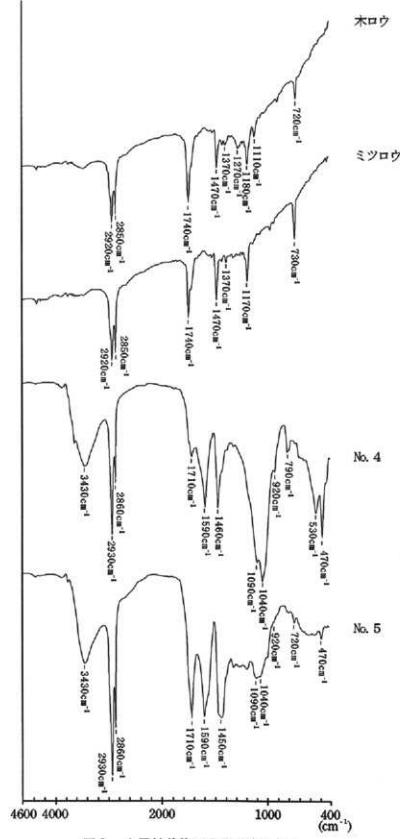


図2 土器付着物のIRスペクトル

吸収帯である。この中で、Si-O基あるいはAl-O基の吸収は、土器内付着物を剥離する際に混入した胎土、もしくは覆土由来の吸収と考えられる。

一方、標準試料とした木口ウ、ミツロウの赤外吸収スペクトル結果は、2920、2850、1740、1470、1170、730cm⁻¹付近の強い吸収帯が特徴的であり、他に1370、1270、1110cm⁻¹付近に吸収が認められる。各吸収帯から推定される官能基は、次のとおりである。2920cm⁻¹、2850cm⁻¹付近の吸収帯はメチル基またはメチレン基のC-Hの伸縮振動、1740cm⁻¹付近の吸収帯はC=Oの伸縮振動、1470、1370cm⁻¹付近の吸収帯はメチル基またはメチレン基のC-Hの対称変角振動、1170cm⁻¹付近の吸収帯は脂肪酸エステルのC-Oの伸縮振動、1110cm⁻¹付近の吸収帯はC-Oの伸縮振動、730cm⁻¹付近の吸収帯はポリメチレン鎖の骨格振動によるものと推定される。

4 考 察

(1)二の丸堀周辺の植生

F 3における花粉化石および種実遺体の検出状況をみると、ヒルムシロ属、サジオモダカ属、クロモ属、ミズアオイ属、スイレン属、ヒメビシ(ヒシ属)、フサモ属など、水生植物に由来する植物化石が特徴的に検出されている。これらの大半は、沈水しない浮葉植物であり、池沼など比較的水深のある水域に生育が多い種類である。したがって、これらの種類は二の丸堀内部の植生を反映しており、比較的水深のある場所にヒルムシロ属・クロモ属・スイレン属・ヒメビシ(ヒシ属)・フサモ属が、また掘縁辺部や導水経路など水深の浅い場所には、サジオモダカ属やミズアオイ属などの抽水植物が生育していたと思われる。また、二の丸堀付近には、イネ科を中心としてヤツリグサ科、クワ科、アザ科、オオバコ属、ヨモギ属などが生育していたと考えられる。一方、木本類では、花粉化石でみるとブナ属が多産し、マツ属(複雑管束亞属を含む)・コナラ亜属が検出される。このうち、マツ属複雑管束亞属については、上層で多数の葉が検出される。これより、二の丸堀付近には、ニヨウマツ類が生育していたと推定される。また、上層でスギの葉が、また下層でマタタビの種子がわずかであるが検出されていることから、これらの種類も二の丸堀の周辺に生育していた可能性がある。

これに対して、花粉化石で比較的多く検出されるブナ属やコナラ亜属は、後背地の植生を反映していると考えられる。すなわち、17~18世紀、後背山地などは、ブナ属やコナラ亜属などを中心とした落葉広葉樹林が成立していたであろう。なお、本地域における植生史研究例は少なく、山形盆地で行われた調査によると、完新世になると落葉広葉樹のブナ属・コナラ亜属の花粉が多産するが、完新世後半になるとマツ属・スギ属が増加することが明らかにされている(松岡ほか、1984)。

F 2になると、花粉化石の出現傾向はF 3層と大きく異なり、草本類がほとんど検出されなくなり、木本類のマツ属複雑管束亞属が多産し、スギ属を伴う。このように、短期間に植生が変化することから、人為的な影響を受けた結果と判断される。また、種実遺体でも、マツ属複雑管束亞属の葉が多産し、スギの葉・球果、サワラの葉が検出される。このような植

物化石の産状は、二の丸堀付近の極めて局地的な植生を反映しているといえる。したがって、18世紀頃になると、二の丸堀付近には、ニヨウマツ類やスギ・サワラなどの木本類が植栽されていた可能性がある。また、二の丸堀の内部には、浮葉植物のヒメビシや沈水植物のフサモ属などが生育していたと考えられる。ヒメビシの生育環境としては、水深1~2m程度の淀んだ水域に群生が多いことから、二の丸堀内もこのような水域環境であったと思われる。

(2)土器付着物の由来

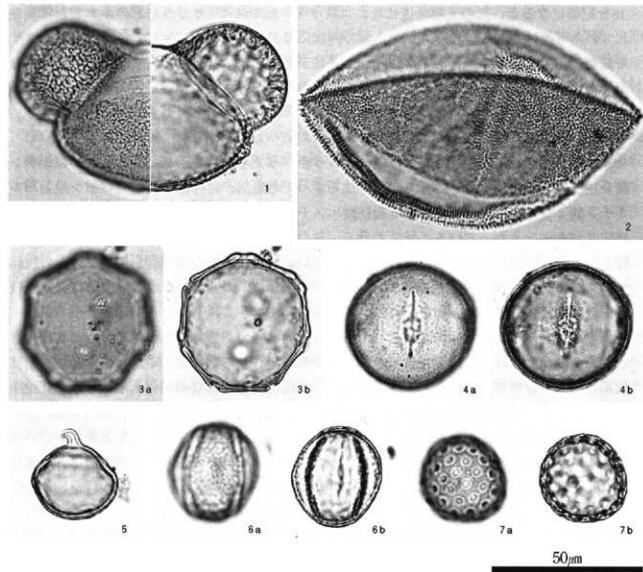
標準試料とした木口ウ、ミツロウは、木口ウがハゼノキの果皮から採取されるパルミチン酸を主成分とするのに対して、ミツロウはミツバチの腹部から分泌されるセロテン酸とパルミチン酸ミルとの混合物から成る脂肪酸エステルであるが、赤外吸収スペクトル結果はほぼ同じパターンとなっている。試料番号4・5の土器付着物の吸収スペクトルパターンを比較した場合、吸収パターンの一一致は認められない。特に決定的なのは、1170cm⁻¹付近の脂肪酸エステルのC-Oの伸縮振動および730cm⁻¹付近のポリメチレン鎖の骨格振動による吸収が、土器付着物では確認されない点である。

以上のことから、今回分析試料とした土器付着物は蠣である可能性が低く、他の有機化合物であると判断される。スペクトルパターンから推定される物質は、不飽和結合に富む脂肪族系の有機化合物である。また、試料を加熱した場合、油状物質が気化することから、油脂であることは確実である。脂肪酸分析やNMR(核磁気共鳴)などの有機分析の手法を用いれば、さらなる情報が得られるであろう。ただし、不飽和結合が多いことを考慮すれば、植物油脂である可能性が高いと推測される。このような点を考慮すると、この土器は灯明皿などとして利用されていた可能性もあり、考古学的な情報も含め、今後さらに検討を重ねたい。

引用文献

- 松岡功・阿久津純・真鍋健一・竹内貞子(1984) 山形盆地の第四系—特に地質年代と堆積環境について—. 地質学雑誌, 90, p.531-549.
山田富貴子(1986) 赤外線吸収スペクトル法. 「機器分析のてびき第1集」, p.1-18, 科学同人.

図版1 花粉化石(1)



1. マツ属複維管束亞属 (試料番号1)

3. クルミ属 (試料番号3)

5. スギ属 (試料番号1)

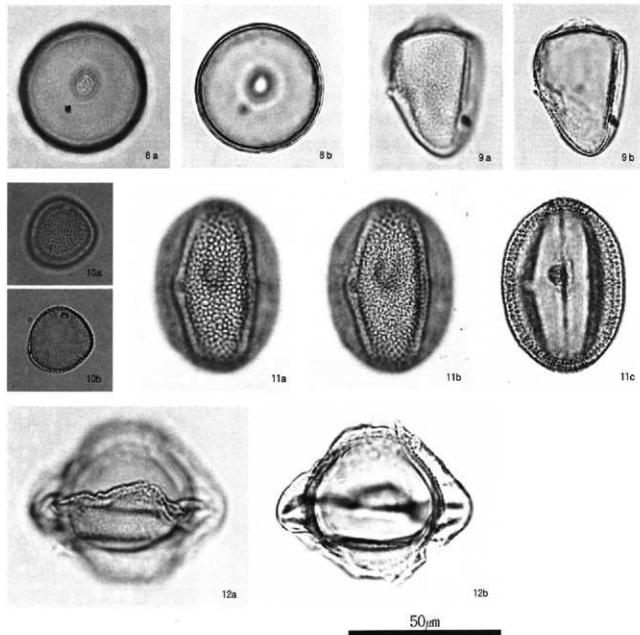
7. アカザ科 (試料番号3)

2. クロモ属 (試料番号3)

4. ブナ属 (試料番号3)

6. コナラ属コナラ亜属 (試料番号3)

図版1 花粉化石(1)



8. イネ科 (試料番号3)

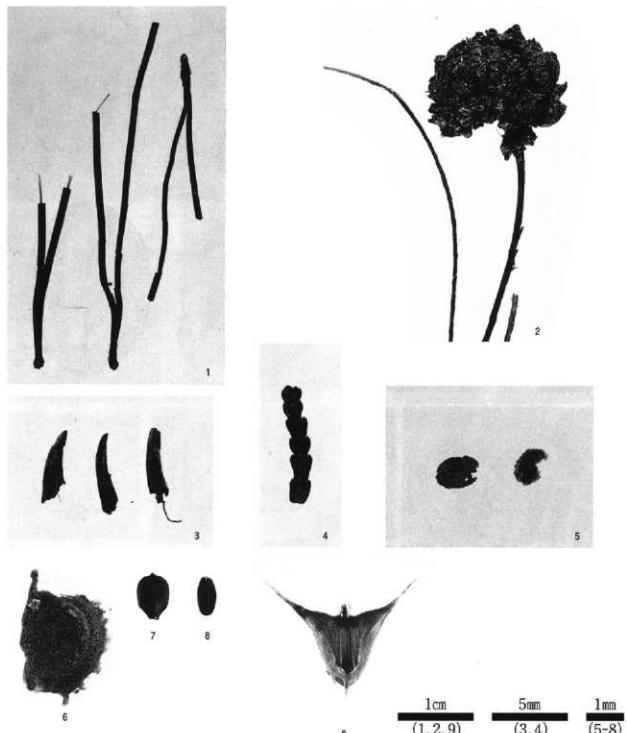
10. ヒルムシロ属 (試料番号3)

12. ヒシ属 (試料番号3)

9. カヤツリグサ科 (試料番号3)

11. ソバ属 (試料番号3)

図版3 種実遺体



1. マツ属複維管東亜属 (試料番号 1)
2. スギ (試料番号 1)
3. スギ (試料番号 1)
4. サワラ (試料番号 1)
5. マタタビ属 (試料番号 3)
6. ヒルムシロ属 (試料番号 3)
7. カヤツリグサ科 (試料番号 3)
8. ミズアオイ属 (試料番号 3)
9. ヒメビシ (試料番号 2)

米沢城跡出土鞘・柄の樹種同定

松葉 礼子 (パレオ・ラボ)

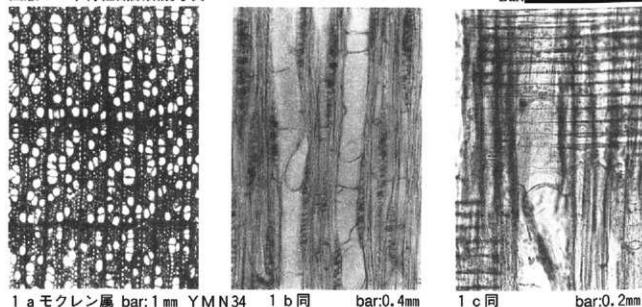
1 方法

同定には、木製品から切り欠いたサンプルから片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面、接線断面、放射断面の3方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定には、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。これらの内、各分類群を代表させる標本については写真図版にし、同定の証拠とする。なお、作成した木材組織プレパラートは、標本番号 (YMN33, 34) を付し株式会社パレオ・ラボで保管されている。

同定結果

YMN No.	遺物	樹種
YMN 33	脇差 鞘	モクレン属
YMN 34	脇差 柄	モクレン属

図版1 木材組織顕微鏡写真



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第66集

米沢城跡発掘調査報告書

1999年3月31日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 山形印刷株式会社

